『朱子語類』巻一四～一八訳注（六）

宇佐美文理・小笠智章・古勝亮・焦堃・中純夫・福谷彬

『朱子語類』巻一六「大学」三（58～131条）

傳五章釋格物致知（承前）

58条

問精粗。曰。如管仲之仁、亦謂之仁、此是粗處。至精處、則顔子三月之後、或違之。又如充無欲害人之心、則仁不可勝用。充無欲穿窬之心、則義不可勝用、害人與穿窬固為不仁不義、此是粗底。然其實一念不當、則為不仁不義處。　夔孫

〔校勘〕

○朝鮮古写本巻十六は本条を収録しない。

〔訳〕

「精粗」ということについて質問した。先生がおっしゃった。「（『論語』憲問篇の）管仲の仁もまた仁のことだというのは、（仁を）大ざっぱに説いたものだ。（仁の）精髄を説いたものについては、（『論語』雍也篇の）顔子が三ヶ月の後に、時として仁に違うことがある、という場合の仁が、それだ。また（『孟子』盡心下の）『人能く人を害せんと欲すること無きの心を充たせば、則ち仁勝げて用う可からず。人能く穿窬すること無からんするの心を充たせば、則ち義勝げて用う可からず。』というのの、『人を害する』ことと『穿窬する』こととは、不仁や不義のことに他ならないが、それは不仁不義を大ざっぱに説いたものだ。しかし実際には、わずかな間でも意念が正しい状態でなければ、取りも直さず不仁不義なのだ。」　林夔孫録

〔注〕

（1）「精粗」　ここでは、「粗」を「大ざっぱ」、「精」を「精髄」として理解した。以下を参照。『語類』巻十五、一三八条、周明作録（I 309）「又問。大學表裏精粗如何。曰。自是如此。粗是大綱、精是裏面曲折處。」

（2）「管仲之仁」　孔子が管仲の仁を認めた発言として以下の二つが

ある。『論語』「憲問」「子路曰。桓公殺公子糾、召忽死之、管仲不死。曰。未仁乎。子曰。桓公九合諸侯、不以兵車、管仲之力也。如其仁。如其仁。」（朱注）「如其仁、言誰如其仁者。又再言以深許之。蓋管仲雖未得為仁人、而其利澤及人、則有仁之功矣。」『論語』「憲問」「子貢曰。管仲非仁者與。桓公殺公子糾、不能死、又相之。子曰。管仲相桓公、霸諸侯、一匡天下、民到於今受其賜。微管仲、吾其被髪左衽矣。豈若匹夫匹婦之為諒也、自經於溝瀆而莫之知也。」（朱注）「諒、小信也。經、縊也。莫之知、人不知也。」但し一方で孔子は管仲に対して否定的評価も遺している。『論語』「八佾」「子曰。管仲之器小哉。或曰。管仲儉乎。曰。管氏有三歸、官事不攝、焉得儉。〔朱注「三歸、臺名。事見説苑。攝、兼也。家臣不能具官、一人常兼數事、管仲不然。皆言其侈。」〕然則管仲知禮乎。曰。邦君樹塞門、管氏亦樹塞門。邦君為兩君之好、有反坫、管氏亦有反坫。管氏而知禮、孰不知禮。〔朱注「屏謂之樹、塞猶蔽也。設屏於門以蔽内外也。好謂好會。坫在兩楹之間、獻酬飲畢、則反爵於其上。此皆諸侯之禮、而管仲僭之。不知禮也。」〕」

（3）「顔子三月之後或違之。」『論語』「雍也」「子曰。回也、其心三月不違仁、其餘則日月至焉而已矣。」（朱注）「三月、言其久。仁者、心之德。心不違仁者、無私欲而有其德也。日月至焉者、或日一至焉、或月一至焉、能造其域而不能久也。」

（4）「如充無欲害人之心…義不可勝用。」『孟子』「盡心」下「孟子曰。人皆有所不忍、達之於其所忍、仁也。人皆有所不為、達之於其所為、義也。人能充無欲害人之心、而仁不可勝用也。人能充無穿踰之心、而義不可勝用也。」朱注「充、滿也。穿、穿穴。踰、踰牆。皆爲盜之事也。能推所不忍、以達於所忍、則能滿其無欲害人之心、而無不仁矣。能推其所不爲、以達於所爲、則能滿其無穿踰之心、而無不義矣。」

（5）「一念」「わずかなの間」『語類』巻一、一二八条、葉賀孫（I 215）「靜坐久之、一念不免發動、當如何。」

59条

周問大學補亡、心之分別取舍無不切。曰。只是理徹了、見善、端的如不及、見不善、端的如探湯。好善、便端的如好好色、惡不善、便端的如惡惡臭。此下須連接誠意看。此未是誠意、是醞釀誠意來。　淳

謨錄云。此只是連著誠意說。知之者切、則見善真如不及、見不善真如探湯、而無纖毫不實故爾。

〔校勘〕

○朝鮮古写本巻十六は本条を収録しない。

○「惡不善、便端的如惡惡臭」　萬曆本、和刻本は三出する「惡」を全て「悪」に作る。

○「纖毫不實」　成化本は「毫」を「豪」に作る。

〔訳〕

周謨は『大学』の亡逸を補った部分（『大学章句』伝五章）の「心

の分別取舎切ならざる無し。」について質問した。先生が仰った。「理が透徹してしまいさえすれば、善を見ること、あたかも自分にまだ至らぬところが有るかのように切実にし（＝よりいっそう善に励み）、不善を見ること、あたかも熱湯に手を入れた時のように切実にする（＝熱湯からすぐ手を引っ込めるかのようにすみやかに不善を避ける）。そして、善を好んでは、目に心地よいものを好む時のように切実にし、不善を悪んでは、悪臭を悪む時のように切実にするのだ。これ以下（格物致知以下の工夫）は、「誠意」と関連させて読まなければならない。これ（格物致知の段階）はまだ誠意ではなく、誠意を醸成している段階なのだ。　陳淳録

周謨の記録には以下のように言う。これはただ誠意とつなげて説いているものだ。知ることが切実であれば、善を見ること、本当に自分にはまだ至らぬところがある、というようにし、不善をみること、本当に熱湯に手を入れた時のようにし、微塵も不実がないからだ。

〔注〕

（1）「只是理徹了」「理徹」は道理に透徹すること。『語類』には「看理徹」「見得理徹」等の用例がある。『語類』巻一一七、二五条、訓陳淳（Ⅶ 2815）「看理徹、則我與理一。然一下未能徹、須是浹洽始得。」『語類』巻一一八、五一条、訓與立黻（Ⅶ 2851）「只是見理不徹後如此。若見得理徹、自然心下無事。」

（2）「大學補亡」　朱子が現行の『大学』のテキストにおいて失われていると考え、それを補った「格物致知」に対する補伝（伝第五章）を指す。

（3）「心之分別取舎無不切」　現行の『大学章句』の伝第五章は「衆物之表裏精粗無不到、而吾心之全體大用無不明矣。」となっており、本条の解釈と一致しない。伝五章について、「心之分別取舎無不切」と説くのは、巻十六、五四条、葉賀孫録（Ⅱ 324）も同じ。なお、『朱文公文集』巻五〇「答周舜弼」第一〇書は、本条の質問者である周謨に対する書簡であるが、その中に、「用力之久而一旦廓然貫通焉、則理之表裏精粗無不盡、而心之分別取舎無不切。」とあり、これによって「心之分別取舎無不切」としていた時期が確かに存在していることがわかる。朱子の伝五章における解釈の変遷については吉原文昭『南宋学研究』（研文社、二〇〇二年）所収「大学章句研究」を参照。

（4）「見善、端的如不及。見不善、端的如探湯。」『論語』「季氏」「孔子曰。見善如不及、見不善如探湯。吾見其人矣、吾聞其語矣。」朱注「探、吐南反。真知善悪而誠好悪之。顔、曾、閔、冉之徒、蓋能之矣。語、蓋古語也。」

（5）「端的」「切実に」『語類』巻十、陳淳録（Ⅰ 172）「聖人言語如千花、遠望都見好。須端的真見好處、始得。」入矢義高監修『禅語辞典』（一九九一年、思文閣出版）を参照。

（6）「醞釀」「醸成する」『語類』巻一〇八、七一条、葉賀孫録（Ⅰ 2690）、「問治亂之機。曰。今看前古治亂、那裏是一時做得。少是四五十年、多是一二百年醞釀、方得如此。」

（7）「好善、便端的如好好色。悪不善、便端的如悪悪臭。」『大学章句』

伝第六章「所謂誠其意者、毋自欺也。如悪悪臭、如好好色、此之謂自謙、故君子必慎其獨也。」朱注「使其悪悪則如悪悪臭、好善則如好好色、皆務決去、而求必得之、以自快足於己、不可徒苟且以殉外而為人也。然其實與不實、蓋有他人所不及知而己獨知之者、故必謹之於此以審其幾焉。」

（8）「此下須連接誠意看」　格物致知の次に誠意が連接する必然性に関しては、後出の六九条にも「此繼於物格知至之後、故特言所謂誠其意者、毋自欺也。」とある。

60条

李問。吾之所知無不切。曰。某向説得較寛、又覺不切。今説較切、又少些寛舒意。所以又説道、表裏精粗無不盡也。自見得切字却約向裏面。　賀孫

〔校勘〕

○朝鮮古写本巻十六は本条を収録しない。

○「却約向裏面」　萬曆本、和刻本は「裏」を「裡」に作る。

〔訳〕

李氏が「吾の知る所切せざる無し」について質問した。先生がおっしゃた。「私は以前（「吾之所知無不切」として）説き方が比較的緩やかであったが、一面では切実さに欠けるとも感じていた。今は（「吾心之分別取舎無不切」として）説き方が比較的切実にはなったが、一面では緩やかさ伸びやかさの趣を欠いている。だから、さらに「表裏精粗盡くさざる無し」というのだ。自然と「切」の字が、内面に向かってかえって引き締められていくのがわかる。」　葉賀孫録

〔注〕

（1）「吾之所知無不切」　現行本の『大学章句』の伝五章の内容と異なるが、『語類』本条後半の「表裏精粗無不盡也」とともに、『大学章句』伝五章の旧稿の内容を示すものと思われる。当該箇所を「理之表裏精粗無不盡、而吾心之分別取舎無不切」に作る旧稿が存在したらしいことに関しては、五四条及び同条注を参照。「吾之所知無不切」は、その更に前段階の旧稿か。ただし、本条の「吾之所知無不切」の句は、伝五章の旧本である可能性の他に、大学経に対する朱注の旧本である可能性も考えられることは以下を参照。趙順孫『四書纂疏』の大学経に対する朱子の注「推極吾之知識、欲其所知無不盡也。」に対して「黄氏曰。章句本云欲其所知無不切也。今改切作盡。」とある。『四書纂疏』は引用の「黄氏」の名を明らかにしないが、『四庫提要』は姓名を挙げており、これによると黄氏とは、黄榦か黄士毅のことと考えられる。いずれにしても直接朱子の教えを受けた者であって、朱子生前の言説に基づくものと考えられる。なお『御纂朱子全書』巻八、大學二は、本条を引用した上で「案此條所舉是舊本」との注記を施している。

（2）「某向説得較寛」「向」は、先に、以前。「較」は、やや。

61条

安卿問全體大用。曰。體用元不相離、如人行坐。坐則此身全坐、便是體。行則此體全行、便是用。　道夫

〔校勘〕

○諸本異同無し。

〔訳〕

安卿（陳淳）が全体大用（心の本来の完全なる本質と、その偉大なる働き）について質問した。先生が仰った。「体用というのは本来、切り離せないのであって、ちょうど、人が歩いたり座ったりするのとに似ている。座っていれば、この身体は丸ごと座っているが、それがつまり「体」ということで、歩けばこの「体」が丸ごと歩くが、これがつまり「用」ということだ。」　楊道夫録

〔注〕

（1）「安卿」「語録姓氏」によると、「安卿」は、陳淳と林学履の両人の可能性が考えられる。田中謙二『朱門弟子師事年攷』は、楊道夫の師事期を、淳熙十六年（一一八九年）から紹熙三年（一一九二年）、林学履を紹熙四年（一一九三年）以降の師事としており重ならず、一方、陳淳の第一師事期は、紹熙元年（一一九〇年）から紹熙二年（一一九一）としており、楊道夫と陳淳の師事期は重なっている。よって、本条の「安卿」は陳淳を指すものと考えられる。

（2）「全體大用」「心の本来の完全なる本質と、その偉大なる働き」『語類』巻十四、七四条、沈僩録（Ⅰ261）に既出。『大学章句』伝第五章に「至於用力之久、而一旦豁然貫通焉、則衆物之表裏精粗無不到、而吾心之全體大用無不明矣。」とあり、本条はこれに関わる議論である。

（3）「體用元不相離」『伊川易伝』序「至微者理也、至著者象也。體用一源、顕微無間。」に基づく。「體用」についての同種の議論については以下を参照。『語類』巻十七、五〇条、徐寓録（Ⅱ386）「問。全體大用、無時不發見於日用之間。如何是體。如何是用。曰。體與用不相離。且如身是體、要起行去、便是用。赤子匍匐將入井、皆有怵惕惻隱之心。只此一端、體用便可見。如喜怒哀樂是用、所以喜怒哀樂是體。」

（4）「行坐」「行くこと、座ること」『文集』巻二二「乞宮觀状」「精神氣力、日見凋枯、行坐無力、語言少氣、思慮應接、失後忘前。」

62条

問。格物章補文處不入敬意、何也。曰。敬已就小學處做了。此處只據本章直說、不必雜在這裏。壓重了、不淨潔。　寓

〔校勘〕
○「雑在這裏」萬曆本、和刻本は「裏」を「裡」に作る。
○「壓重了、不淨潔。」朝鮮古写本は「不淨潔」の三字が無い。
○「寓」朝鮮古写本は「寓」の後に、「淳録同」とある。

〔訳〕
質問。「格物章の文を補った箇所（伝第五章）は、「敬」のことを入れてませんが、どうしてでしょうか。」先生が仰った。「「敬」というのは既に小学のところでやってしまっているのだ。この箇所はあくまでも（経文の格物致知に対する伝文としての）伝第五章としての本旨に即して直接に説いているのであり、必ずしもここで（「敬」を）交える必要はない。詰め込んでしまうと、簡潔でない。」　徐寓録

〔注〕
（1）「小學」「大学章句序」に「人生八歳、則王公以下、至於庶人之子弟、皆入小学」とあるように、上古の世では、まず小学で学んだ後に大学に入って学んだ、とされている。また既出の『語類』巻一四、一九条、魏椿録に「今人不曾做得小學工夫、一旦學大學、是以無下手處。」とあるように、朱子は小学を学んでいなければ、大学を学んでも成果がないと考えていた。また、『大学或問』下に、「聖人蓋有憂之、是以於其始教為之小學、而使之習於誠敬。」とあるように、朱子は、小学では「誠」や「敬」が学ばれた、としている。
（2）「壓重」「壓重」は「詰め込む」の意。
（3）「淨潔」「淨潔」は「簡潔」であること。

63条

問。所補致知章何不效其文體。曰。亦曾效而為之、竟不能成。劉原父却會效古人為文、其集中有數篇論、全似禮記。　必大

〔校勘〕
○朝鮮古写本巻十六は本条を収録しない。

〔訳〕
質問。「格物章の補文は、どうしてその（『大学』の）文体を模倣しなかったのですか。」先生が仰った。「以前まねて書いたこともあったが、結局果たせなかった。劉敞は（私とは）逆に古人を模倣して文章を書くことができ、その文集にいくつかの論述があるが、見事に『礼記』に似ている。」　呉必大録

〔注〕
（1）「何不效其文體」伝一章は「康誥曰」、伝二章は「湯之盤銘曰」、伝三章は「詩云」、伝四章は「子曰。聽訟、吾猶人也、必也使無訟乎。」で始まっており、経書の引用で説き起こす体裁を取るのに対して、伝五章は「所謂致知在格物者」で始まっており、体例体裁が異なること等を指すか。

（2）「劉原父」　劉敞、字原父、臨江新喻の人、慶暦六年の進士。文集に『公是集』がある。『語類』巻一三九、七〇条、呉振録（Ⅷ3313）「劉原父才思極多、湧將出來、每作文、多法古、絶相似。有幾件文字學禮記、春秋說學公穀、文勝貢父。」（貢父は、劉攽、字貢父、劉敞の弟。）劉敞は『礼記』の文体に似せて『儀礼』を注釈したが、朱子はこれに対して以下のような発言を残した。『語類』巻八五（儀禮總論）、七条、陳文蔚録（Ⅶ2194）「儀禮是經、禮記是解儀禮。如儀禮有冠禮、禮記便有冠義。儀禮有昏禮、禮記便有昏義。以至燕射之類、莫不皆然。只是儀禮有士相見禮、禮記却無士相見義。後來劉原父補成一篇。文蔚問。補得如何。曰。他亦學禮記下言語、只是解他儀禮。」。『語類』巻八五（儀禮總論）、一〇条、萬人傑録（Ⅵ2195）「劉原父補亡記、如士相見義、公食大夫義儘好。蓋偏會學人文字、如今人善為百家書者。又如學古樂府、皆好。意林是專學公羊、亦似公羊。其他所自為文章如雜著等、却不甚佳。」劉敞撰『公是集』巻三十七には「士相見義」「公食大夫義」「致仕義」「投壺義」があり、これらが劉敞が『礼記』の文体に模して書いた文章であると考えられる。

傳六章釋誠意

64条

誠其意、只是實其意。只作一箇虚字看、如正字之類。　端蒙

〔校勘〕

○朝鮮古写本巻十六は本条を収録しない。

○「只作一箇虚字看」　萬暦本、和刻本は「箇」を「个」に作る。

〔訳〕

「其の意を誠にす」とは、つまりその意識を実あるものとすることに他ならない。（「誠意」の「誠」は）一個の虚字と見なして読めば、「正す」という字と同じになってしまう。　程端蒙録

〔注〕

（1）「虚字」　実字と虚字については巻十五、一三九条、楊道夫録（Ⅰ309）を参照。「大學中大抵虚字多。如所謂欲、其、而后、皆虚字。明明德、新民、止於至善、致知、格物、誠意、正心、修身、齊家、治國、平天下、是實字。今當就其緊要實處著工夫。如何是致知、格物以至于治國、平天下、皆有節目、須要一一窮究著實、方是。」

65条

說許多病痛、都在誠意章。一齊要除了、下面有些小為病痛、亦輕可。若不除去、恐因此滋蔓、則病痛自若。　泳

〔校勘〕

○「一齊要除了」　呂留良本、伝経堂本、朝鮮整版本は底本に同じ。成化本、萬暦本、朝鮮古写本、和刻本は「要除」を「格物」に作る。朝鮮整版本巻末の「考異」には「要除、一作格物」とあり、また『朱子語類考文解義』の校勘には「要除　一作格物、按非是、下同」とある。「格物」に作る」諸本のうち一番古いのは呂留良本であるから、呂留良が意を以て改めた可能性もある。呂留良本は康熙刊本、朝鮮整版本は英祖四十七年（乾隆三十六年、一七七一）刊本、伝経堂本は光緒六年（一八八〇）賀瑞麟序刊本である。

〔訳〕

多くの弊害について言えば、それはみな「誠意」章にあるのだ。（誠意の段階で、多くの弊害を）一挙に取り除いてしまうべきであって（そうすれば）、その後（の工夫）においては、少しくらい弊害があっても、それはささいなものに過ぎない。もし、（誠意において）取り除いていなければ、恐らくはこれによって次第に蔓延して、弊害はそのままだ。　湯泳録

〔注〕

（1）「都在誠意章、一齊要除了」「一齊」は、一斉に、同時に、一挙に。朱熹は八条目全体の中で誠意を突破すべき最大の難関と考えていた。巻一五、八七条、楊道夫録（Ⅰ299）「知至意誠、是凡聖界分關隘。未過此關、雖有小善、猶是黒中之白。已過此關、雖有小過、亦是白中之黒。過得此關、正好著力進歩也。」同、八八条「某嘗謂誠意一節、正是聖凡分別關隘去處。若能誠意、則是透得此關。透此關後、滔滔然自在去為君子。不然、則崎嶇反側、不免為小人之歸也。」同、八九条、李方子録「論誠意、曰。過此一關、方是人、不是賊。又曰。過此一關、方會進。」（原注）「一本云。過得此關、道理方牢固。」

（2）「亦輪可」「輪可」は、ほんの些細な、ちょっとした。宋元の俗語。類似の語に「小可」「微可」がある。『語類』巻一〇六、外任、二六条、葉賀孫録（Ⅶ2647）「刺陝西義勇事、何故這箇人恁地不曉事。儂智高反、亦是輪可底事、何故恁地費力。」田中謙二『朱子語類外任編訳注』頁七四。

（3）「滋蔓」「段々と蔓延する」『左傳』隠公元年「不如早為之所、無使滋蔓。」

66条

問。誠意是如何。曰。心只是有一帶路、更不著得兩箇物事。如今人要做好事、都自無力。其所以無力是如何。只為他有箇為惡底意思在裏面牽繫。要去做好事底心是實、要做不好事底心是虚。被那虚底在裏面夾雜、便將實底一齊打壞了　賀孫

〔校勘〕

○「更不著得」　成化本、萬暦本、朝鮮古写本、和刻本は「著」を「着」に作る。

○「兩箇物事」　萬曆本、朝鮮古写本、和刻本は「箇」を「个」に作る。
○「他有箇為惡底意思」　萬曆本、朝鮮湖写本、和刻本は「箇」を「个」に作る。萬曆本、和刻本は「惡」を「悪」に作る。
○「只為他有箇」　萬曆本、和刻本、朝鮮古写本は、「箇」を「个」に作る。
○「在裏面牽繫」　萬曆本、和刻本は「裏」を「裡」に作る。朝鮮古写本はこの下に「又曰」の二字有り。
○「要去做好事底心」　朝鮮古写本は「去」字無し。
○「被那虚底在裏面夾雜」　成化本、朝鮮整版本、朝鮮古写本は「面」字がなく、朝鮮整版本は「考異」において「裏下一有面」と記す。

〔訳〕

質問。「誠意というのは、どういうことでしょうか。」先生が仰った。「心には一本の道筋が有るだけで、決して二つのものをくっつけられない。今時の人は善いことを行おうとしても、全く無力だ。その無力である理由は何だろうか。それは、彼に悪を行う意志が有って、それが心の中で引っ張っているからに他ならない。善いことを行おうとする心は「実」であり、善くないことを行おうとする心は「虚」である。かの「虚」であるものが心の中で混ざり合ってしまい、「実」であるものを同時にダメにしてしまうのだ。」　葉賀孫録

〔注〕

（1）「一帶路」「一本の道」。「帶」は細長いものを数える際の量詞。
（2）「更不著得兩箇物事」　ここでいう「兩箇物事」とは、例えば「要去做好事底心」と「要做不好事底心」であり、「著」（くっつける）とはその両方が「夾雜」すること。要するに誠意は「一心」であって「二心」ではないということ。巻一六、八八条、沈僩録（Ⅱ331）「又曰。自慊則一、自欺則二。自慊者、外面如此、中心也是如此、表裏一般。自欺者、外面如此做、中心其實有些子不願、外面且要人道好。只此便是二心、誠偽之所由分也。」
（3）「都自無力」「都自」は、全く。「都」一文字と同義。巻一五、八四条に既出。
（4）「被那虚底在裏面夾雜」「被」は受動態の文で行為者を導く。…に、…から（…される、…られる）。「夾雜」は、「混ざり合う」『語類』巻十三、一七条、魏椿録（Ⅰ224）「人之一心、天理存、則人欲亡。人欲勝、則天理滅、未有天理人欲夾雜者。」
（5）「將實底」「將」は「…を」の意。現代語の「把」に同じ。

〔参考〕

この条の後半は、以下の『語類』巻十三、九〇条、葉賀孫録（Ⅰ236）と一致する。「要做好事底心是實、要做不好事底心是虚。被那虚底在裏夾雜、便將實底一齊打壞了。」

67条

詣學升堂云云、教授請講說大義。曰。大綱要緊、只是前面三兩章。君子小人之分、却在誠其意處。誠於為善、便是君子、不誠底便是小人、

更無別說。　琮

〔校勘〕

○朝鮮子諸本巻十六は本条を収録しない。

○「云云」　成化本、萬暦本、和刻本は小字で一行で記す。朝鮮整版本は小字双行で「云云」と記す。呂留良本、伝経堂本は底本に同じ。この部分は黎靖徳が節略した可能性がある。

〔訳〕

（先生は）州学に行かれ、講堂に上られた、中略。教授は大義について講義することをお願いした。先生。「大綱であり重要なところは、最初の二、三章（三綱領を指す）だ。君子と小人の区別については、「其の意を誠にす」ということにある。善を為すことに誠実なのがつまり君子であり、誠実でないのがつまり小人であり、他に言うことは何もない。」　呉琮録

〔注〕

（1）「教授」　ここでは潭州州学教授。教授は州学の教官。『宋史』巻一六七、職官志「教授」

（2）「要緊」「重要なところ」『語類』巻十四、三七条、葉賀孫録（Ⅰ255）に既出。

（3）「前面三兩章」「三兩」は「兩三」と同じで二～三。

（4）「君子小人之分、却在誠其意處」『語類』巻一五、八八条、周謨録（Ⅰ299）「某嘗謂誠意一節、正是聖凡分別關隘去處。若能誠意、則是透得此關。透此關後、滔滔然自在去為君子。不然、則崎嶇反側、不免為小人之歸也。」同、九〇条、龔蓋卿録「意誠只是要情願做工夫。…未過此一關、猶有七分是小人。」

〔参考〕

『語類』巻一〇六、四〇条、呉琮録（Ⅷ2654）に、本条と内容がほぼ一致し、やや詳細な記述が見える。「在潭州時詣學。陞堂以百數。籤抽八齋、每齋一人出位講大學一章。講畢、教授以下請師座講說大義。曰。大綱要緊、只是前面三兩章。君子小人之分、却在誠其意處。誠於為善、便是君子。不誠底、便是小人、更無別說。　琮」

巻十六、六七条は、この巻一〇六、呉琮録を省略したものであり、また巻一〇六、呉琮録は、朱子が知潭州として潭州に赴任していた時期の講義の記録であることがわかる。朱子は紹熙四年（一一九三年）十二月に知潭州・荊湖南路経略安撫使に任命され、翌年の五月五日に、潭州すなわち湖南省長沙に着任した。八月には寧宗の即位に伴って臨安で煥章閣待制兼侍講を命ぜられるので、本条は、紹熙五年（一一九四）五月五日から八月に至る、およそ三ヶ月間に行われた講義を記録したものということになる。（以上は田中謙二『朱子語類外任篇訳注』一五一頁参照。）

68条

器遠問。物格、知至了、如何到誠意又說毋自欺也。毋者、禁止之辭。曰。物既格、既至、到這裏方可著手下工夫。不是物格、知至了、下面許多一齊掃了。若如此、却不消說下面許多。看下面許多、節節有工夫。賀孫　自欺

〔校勘〕

○「到這裏」　萬曆本、和刻本は「裏」を「裡」に作る。

○「著手」　成化本、萬曆本、朝鮮古写本、和刻本は「著」を「着」に作る。

○「賀孫　自欺」　朝鮮古写本には「自欺」の二字無し。

〔訳〕

曹叔遠が質問した。「すでに物が格って、知が至ってしまっているのに、どうしてその上誠意の段に到って更に『自ら欺くこと毋かれ』と説くのでしょうか。『毋』というのは禁止の辞でしょうか。」先生が仰った。「物が既に至り、知が既に至り、ここに到って初めて実際に工夫することができるのだ。物が至り、知が至ってしまえば、その後のいくつもの節目は一挙にとっぱらってしまう、というのではない。もしそうであれば、かえってその後の多くの節目を説く必要がないはずだ。その後にいくつもの節目があるのを見るに、一節一節に工夫があるのだ。」　葉賀孫録　「自欺」の句について

〔注〕

（1）「器遠」　曹叔遠、器遠は字。巻十五、一条、葉賀孫録（Ⅰ282）に既出。

（2）「毋自欺」『大学章句』伝六章「所謂誠其意者、毋自欺也。」朱注「毋者、禁止之辭。自欺云者、知為善以去悪、而心之所發有未實也。」

（3）「方可著手下工夫」　「方」は、はじめて。「著手」は着手する。実際に手がける。「下工夫」は工夫に取り組む、実践する。

（4）「掃了」　「とっぱらってしまう」『語類』巻十四、六二条、葉賀孫録（Ⅰ260）「吾儒更著讀書、逐一就事物上理會道理。他便都掃了這箇。他便恁地空空寂寂、恁地便道事都了。」

（5）「不消…」　「…する必要がない」巻十四、七条、陳淳録（Ⅰ250）に既出。

（6）「節節有工夫」　「節節」は、一節一節、随処に、逐一に。

69条

亞夫問。欲正其心者、先誠其意。此章當說所以誠意工夫當如何。曰。此繼於物格、知至之後、故特言所謂誠其意者、毋自欺也。若知之已至、則意無不實。惟是知之有毫末未盡、必至於自欺。且如做一事當如此、決定只著如此做、而不可以如彼。若知之未至、則當做處便夾帶這不當做底意在。當如此做、又被那要如彼底心牽惹、這便是不實、便都做不成。　賀孫

〔校勘〕

○「亞夫問」　朝鮮古写本は、「亞夫問」の後に、「誠意章云」の四字有り。
○「毫末未盡」　成化本は「毫」を「豪」に作る。
○「決定只著」　成化本、萬暦本、朝鮮古写本、和刻本は、「著」を「着」に作る。
○「要如彼底心」　朝鮮古写本は「心」を「心下」に作る。
○「賀孫」　朝鮮古写本は、「賀孫」の後に「○誠意章皆在兩个自字上用功夫人傑」とある。

〔訳〕

亞夫（晏淵）が質問した。「「其の心を正さんと欲する者は、先ず其の意を誠にす。」この章は誠意を行う方法としての工夫はいかにすべきか、ということを説いたものに違いありません。」

先生が仰った。「これは、物が格り、知が至った後に続くから、「所謂其の意を誠にする者は、自ら欺く毋かれ」と殊更に言うのだ。もし、知ることが極限にまで至っていれば、意思は誠実でないものない。ただ知ることにおいて、ほんの少しでも盡くしていない点があれば、必ず「自ら欺く」という事態に至るのだ。ちょうど、あることを行うのにはこのようにすべきであるという時、必ずやひたすらこのようにすべきなのであって、あのようにはしてはならない、というのと同じだ。もし知が未だ至っていなければ、しなければならない、というところに、したくないという意志がまぎれこんでしまうのだ。このようにしなければならないという時に、またあのようにしようとする心に引っ張られてしまうと、これでは実ではなく、何をやってもなしとげられないのだ。」　葉賀孫録

〔注〕

（1）「亞夫」　晏淵、字亞夫、号蓮塘、涪陵人。『宋元學案補遺』巻六十九所収。『語録姓氏』は、晏淵の記録を、癸丑（一一九三年）のものとする。

（2）「決定只著如此做」「決定」は、きっと、必ず。「著」は、～すべきである、～せねばならない。『語類』巻一四、三〇条、葉賀孫録「看大學、固是著逐句看去。」『語類』巻六一、呂燾録（Ⅳ 1484）「守常底固是是。然到守不得處、只著變、而硬守定則不得。」

（3）「夾帶這不當做底意在」「夾帶」は、混入する、持ち込む。「在」は断定の語気を示す句末の助字。

（4）「這便是不實」　六六条「要去做好事底心是實、要做不好事底心是虚。」

（5）「都做不成」「都」は、全て。「做不成」は為し遂げることができない。「～不成」は、～し遂げることができない。

70条

問。知不至與自欺者如何分。曰。小人閒居爲不善、無所不至。見君子而后厭然、揜其不善、而著其善、只爲是知不至耳。

問。當其知不至時、亦自不知其至於此、然其勢必至於自欺。曰。勢必至此。

頃之、復曰。不識不知者、却與此又別。論他箇、又却只是見錯、故以不善爲善、而不自知耳。其與知不至而自欺者、固是五十步笑百步、然却又別。問。要之二者、其病源只是欠了格物工夫。曰。然。　道夫

〔校勘〕

○「小人閒居」　成化本、和刻本は「閒」を「間」に作り、朝鮮古写本は「問」に誤る。

○「見君子而后」　成化本、萬曆本、朝鮮古写本、朝鮮整版本、和刻本は「后」を「後」に作る。

○「然其勢」　朝鮮古写本は「然却其勢」に作る。

○「論他箇」　萬曆本、和刻本は「箇」を「个」に作る。朝鮮古写本は「他箇」に作る。

〔訳〕

質問する。「知が至っていないのと、自ら欺くというのは、どのように区別するのでしょうか。」おっしゃる。「（『大学』に）「小人閒居して不善を為し、至らざる所なし。君子を見て而して后に厭然として、其の不善を揜い、而して其の善を著す」というのは、知が至っていないからである。」

質問する。「知が至っていない時には、自分自身、自ら欺くことに至るとは分かっていないのですが、しかし、勢い必ず自ら欺くということになるのでしょうか。」おっしゃる。「勢い必ずそうなる。」

しばらくして、またおっしゃる。「知らず識らず（不善を行ってしまう）者は、これ（知が至っておらず自らを欺く者）とはまた異なる。それについていえば、ただ認識が間違っているので、不善を善であると考え、自分では分かっていないだけなのだ。その者と、知が十分でなく自らを欺いている者とは、もとより五十歩百歩の違いであるが、やはり違いはあるのだ。」たずねる。「つまりは、両者の病源とは、格物の修錬が足りないということですね。」おっしゃる。「その通り。」

楊道夫録

〔注〕

（1）「知不至」　『大學』經「物格而后知至、知至而后意誠。」注「知至者、吾心之所知無不盡也。知既盡、則意可得而實矣。」

（2）「小人閒居爲不善、無所不至。見君子而后厭然、揜其不善、而著其善」　『大學章句』傳六章「小人閒居爲不善、無所不至。見君子而后厭然、揜其不善、而著其善。人之視己、如見其肺肝然、則何益矣。此謂誠於中、形於外、故君子必愼其獨也。」注「閒、音閑。厭、鄭氏讀爲黶。閒居、獨處也。厭然、消沮閉藏之貌。此言小人陰爲不善、而陽欲揜之、則是非不知善之當爲與惡之當去也、但不能實用其力以至此耳。然欲揜其惡而卒不可揜、欲詐爲善而卒不可詐、則亦何益之有哉。此君子所以重以爲戒、而必謹其獨也。」

（3）「不識不知者、却與此又別」　「不識不知」は、「知らず識らずのうちに」。『毛詩』大雅・文王之什・皇矣「帝謂文王、予懷明德。不大聲以色、不長夏以革。不識不知、順帝之則。」「識らず知らず」（不識不知）不善を行ってしまうものと、「知が至っておらず」（知不

至）不善を行ってしまうものは、異なるということ。前者は、そもそも認識が間違っていて（見錯）善悪をはき違えてしまう（以不善爲善）ので、不善を犯していてもその自覚がない（不識不知）。一方、後者は、善悪是非の判断はできているが、その認識が切実ではない（真知ではない）ため、自らを欺いて不善を犯してしまう。また次のものを参照。『朱文公文集』巻五九「答趙恭父」第四書「又論亦有眞知而自欺者、此亦未然。只此自欺、便是知得不曾透轍。此間昨晩有嘗鼠藥而中毒者、幾致委頓。只此便是不曾眞知砒霜能殺人、更何疑耶。」

（4）「他箇」「あれ」または「あの」。『語類』巻十、一〇〇条、呂燾録（Ⅰ175）「千載而下、讀聖人之書、只看得他箇影象。大概路脈如此。」同書、巻一二四、一二条、楊道夫録（Ⅷ2970）「有自象山來者。先生問。子靜多説甚話。曰。却如時文相似、只連片滾將去。…先生曰。信如斯言、雖聖賢復生與人説、也只得恁地。自是諸公以時文之心觀之、故見得它箇是時文也。便若時文中説得恁地、便是聖賢之言也。公也須自反、豈可放過。」『語類』の用例では、後ろに名詞を伴うものが多く、名詞用法は少ない。

（5）「見錯」　理解を間違える、認識を誤る。『語類』巻九九、三七条、鄭可學録（Ⅶ2538）「問。横渠有「清虚一大」之説、又要兼清濁虚實。…問。『西銘』所見又的當、何故却於此差。曰。伊川云。譬如以管窺天、四旁雖不見、而其見處甚分明。渠他處見錯、獨於『西銘』見得好。」

（6）「五十歩笑百歩」　『孟子』「梁惠王」上「孟子對曰。王好戰、請以戰喩。填然鼓之、兵刃既接、棄甲曳兵而走。或百歩而後止、或五十歩而後止。以五十歩笑百歩、則何如。」

71条

問劉棟。看大學自欺之説如何。曰。不知義理、却道我知義理、是自欺。先生曰。自欺是箇半知半不知底人。知道善我所當爲、却又不十分去爲善。知道惡不可作、却又是自家所愛、舍他不得。這便是自欺。不知不識、只喚欺不知不識、却不喚做自欺。　道夫

〔校勘〕

○「問劉棟」　朝鮮古写本は「先生問劉棟」に作る。
○「曰不知義理」　朝鮮古写本は「曰」を「云」に作る。
○「自欺是箇」　萬暦本、朝鮮古写本、和刻本は「箇」を「个」に作る。
○「却又不十分去爲善」　朝鮮古写本は「分」を「成」に作る。
○「只喚欺」　成化本、朝鮮古写本、朝鮮整版本、和刻本は「欺」を「做」に作る。萬暦本、呂留良本、伝経堂本は底本に同じ。

〔参考〕

本条は、眞德秀『西山讀書記』巻一七に「自欺是箇半知半不知底人。知道善我所當爲、却又不十成去爲善。知道惡不可作、却又自家所愛、捨他不得。這便是自欺。」と引かれる。また眞德秀『四書集編』、趙順孫『四書纂疏』などにも引かれるが、「不知不識」以下は、いずれも「不

知不識、只喚做」となっている。

〔訳〕

（先生が）劉棟に質問する。「『大学』の「自ら欺く」という説をどのように理解するか。」答える。「義理をわかっていないのに、自分は義理が分かっていますというのが、自ら欺くということです。」

先生がおっしゃる。「「自ら欺く」というのは、半ば分かっていて半ば分かっていない者のことである。善行を行うべきであることを自ら知っていながら、十分に善行を行わず、悪行は行ってはいけないことを知っていながら、自ら（それを）愛着するあまり、悪行を捨て去ることができない、こういうのが自らを欺くということだ。知らず識らずに（無自覚なまま）やっているのは、ただ「知らず識らず」とだけいい、「自らを欺く」とはいわない。」　楊道夫録

〔注〕

（1）「劉棟」　陳栄捷『朱子門人』に収める（三一三～三一四頁）。字・貫籍など未詳。

（2）「半知半不知」　『語類』巻九七、五六条、黄榦録（Ⅶ 2491）「伯豊問。程子曰「覺悟便是信」、如何。曰。未覺悟時、不能無疑、便半信半不信。已覺悟了、別無所疑、即是信。」

（3）「知道善我所當爲…知道悪不可作…」　『語類』巻一五、一〇一条、沈僩録（Ⅰ 302）「問。物未格時、意亦當誠。曰。固然。豈可説物未格、意便不用誠。自始至終、意常要誠。如人適楚、當南其轅。豈可謂吾未能到楚、且北其轅。但知未至時、雖欲誠意、其道無由。如人夜行、雖知路從此去、但黑暗行不得。所以要得致知。知至則道理坦然明白、安而行之。今人知未至者、也知道善之當好、悪之當悪。然臨事不如此者、只是實未曾見得。若實見得、自然行處無差。」

（4）「十分」　朝鮮古写本、眞德秀『西山讀書記』には「十成」に作る。意味は同じ。

（5）「不知不識、只喚欺不知不識、却不喚做自欺」　校勘記に示したとおり、他の版本では「只喚做」に作る。ここでは、「做」に読みかえた。「喚」は、よぶ、称する。

72条

或問誠其意者毋自欺。曰。譬如一塊物、外面是銀、裏面是鐵、便是自欺。須是表裏如一、便是不自欺。然所以不自欺、須是見得分曉。譬如今人見烏喙之不可食、知水火之不可蹈、則自不食不蹈、如寒之欲衣、飢之欲食、則自是不能已。今人果見得分曉、如烏喙之不可食、水火之不可蹈、見善如飢之欲食、寒之欲衣、則此意自實矣。　祖道

〔校勘〕

○「外面是銀、裏面是鐵」　成化本、朝鮮古写本は「面」を「面」に作る。萬曆本、和刻本は「裏」を「裡」に作る。

○「此意自實矣」　朝鮮古写本は「自」を「自是」に作る。

〔訳〕

ある者が、「その意を誠にするとは、自らを欺かないことである」について質問する。おっしゃる。「たとえばひとかたまりのものがあるとして、表面は銀なのに、中身は鉄であるのは、つまり「自ら欺く」ということである。表裏が同じくなるようにしてこそ、自ら欺かないということなのである。だから自ら欺かないようにするには、はっきりと認識する必要がある。

たとえば、人は、附子を食べてはいけないことや、水や火を踏み歩いてはいけないことを知っているので、自ら食べたり踏んだりはせず、寒い時には服を着ようとし、お腹が空けば食べようとするのは、自ずから已むことができないようなものである。もし人が、（悪に対しては）附子を食べてはならず、水や火を踏み歩いてはならないようであり、善に対しては、お腹が空いた時に食べようとし、寒い時に服を着ようとするように、はっきりと（切実に）認識すれば、これが意が自ずから誠であるということである。」　曾祖道録

〔注〕

（1）「一塊物」「塊」は量詞。『寒山詩』第五八首「我見百十狗、箇箇毛髯鬚。卧者渠自卧、行者渠自行。投之一塊骨、相與哽哢爭。良由爲骨少、狗多分不平。」

（2）「見烏喙之不可食、知水火之不可蹈」　悪行をなすべからざることをはっきりと認識することの喩え。「烏喙（うかい）」は、トリカブト、附子。『戰国策』「燕策」一「人之飢所以不食烏喙者、以爲雖偸充腹而與死同患也。」この二つの喩えは、卷一五、一四六条に既出。「問。知至了意便誠、抑是方可做誠意工夫。曰。…且如這一件事知得不當如此做、末梢又却如此做、便是知得也未至。若知得至時、便決不如此。如人既知烏喙之不可食、水火之不可蹈、豈肯更試去食烏喙、蹈水火。若是知得未至時、意決不能誠。」同条の注（6）および（7）を参照。

（3）「如寒之欲衣、飢之欲食」　善行をなすべきことをはっきりと認識することの喩え。この喩えは、卷一四、一五七条に既出。「或問定靜安慮四節。曰。物格、知至、則天下事事物物皆知有箇定理。定者、如寒之必衣、飢之必食、更不用商量。云云」同条の注（3）を参照。善を行うことと結びつけたものとしては、朱文公校『韓昌黎先生集』卷四〇「擧張正甫自代狀」「禀正直之性、懷剛毅之姿、嫉惡如仇讎、見善若飢渴。」

（4）「自是」「おのずから」。

（5）「果」「もし」。

〔参考〕

本条は、眞德秀『四書集編』および胡渭『大學翼眞』に引かれる。『四書集編』は、朝鮮古写本と同じく、「此意自是實矣」に作る。

73条

自欺、非是心有所慊、外面雖爲善事、其中却實不然、乃自欺也。譬

如一塊銅、外面以金裹之、便不是眞金。　人傑

〔校勘〕

○「外面雖爲善事」　朝鮮古写本は「外」の前に「盖」字あり。成化本、朝鮮古写本は「面」を「面」に作る。

〔訳〕

「自らを欺く」とは、心が快く満ち足りた状態でなく、そと見には善いことを行っているようでも、中身は実際にはそうではないというのが、「自らを欺く」ということである。たとえば、ひとかたまりの銅があるとして、外側は金で覆い包んであったとしても、中身は本物の金ではないようなものである。　万人傑録

〔注〕

(1)「自欺、非是心有所慊」「自欺とは、心が快くない（満足していない）ということである。」『大學章句』傳六章「所謂誠其意者、毋自欺也。如惡惡臭、如好好色。此之謂自謙。故君子必愼其獨也。」注「謙讀爲慊、苦劫反。…謙、快也、足也。」『孟子』「公孫丑」上「敢問何謂浩然之氣。曰。難言也。其爲氣也、至大至剛、以直養而無害、則塞于天地之間。其爲氣也、配義與道。無是、餒也。是集義所生者。非義襲而取之也。行有不慊於心、則餒矣。」集注「…慊、快也、足也。言所行一有不合於義、而自反不直、則不足於心而其體有所不充矣。」『大學』の「自慊」と『孟子』の「不慊於心」の「慊」の訓詁は、ともに「快也、足也」であるが、朱子はそれぞれにニュアンスの違いがあるとする。本巻八三条に詳しい。「自欺」と「自慊」の関係については、本巻八七条を参照。

(2)「譬如一塊銅、外面以金裹之、便不是眞金」　表面は金だが中身は銅だとする本条の譬喩は、本巻七二条で、「表面は銀だが中身は鉄」と喩えるのに同じ。

74条

所謂誠其意者、毋自欺也。注云。心之所發、陽善陰惡、則其好善惡惡、皆爲自欺而意不誠矣。而今説自欺、未説到與人説時、方謂之自欺。只是自家知得善好要爲善、然心中却覺得微有些没緊要底意思、便是自欺、便是虛僞不實矣。

正如金已是眞金了、只是鍛鍊得微不熟、微有些渣滓去不盡、顏色或白或青或黄、便不是十分精金矣。顏子有不善未嘗不知、便是知之至。知之未嘗復行、便是意之實。

又曰。如顏子地位、豈有不善。所謂不善、只是微有差失、便能知之。才知之、便更不萌作。只是那微有差失、便是知不至處。　僩

〔校勘〕

○「陽善陰惡」　成化本、萬曆本、和刻本は「陰」を「陰」に作る。

○「鍛鍊」　成化本、萬曆本、朝鮮古写本、朝鮮整版本、和刻本は「煉」に作る。

○「微有些渣滓」　成化本、萬暦本、朝鮮古写本、朝鮮整版本は「渣」を「査」に作る。

○「只是那微有差失」　朝鮮古写本は「是」を「他」に作る。

〔訳〕

（『大学』伝六章にいう）「所謂其の意を誠にすとは、自ら欺くこと母れなり。」注に、「心の発する所、陽には善にして陰には悪なれば、則ち其の善を好み悪を悪むこと、皆な自ら欺きて意誠ならざると為す」という。いま「自ら欺く」というのは、まだ他人に話していない時（独りの場合）に、「自ら欺く」というのである。自ら善行を行うべきことを知っていながら、かえって心の中で少しでも重要ではないと考えるのは、つまり自ら欺くということであり、偽りであって不実であるということだ。

まさしく、金が本物の金であったとしても、精錬して少しでも十分でないところがあり、少しでも不純物が取り尽くされていなければ、その色は白くなったり青くなったり黄色くなったりして、それは十分に精錬された金ではない。（程伊川はいう、）顔回は、不善があれば、決してそれを知らなかったことはなかったというのが、知が至っているということであり、（不善を）知れば、それを再び行うことは決してなかったというのが、意が誠実であるということである。

また（程伊川は）、「顔回の境地には、不善などあろうか。いわゆる不善とは、わずかでも間違いがあれば、すぐにそれに気づくのだ。少しでも気づけば、ただちに全く萌すことはしない」という。その「わずかでも間違いがあれば」というのが、知が至っていないということである。」　沈僩録

〔注〕

（1）「所謂誠其意者毋自欺也、注云、心之所發、陽善陰悪、則其好善悪悪、皆爲自欺而意不誠矣」　現行本『大学章句』のこの部分の注は、「誠其意者、自脩之首也。毋者、禁止之辭。自欺云者、知爲善以去悪、而心之所發、有未實也。…言欲自脩者知爲善以去其悪、則當實用其力、而禁止其自欺。」となっている。朱子は、『大学』伝六章の当該箇所の注を何度も書き直したようである。『語類』本巻の他条に、これに関する議論が見える。本巻、八八条、沈僩録「問。「誠其意者、毋自欺也。」近改注云。「自欺者、心之所發、若在於善、而實則未能、不善也。」若字之義如何。」同、一〇七条、沈僩録「問。誠意章自欺注、今改本恐不如舊注好。曰。何也。曰。今注云「心之所發、陽善陰悪、則其好善悪悪、皆爲自欺而意不誠矣。」恐讀書者不曉。又此句、或問中已言之、却不如舊注云「人莫不知善之當爲、然知之不切、則其心之所發、必有陰在於悪而陽爲善以自欺者。故欲誠其意者無他、亦曰禁止乎此而已矣。」此言明白而易曉。曰。不然。…。」同、一〇八条、沈僩録「敬子問。「所謂誠其意者、毋自欺也。」注云「外爲善而中實未能免於不善之雜。」某意欲改作「外爲善而中實容其不善之雜」、如何。」これらを整理すれば、次の通りである。

「近改注」（八八条）「自欺者、心之所發、若在於善、而實則未能、不

善也。」

「舊注」（一〇七条）「人莫不知善之當爲。然知之不切、則其心之所發、必有陰在於惡而陽爲善以自欺者。故欲誠其意者、無他、亦曰禁止乎此而已矣。」

「今注」（一〇七条）「心之所發、陽善陰惡、則其好善惡惡、皆爲自欺而意不誠矣。」

「敬子問）注」（一〇八条）「外爲善而中實未能免於不善之雜。」

現行本注　「誠其意者、自脩之首也。毋者、禁止之辭。自欺云者、知爲善以去惡、而心之所發有未實也。…言欲自脩者知爲善以去其惡、則當實用其力、而禁止其自欺。」

吉原文昭『南宋学研究』（研文社、二〇〇二年）、六八〇～六八一頁を参照。

（2）「而今説自欺、未説到與人説時、方謂之自欺」「未説到與人説時」が難解であるが、「まだ他人に話していない時」と理解した。他者に対して偽り欺くのではなく、自分自身を欺くことが「自欺」である。どちらかの「説」は衍字かも知れない。「與」は動作が向けられる対象を表す助字。

（3）「已是」　すでに。

（4）「顔色」　いろ。現代漢語の「顔色」に同じ。『杜工部集』「秋雨歎」其一「雨中百草秋爛死、階下決明顔色鮮。」

（5）「精金」　不純物が取り除かれ、十分に精錬された金。『語類』巻八〇、萬人傑録（Ⅵ 2090）「陸子靜看得二程低、此恐子靜看其説未透耳。譬如一塊精金、却道不是金。非金之不好、蓋是不識金也。」

（6）「顔子有不善未嘗不知、便是知之至、知之未嘗復行、便是意之實」

程子の言葉。『論語集注』「雍也」「哀公問。弟子孰爲好學。孔子對曰。有顔回者好學、不遷怒、不貳過。不幸短命死矣。今也則亡、未聞好學者也。」集注「程子曰。顔子之怒、在物不在己、故不遷。有不善、未嘗不知、知之、未嘗復行、不貳過也。」『河南程氏外書』にも見える。巻二（365）「大學之道、在明其明德。明德乃止於至善也。知既至、自然意誠。顔子有不善、未嘗不知、知之至也。知之至故、未嘗復行。他人復行、知之不至也。」典拠は、『易』「繫辭下」「君子知微知彰、知柔知剛、萬夫之望。子曰。顔氏之子、其殆庶幾乎。有不善未嘗不知、知之未嘗復行也。」

（7）「如顔子地位、豈有不善。所謂不善、只是微有差失、便能知之。才知之、便更不萌作」　注（6）に同じく、『論語集注』「雍也」篇に引かれる程子の言葉。集注「程子曰。…又曰。如顔子地位、豈有不善。所謂不善、只是微有差失。纔差失、便能知之。纔知之、便更不萌作。」『河南程氏外書』巻五（376）にも見え、程伊川の言葉である。

（8）「地位」　境地。巻一四、巻一五に既出。

（9）「才…便…」　「少しでも…すれば…だ」。

（10）「更不」　「全然…しない」。否定の強調。

（11）「萌作」　萌す。「萌動」に同じ。『語類』巻三〇、四六条、輔廣録（Ⅶ 774）「問。黎兄疑張子謂「慊於己者、不使萌於再」、云「夫子只説「知之未嘗復行」、不是説其過再萌於心。」廣疑張子之言尤加精密。至程子説「更不萌作」、則兼説「行」字矣。曰。萌作亦只

是萌動。蓋孔子且恁大體説。至程子・張子、又要人會得分曉、故復如此説到精極處。」

75条

所謂自欺者、非爲此人本不欲爲善去悪。但此意隨發、常有一念在内阻隔住、不放教表裏如一、便是自欺。但當致知。分別善悪了、然後致其愼獨之功、而力割去物欲之雜、而后意可得其誠也。　壯祖

〔校勘〕

○朝鮮古写本は、本条の前に「先生忽言。或人問。自慊之説不合將好善悪悪毎欲欺人爲自欺。因曰」の二七字あり。

○「愼獨」　底本の中華書局本のみ「愼」に作り、他本は「謹」に作る。

○「壯祖」　朝鮮古写本は「處謙」に作る。處謙は、李壯祖の字。

〔訳〕

いわゆる「自ら欺く」というのは、その人がもとから善を行い悪を去ろうとしないということではない。ただ、この（善を行い悪を去る）気持ちがおこるとすぐに、ある一念が内面においてそれを阻み隔絶させてしまい、表裏を同じくさせないのが、つまり自ら欺くということである。ただ知を致すべきである。善悪の判断ができたら、その後、慎独の功夫を行い、人欲が本然の性に夾雑するのを努力して払い去れば、その後、意を誠にすることができる。　李壯祖録

〔注〕

（1）「所謂自欺者、非爲此人本不欲爲善去悪」『大學章句』傳六章、注「此言小人陰爲不善、而陽欲揜之、則是非不知善之當爲與悪之當去也、但不能實用其力以至此耳。」

（2）「隨」「隨」は、「…するたびに」「…するとすぐに」。ただし、「隨」には「縱」と同じく「たとえ…だとしても」の用法があり（太田氏前掲書、三四四頁）、この意に取ると、「ただ、この（善を行い悪を去る）気持ちがおこったとしても」となる。

（3）「阻隔」　隔絶される。『語類』巻五九、三四条、葉賀孫録（Ⅳ1382）「或問。「不能盡其才」之意如何。曰。才是能去恁地做底。性本是好、發於情也只是好、到得動用去做也只是好。「不能盡其才」是發得略好、便自阻隔了、不順他道理做去。」朱子学における「隔」については、三浦氏前掲書に詳しい。「「隔」という言葉によって朱子が表現しようとしたものは何であるか、…濁った気によって理本来の渾然たる一体性が損なわれて、理と理の間に隙間ができる、という意味ではないか。空間がそのまま時間に転位するのは、中国的思考のひとつの特徴であるとするならば、理と理の間の空隙は、同時に理の流行の停滞をも意味するはずである。さらに推測を逞しくすれば、人欲とは、かかる理の流行の間断の謂ではないだろうか。」（三六九～三七〇頁）

（4）「住」　動作の継続を表す助字。「動作の最終状態が不動のものと

して存続することをあらわす。がんらい《住》はとどまることを意味し、多く運動に関する動詞に用いられる。」（太田氏前掲書、二二〇頁）。

（5）「放教」　二字で使役を表す。太田氏前掲書、二四二頁。

（6）「分別善惡了、然後致其愼獨之功」『大學章句』傳六章「所謂誠其意者、毋自欺也。如惡惡臭、如好好色、此之謂自謙。故君子必愼其獨也。」注「…獨者、人所不知而己所獨知之地也。…使其惡惡則如惡惡臭、好善則如好好色、皆務決去、而求必得之、以自快足於己、不可徒苟且以殉外而爲人也。然其實與不實、蓋有他人所不及知而己獨知之者、故必謹之於此以審其幾焉。」

（7）「割去」　取り除く。除去する。『釋名』「釋用器」「鏞、溝也。既割去壟上草、又辟其土、以壅苗根、使壟下爲溝、受水潦也。」

（8）「物欲之雜」『朱文公文集』卷一五「經筵講義」『大學』「「所謂誠其意者、毋自欺也。」臣熹曰。毋者、禁止之辭也。人心本善、故其所發、亦無不善。但以物欲之私、雜乎其間。是以爲善之意有、所不實而爲自欺耳。能去其欲、則無自欺、而意無不誠矣。」

76条

只今有一毫不快於心、便是自欺也。　道夫

〔校勘〕

○朝鮮古写本は、本条の前に「問。所謂誠其意者、毋自欺也。切謂毋者、禁止之詞、而謹獨則又所以爲禁止之地。人既知學、其於善惡、亦嘗有以識別之矣。但知有未至、故善善而不能進於善、惡惡而不能去其惡、見從欲之爲美、而陰肆於幽隱之間、未知循理之爲樂、而勉強矯飾以自著於顯明之處、殊不知有諸中、必形諸外。在人固未必可欺而在我者已先無實矣。豈不爲自欺者乎。曰。此是大段狼狽處。」の字あり。

○「一毫」　成化本は「毫」を「豪」に作る。

○「於心」　成化本、朝鮮古写本、朝鮮整版本は「於」を「于」に作る。

〔訳〕

今わずかでも心に心地よくないことがあれば、それがつまり「自ら欺く」ということだ。　楊道夫録

〔注〕

（1）「有一毫不快於心、便是自欺也」「快」とは、『大學』傳六章の「自謙」の朱注「謙、快也、足也」のこと。本巻73条の注（1）を参照。

77条

看如今未識道理人、説出道理、便恁地包藏隱伏、他元不曾見來。這亦是自欺、亦是不實。想他當時發出來、心下必不安穩。　賀孫

〔校勘〕

○「説出道理」　朝鮮古写本は「待説出道理」に作る。
○「便恁地包藏隱伏」　萬暦本は「便」を「使」に作る。

〔訳〕
今の道理を分かっていない人が、道理を説く様子を見ると、そのように包み隠しているが、彼はもともと（道理を）体得していないのである。これも自らを欺くことであり、誠実ではないということである。思うに、彼が（道理を）口にしているその時、心の内はきっと安らかではないはずだ。　葉賀孫録

〔注〕
（1）「如今」　いま。
（2）「心下」　心のなかで。巻一四、一五に既出。

78条

國秀問。大學誠意、看來有三樣。一則内全無好善惡惡之實、而專事掩覆於外者、此不誠之尤也。一則雖知好善惡惡之爲是、而隱微之際、又苟且以自瞞底。一則知有未至、隨意應事、而自不覺陷於自欺底。
曰。這箇不用恁地分、只是一路、都是自欺。但有深淺之不同耳。
燾

〔校勘〕
○朝鮮古写本は巻一六に本条を収めず。
○「這箇」　萬暦本、和刻本は「箇」を「个」に作る。
○「深淺」　朝鮮整版本は「深」を「淺」に作る。

〔参考〕
元、劉因『四書集義精要』巻二「或問。自欺有三樣。一則全無實而專事假託掩覆於外者、此其尤者也。一則雖知好善惡惡之爲是、而隱微之際、又苟且以自欺者。一則知有未至、隨意應事、而不自覺陷於自欺者。曰。是有此三樣意思。然却不是三路、只是一路、有淺深之不同。　燾」

〔訳〕
余国秀が質問する。「『大学』の「誠意」には、三つの場合があるように思います。一つは、内面に善を好み悪を憎む誠実さが全くなく、外面を覆って（その内面を隠す）ことに専念する者で、これは意が誠でない最たるものです。一つは、善を好み悪を憎むことが正しいことを知っていながら、隠微の際（独りでいる時）に、おざなりに自らを瞞く者。一つは、知がまだ至っていないままに、考えもなく事に応じて、自ら欺くことに陥っていることに自分では気づいていない者です。」
おっしゃる。「これは、そのように分ける必要はなく、ただ一つのことで、全て自らを欺くということだ。ただ深い浅いの違いがあるだけだ。」　呂燾録

〔注〕

（1）「國秀」　余宋傑のこと。『考亭淵源録』巻一三「余宋傑、字國秀、南康建昌人。」『朱子門人』八七～八八頁。『朱文公文集』巻六二には、余宋傑宛ての二通の書を収める。

（2）「專事」「もっぱら…ばかりする」。『論語集注』「八佾」「林放問禮之本。」注「林放、魯人。見世之爲禮者專事繁文、而疑其本之不在是也。故以爲問。」

（3）「雖知好善惡惡之爲是、而隱微之際、又苟且以自瞞底」「隱微之際」は、「人に知られない、暗い場所や、細かなことにおいて」。「愼獨」の「獨」。『中庸章句』「莫見乎隱、莫顯乎微、故君子愼其獨也。」注「見、音現。隱、暗處也。微、細事也。獨者、人所不知而已所獨知之地也。言幽暗之中、細微之事、跡雖未形而幾則已動、人雖不知而己獨知之、則是天下之事無有著見明顯而過於此者。是以君子既常戒懼、而於此尤加謹焉、所以遏人欲於將萌、而不使其滋長於隱微之中、以至離道之遠也。」『大學或問』「至此而復進之、以必誠其意之説焉。則又欲其謹之於幽獨隱微之奥以禁止其苟且自欺之萌。」

79条

次早云。夜來國秀説自欺有三様底、後來思之、是有這三様意思。然却不是三路、只是一路、有淺深之不同。

又因論、以假託換掩覆字云。假託字又似重了、掩覆字又似輕、不能得通上下底字。

又因論。誠與不誠、不特見之於外、只裏面一念之發、便有誠僞之分。譬如一粒粟、外面些皮子好、裏面那些子不好。如某所謂其好善也、陰有不好者、以拒於内、其惡惡也、陰有不惡者、以挽其中。蓋好惡未形時、已有那些子不好不惡底藏在裏面了。　燾

〔校勘〕

○朝鮮古写本は巻一六に本条を収めず。

○「裏面」　萬暦本、和刻本は「裏」を「裡」に作る。

○「陰有不好者」「陰有不惡者」　萬暦本、和刻本は「陰」を「陰」に作る。

○「蓋好惡未形時」　萬暦本、和刻本は「蓋」を「盖」に作る。

〔訳〕

翌朝おっしゃる。「昨晩、余国秀がいった「自ら欺く」には三つの場合があるというのは、後で考えてみると、やはりこの三つの意味がある。しかしそれらは三つの（異なった）ことではなく、一つのことであり、浅い深いの違いがあるだけだ。」

また、（国秀の）「掩覆」の語を「仮託」の語に言い換える話を論じておっしゃるに、「仮託の語では重いし、掩覆の語では軽い、かといってそのいずれをも表現できる語も思い浮かばない。」

また論ずるに、「誠実と不誠実とは、外側に現れている場合だけでなく、ただ内部において一念が発していれば、（その時点で）誠か偽（不誠）かは分かれている。例えば、一粒の粟があるとして、外側の皮は良いが、内側のものはよくないというのは、私のいう、「善を好む場

合にも、陰に（善を）好まない者がいて、その中で（好善の気持ちを）拒絶し、悪を憎む場合にも、陰に（悪を）憎まない者がいて、そちら側に引っぱりこむ」ということだ。思うに、「（善を）好み（悪を）憎む」というのがはっきり形にあらわれていない時に、すでにそれらの（善を）好まず（悪を）憎まないものは内部に隠されているのだ。」　呂燾録

〔注〕

（1）「以假託換掩覆字…」「假託」は、ここでは「嘘をつく」「偽装する」の意。「掩覆」は、本心をおおい隠して、偽る意。

（2）「通上下」「あらゆるものに通じる」。『論語』「雍也」「子貢曰。如有博施於民而能濟衆、何如。可謂仁乎。子曰。何事於仁、必也聖乎。堯舜其猶病諸。」集注「博、廣也。仁以理言、通乎上下。聖以地言、則造其極之名也。乎者、疑而未定之辭。病、心有所不足也。言此何止於仁、必也聖人能之乎。則雖堯舜之聖、其心猶有所不足於此也。以是求仁、愈難而愈遠矣。」『語類』巻三三、六四条、黄義剛録（Ⅲ844）「衆朋友説「博施濟衆」章。先生曰。「仁以理言」、是箇徹頭徹尾物事、如一元之氣。「聖以地言」、也不是離了仁而爲聖、聖只是行仁到那極處。仁便是這理、聖便是充這理到極處、不是仁上面更有箇聖。而今有三等、有聖人、有賢人、有衆人。仁是通上下而言、有聖人之仁、有賢人之仁、有衆人之仁、所以言「通乎上下」。」

（3）「那些子」「些子」は、「多少の」「少しの」。『唐五代語言詞典』（上海教育出版社、一九九八年）三八八頁、参照。貫休『禪月集』巻二「苦熱寄赤松道者」「天雲如燒人如炙、天地爐中更何適。蟬喘雷乾氷井融、些子清風有何益。」『語類』に用例多数。

（4）「如某所謂其好善也、陰有不好者、以拒於内、其悪悪也、陰有不悪者、以挽其中」　この説は、『大學或問』に見える。『大學或問』「夫不知善之眞可好、則其好善也、雖曰好之而未能無不好者以拒之於内。不知悪之眞可悪、則其悪悪也、雖曰悪之而未能無不悪者以挽之於中。是以不免於苟焉以自欺而意之所發有不誠者。」

80条

人固有終身為善而自欺者。不特外面、有心中欲為善、而常有箇不肯底意思、便是自欺也。須是要打疊得盡。蓋意誠而後心可正。過得這一關後、方可進。　拱壽

〔校勘〕

○朝鮮古写本巻十六には本条を載せない

○「不特～自欺也」　成化本、萬曆本、呂留良本、伝経堂本、朝鮮整版本、和刻本は双行小注とする

○「箇」　萬曆本、和刻本は「个」に作る

〔訳〕

人にはもとより終身善をなしながら自らを欺く者があるものだ。外面で欺くだけでなく、心の中で善をなそうと思ってもそれをなすこと

に対して積極的になれない気持ちが常にあれば、それは自らを欺いたことになるのだ。是非ともこれを回収し尽くさねばならないのだ。思うに、意が誠になって、その後に心が正しくなれるのだ。このひとつの関門を通ることができて、はじめて進むことができるのだ。　董拱壽録

〔注〕

（1）「人固有云云」　この文章は巻三一、二八条にも同文がある。（Ⅲ787、從周録）「三月不違、主有時而出、日月至焉、賓有時而入。人固有終身為善而自欺者。不特外面、蓋有心中欲為善、而常有一箇不肯底意、便是自欺。」

（2）「終身爲善」　『孔子家語』「六本」「終身為善、一言則敗之。可不慎乎。」

（3）「打疊」　収拾する、回収する。「打」は動詞を作る接頭辞。『能改齋漫録』巻五「打字從手從丁」「予嘗考釋文云。丁者當也。打字、從手從丁、以手當其事者也。觸事謂之打、於義亦無嫌矣。」『蘆蒲筆記』巻三「打」字「收拾爲打疊、又曰打迸。」『語類』巻八、一五六条、竇從周録（Ⅰ147）「須是要打疊得盡、方有進。」この「打」の用法については、田中謙二「＜やまとことば＞に化けた中國語」（同氏『ことばと文学』汲古書院一九九三年刊所収）を参照。

（4）「一關」　誠意を善悪の「関門」と見るのは、巻一五、八五条以下を参照。

81条

問自慊。曰。人之為善、須是十分真實為善、方是自慊。若有六七分為善、又有兩三分為悪底意思在裏面相牽、便不是自慊。須是如悪悪臭如好好色、方是。　卓　自慊

〔校勘〕

○「爲悪底意思」　萬暦本、和刻本は「悪」を「恶」に作る。以下同じ

○「裏」　萬暦本、和刻本は「裡」に作る

○「不是」　朝鮮古写本は「是不」に作る

○「如好好色」　成化本、朝鮮古写本、朝鮮整版本は「如」を欠く

○「自慊」　朝鮮古写本は、記録者の後の「自慊」を欠く

〔訳〕

「自慊」について質問した。先生がおっしゃる。「人が善をなすとき、完全に心の底から善をなそうとしてはじめて「自慊」なのだ。もし六七分が善をなそうとするものの、それとは別に二三分の悪をなそうとする気持ちが心の中にあってそれにひっぱられたら、これではもう「自慊」ではない。是非とも「悪臭を悪むが如く、好色を好むが如し」となってはじめてよいのだ。」　黄卓録　以下自慊について

〔注〕

（1）「真實」　まごころからの。『東坡志林』巻一〇「玄徳將死之言、乃真實語也。」

（2）「須～方～」　～であってはじめて～である。

82条

如惡惡臭、如好好色、此之謂自慊。慊者、無不足也。如有心為善、更別有一分心在、主張他事、即是横渠所謂有外之心、不可以合天心也。

祖道

〔校勘〕

○「如惡惡臭」　萬暦本、和刻本は「惡」を「悪」に作る

〔訳〕

「悪臭を悪むが如く、好色を好むが如くする、此を之れ自慊と謂ふ」の「慊」とは十分に足りているということだ。たとえば心の中で善をなそうと思ったとき、それとは別にほんの少しでも心の中でほかのことを主張する部分があれば、これはとりもなおさず張横渠が言う「外有るの心は、以て天心に合すべからず」だ。　曽祖道録

〔注〕

（1）「有～在」　在は断定の語気を表す助字。

（2）「主張」　現代語とほぼ同じ。『語類』巻五二、二八条、楊至録（Ⅳ 1236）「嘗見陸子静説這一段、大段稱告子所見高。告子固是高、亦是陸子之學與告子相似、故主張他。」なお、「主張」には「主宰」の意味もあり、その意味でもこの部分を解釈することができる。（主宰の意で使われる例としては『荘子』天運「天其運乎、地其處乎。日月其爭於所乎。孰主張是、孰維綱是。」）

（3）有外之心云云　心が天下の事物（＝天）と一体となれないのが「有外」。従って天の心とも合致することができなくなる。張載『正蒙』「大心」「大其心、則能體天下之物。物有未體、則心為有外。世人之心、止於聞見之狹。聖人盡性、不以見聞梏其心。其視天下、無一物非我。孟子謂、盡心則知性知天、以此。天大無外、故有外之心、不足以合天心。見聞之知乃物交而知、非德性所知。德性所知、不萌於見聞。」「不自慊」を張載の語と関連させて説明する例は二程にも見られる。『二程遺書』巻一一、明道先生語「人須知自慊之道。自慊者、無不足也。若有所不足、則張子厚所謂有外之心、不足以合天心者也。」『二程粋言』巻二、心性篇「子曰。學必知自慊之道。有一毫不自慊、則子厚所謂有外之心、不足以合天心也。」

83条

自慊之慊、大意與孟子行有不慊相類、子細思之、亦微有不同。孟子慊訓滿足意多、大學訓快意多。横渠云。有外之心（原注「蜀録作自慊」）、不足以合天心、初看亦只一般。然横渠亦是訓足底意思多、大學訓快意多。

問。大學説自慊、且説合做處便做、無牽滯於己私、且只是快底意、少間方始心下充滿。孟子謂行有不慊、只説行有不滿足、則便餒耳。曰。固是。夜來説此極子細。若不理會得誠意意思親切、也説不到此。今看來、誠意如惡惡臭、如好好色、只是苦切定要如此、不如此自不得。　賀孫

〔校勘〕

○「満足意」　朝鮮古写本は「足」字を「是」字に作る

○「有外之心、（原注：蜀録作自慊）」　朝鮮古写本は「有外之心」を「自慊」に作り、「池本作有外之心」の双行小注を附す

○「如悪悪臭」　萬暦本、和刻本は「悪」を「恶」に作る

〔訳〕

「自慊」の慊は、大意は『孟子』の「行い慊（あきた）らざる有れば」に近いが、子細に考えてみると、やはり少し違いがある。『孟子』の「慊」は「足」と訓む意が強いが、この『大学』（の「慊」は「快」と訓む意が強い。張横渠が「外有るの心は、以て天心に合するに足らず」（原注：蜀録は「自慊」に作る）と述べているのについて、最初はこれも『大学』と同じだと考えていた。しかし張横渠もやはり「足」と訓む意が強く、『大学』は「快」と訓む意が強い。

（という先生のお話をうけて）わたしが質問した。「『大学』は「自慊」を説いていますが、たとえばそれはまさになすべきことをなせば、私情にひっぱられてとらわれることがなく、さしあたりはただ快い気分だけであって、しばらくしてからはじめて心が満たされてくる、ということです。対して孟子の言う「行有不慊」は、ただ行為に不満足なところがあると、気力がなくなる、ということを言っているのでしょうか。」先生がおっしゃった。「もとよりそうだ。昨晩来このことはきわめて子細に説明した。もし君が誠意の意味を自分自身に照らして切実にわかっていなければ、やはりここまで説き到ることはあるまい。しかし今考えてみるに、誠意が「悪臭を悪むが如く、好色を好むが如く」であって、必ずこのようであらねばとひたすら深切に努力するのであって、このようでなければもちろんだめだ。　葉賀孫録

〔注〕

（1）「有外之心、（原注）蜀録作自慊」」　校勘に記したように朝鮮古写本は「自慊（原注）池本作有外之心」に作る。池本は池録、蜀録は蜀類。黎靖徳による『朱子語類大全』編纂以前に存在した所謂四録二類（池録・饒録・饒後録・建別録、及び蜀類・徽続類）に属する。いずれも現在は滅んでいる。『朱子語類訳注巻十四』の「はしがき」を参照。

（2）「一般」　おなじ。

（3）「行有不慊」　『孟子』「公孫丑」上「敢問。何謂浩然之氣。曰。難言也。其為氣也、至大至剛、以直養而無害、則塞于天地之間。其為氣也、配義與道、無是餒也。是集義所生者、非義襲而取之也。行有不慊於心則餒矣。」集注「慊、快也、足也。言所行一有不合於義、而自反不直、則不足於心而其體有所不充矣。然則義豈在外哉。」この「天地の間に塞がる」と、本条で引用される張載の発

言との関係については、張載が「西銘」において「天地之塞吾其體、天地之帥吾其性、民吾同胞。」とし、また『正蒙』「中正」で「塞乎天地之謂大」とするのも参照。

（4）「苦切」　切実に。

（5）「少間方始」　少間は「しばらく」、方始は「～してはじめて」。

（6）「心下」　心、心のなか。

84条

字有同一義而二用者。慊字訓足也。吾何慊乎哉、謂心中不以彼之富貴而懐不足也。行有不慊於心、謂義須充足於中、不然則餒也。

如忍之一字、自容忍而為善者言之、則為忍去忿慾之氣。自殘忍而為悪者言之、則為忍了惻隱之心。慊字一從口。如胡孫兩嗛、皆本虚字。看懐藏何物於内耳。如銜字、或為銜恨、或為銜恩、亦同此義。營

〔校勘〕

○「謂心中」　朝鮮古写本は「謂」を「彼」に作る

○「自殘忍而爲悪者言之」　萬暦本、和刻本は「悪」を「恶」に作る

○「銜」　朝鮮古写本は銜に作る。以下同じ

〔訳〕

文字には一つの意味だが二通りに用いられるものがある。「慊」の字は「足」と解されるが、（何が足りているのかという内容について考えると）「吾れ何をか慊（うら）まんや」の場合は、心の中で、晋楚の富貴のようなものについては不満足と思わない、の意味である。「行いに心に慊（あきた）らざるあれば」の場合は、義が心に充足する必要があり、そうでないと気力がなくなってしまう、という意味である。

たとえば「忍」という文字について言うと、がまんして善をなす人から言えば、怒りや欲望の気が起ころうとするのをがまんして止めるということであり、残忍で悪をなす人から言えば、惻隱の心をがまんする意味になる。また慊の字は口偏に作ることがあるが、猿が両頰を膨らませてものをふくむようなもので、みな決まった内実を持たない虚字であり、要は中になにが隱されているのか、その中身次第だ。たとえば「銜」という文字は、恨みをふくむこともあり、恩をふくむこともある。これもまた同じことだ。　黄營録

〔注〕

（1）「吾何慊乎哉」『孟子』「公孫丑」下「曾子曰。晉楚之富不可及也。彼以其富、我以吾仁。彼以其爵、我以吾義。吾何慊乎哉。」集注「慊、恨也、少也。或作嗛。字書以為口銜物也。然則慊亦但為心有所銜之義。其為快為足、為恨為少、則因其事而所銜有不同耳。」なお、以下の『大学或問』を参照。「然則慊之為義、或以為少、又以為恨、與此不同何也。曰。慊之為字、有作嗛者、而字書以為口銜物也。然則慊亦但為心有所銜之意、而其為快為足、為恨為少、則以所言之異而別之耳。孟子所謂慊於心、樂毅所謂慊於志、則以銜其快與足之意而言者也。孟子所謂吾何慊、漢書所謂嗛栗姫、則以銜

其恨與少之意而言者也。讀者各隨所指而觀之、則既並行而不悖矣。字書又以其訓快與足者、讀與愜同、則義愈明、而音又異。尤不患於無別也。」

(2)「謂心中不以」『西山読書記』が引用する本条も、「謂」を「彼」に作る。

(3)「忿慾」『周易』損、象伝「君子以懲忿窒欲。」

(4)「忍」『孟子』「公孫丑」上「孟子曰。人皆有不忍人之心。先王有不忍人之心、斯有不忍人之政矣。以不忍人之心、行不忍人之政治、天下可運之掌上。」

(5)「容忍」耐える、がまんする。『演繁露』續集巻三「文武之怒、未嘗妄興、直待天下皆忿、不復可以容忍、乃始應之。」

(6)「胡孫」サル。慧琳『一切經音義』巻一〇〇「猴玃、猴者猿猴、俗曰胡孫。」

(7)「嗛」サルなどの頬袋。『爾雅』「釋獸」「鳥曰嗉、寓鼠曰嗛。」郭璞注「頰裏貯食處。寓謂獼猴之類。寄寓木上。」

(8)「虚字」内実がいかようにも変わる文字。なお本巻六四条参照。

(9)「看」～次第だ。

85条

誠意章皆在兩箇自字上用功。　人傑　自欺自慊

〔校勘〕

○「箇」萬曆本、和刻本は「個」に作る。朝鮮古写本は「个」に作る

○「自欺自慊」朝鮮古写本はこの四字を欠く

〔訳〕

誠意章はすべてこの二つの「自」という文字のところにとりくむのだ。　万人傑録　以下自欺と自慊について

86条

問。毋自欺是誠意、自慊是意誠否。小人閒居以下、是形容自欺之情状。心廣體胖、是形容自慊之意否。曰。然。後段各發明前説。但此處是箇牢關。今能致知、知至而意誠矣。驗以日用間誠意、十分為善矣、有一分不好底意思潛發以間於其間、此意一發、便由斜徑以長、這箇却是實、前面善意却是虚矣。

如見孺子入井救之是好意、其間有些要譽底意思以雜之、如薦好人是善意、有些要人德之之意隨後生來、治惡人是好意、有些狠疾之意隨後來、前面好意都成虚了。

如垢卦上五爻皆陽、下面只一陰生、五陽便立不住了。荀子亦言、心、卧則夢、偸則自行、使之則謀（原注「見解蔽篇」）。彼言偸者、便是説那不好底意。若曰使之則謀者、則在人使之如何耳。謀善謀惡、都由人、只是那偸底可惡、故須致知、要得早辨而豫戒之耳。　大雅

〔校勘〕

○「箇」　萬暦本、朝鮮古写本、和刻本は「个」に作る。以下同じ。

○「知至而意誠」　朝鮮古写本は「意」字の下に「斯」字がある

○「有一分」　朝鮮古写本は「有」字の上に「便自」の二字がある

○「其間」　朝鮮古写本は「問便」に作る

○「有些要」　朝鮮古写本は「有」字の上に「便」字がある

○「治悪人」　萬暦本、和刻本は「悪」を「恶」に作る

○「有些狼疾」　朝鮮古写本は「有」字の上に「便」字がある。また「狼」を成化本、朝鮮古写本は「很」に作る

○「垢」　朝鮮整版本は「姤」に作る

〔訳〕

質問した。「「自ら欺く毋れ」が「意を誠にす」で、「自ら慊(あきた)る」が「意誠なり」でしょうか。「小人閒居」以下は、「自欺」の様子を表し、「心広く体胖たり」は「自慊」の意味を表しているのでしょうか。」おっしゃった。「そうだ。それぞれ後段が前の文章の説明になっている。ただここは堅牢な関門だ。もし知を致すことができれば、知が至って意が誠になるのだが、日常における誠意の実践について検証してみるに、十分に善を為しているとしても、もし一分でもよくない気持ちがひそかに生じてそのなかにはいりこんでいると、この気持ちが一旦現れるや、正道をはずれてこのよからぬ意がどんどん大きくなり、こちらのほうが実になってしまい、先に持っていた善意のほうは虚になってしまう。

たとえば子供が井戸に落ちそうになっているのを見て、これを助けようとするのはよい意志だが、その時にいささかでもほめられたいという気持ちがまじっているような場合、あるいは、優れた人を推薦するというのは善い意志だが、人に徳ある人と思われたいというほんのわずかな気持ちがすぐあとからついて生じるようなとき、あるいはまた悪人を懲らしめようとするのはよい意志だが、いささかでも凶暴な気持ちがすぐあとからついてくるようなとき、これらはみな、最初に持っていた良き意志が虚なるものになってしまうのだ。

たとえば、姤卦は上の五つの爻がみな陽だが、下に一つの陰が生じただけで、五つの陽が立っていられなくなる。荀子も言っている。「心は、寝ていれば夢を見、ぼんやりしていると放縦になり、働かせれば考える。」（原注：解弊篇に見える。）ここで「ぼんやりしていると」と言われているのが、そのよくない意志のことだ。「働かせればものを考える」というのは、人がそれをどのように使うかにかかっている。善をなそうと考えるのか、悪をなそうと考えるのかは、みなその人次第である。ただあのぼんやりしたものこそがにくむべきものなのだ。だから知を致さねばならないのであり、早い段階で見極めて、あらかじめ警戒しておかなければならないのだ。　余大雅録

〔注〕

（1）「小人閒居云云」『大學章句』傳六章「小人閒居爲不善、無所不至、見君子而后厭然、揜其不善、而著其善。人之視己、如見其肺

肝然、則何益矣。此謂誠於中、形於外、故君子必愼其獨也。曾子曰。十目所視、十手所指、其嚴乎。」朱注「閒居、獨處也。厭然、消沮閉藏之貌。此言小人陰爲不善、而陽欲揜之、則是非不知善之當爲與惡之當去也。但不能實用其力以至此耳。然欲揜其惡而卒不可揜、欲詐爲善而卒不可詐、則亦何益之有哉。此君子所以重以爲戒、而必謹其獨也。」

（2）「心廣體胖」『大學章句』傳六章「富潤屋、德潤身、心廣體胖、故君子必誠其意。」朱注「胖、安舒也。言富則能潤屋矣、德則能潤身矣、故心無愧怍、則廣大寬平、而體常舒泰、德之潤身者然也。蓋善之實於中而形於外者如此、故又言此以結之。」

（3）「牢關」　堅固な関門。関門の喩えは本巻八〇条に見える。なお以下参照。衞湜『禮記集説』巻一五〇引大学或問第六章「雖然、知至以上學問之事也。意誠以下自修之事也。此章上承學問之終、而下啓自修之首。與夫物格而知至者、其事若不相謀而實相為用。正一篇之樞紐、而大學之牢關也。誠度此關、則入德之塗、坦然平直、自可安行必達、而無復有齟齬矣。」

（4）「斜徑」『皮子文藪』巻九「鹿門隱書」「聖人之道猶坦途、諸子之道猶斜逕。」

（5）「垢」『周易』姤卦（䷫）のこと。初爻が不貞な女性で、そのような女性を娶ると男性に害が及ぶと解されている。卦辞「姤、女壯、勿用取女。」朱子本義「姤、遇也、…遇已非正、又一陰而遇五陽、則女德不貞而壯之甚也。取以自配、必害乎陽。故其象占如此。」

（6）「孺子云云」『孟子』「公孫丑」上「今人乍見孺子將入於井、皆有怵惕惻隱之心、非所以内交於孺子之父母也、非所以要譽於鄉黨朋友也、非惡其聲而然也。」

（7）「隨後」　すぐあとで。

（8）「狼疾」『孟子』「告子」上「養其一指而失其肩背而不知也、則爲狼疾人也。」集注「狼善顧、疾則不能、故以為失肩背之喩。」狼が後ろを向けないことで、肩と背中を失った喩えだと朱子は注しているが、ここは「みだりににくむ、凶暴」の意として解釈した。

（9）「立不住」　立っていられない。「～不住」は、「しとげられない」の意。『語類』巻八七、一八四条、葉賀孫録（Ⅵ 2267）「如所謂僕人乃立於車柱之外後角、又恐立不住、却以采帛擊於柱上、都不成模様。」

（10）「解弊篇」『荀子』解弊篇に同文が見える。楊倞注「卧、寢也。自行、放縱也。使、役也。言人心有所思、寢則必夢、偸則必放縱、役用必謀慮。」

87条

或問自慊自欺之辨。曰。譬如作蒸餅、一以極白好麵自裏包出、内外更無少異、所謂自慊也。一以不好麵做心、却以白麵作皮、務要欺人、然外之白麵雖好而易窮、内之不好者終不可揜、則乃所謂自欺也。　壯祖

〔校勘〕

○「或問自慊」　朝鮮古写本は問字の下に「大學誠意章内何以爲」の九字がある

○「裏」　萬暦本、和刻本は「裡」に作る

○「所謂」　諸本はみな「所爲」に作るが、底本は「據上文改」として「所謂」に改めている。

○「壯祖」　朝鮮古写本は處謙に作る（處謙は李壯祖の字）

〔訳〕

ある人が「自慊」と「自欺」の違いについて質問した。先生がおっしゃった。「たとえばマントウを作るようなものだ。このマントウは非常に白いよい粉で中からこねあげて作ってあり、中も外もまったく違いが無いもの、これが言うところの「自慊」だ。もうひとつのマントウは粗悪な粉で芯を作り、皮はといえば白い粉で作って、人をあざむいてやろうとするものだ。ただ、たとえ外側の白い粉で作った部分がよくても簡単に見破られるのであって、内部の粗悪なものは結局のところ隠しとおすことはできない、これが言うところの「自欺」だ。」

李壯祖録

〔注〕

（1）「白麺」　白麺は研いで作られた上等な小麦粉。白麺の喩えは、巻十五、一一二条、李閎祖録（Ⅰ304）「意誠、如蒸餅、外面是白麺、透著是白麺。意不誠、如蒸餅外面雖白、裏面却只是粗麺一般。」を参照。

（2）「不可揜」　『大學章句』伝六章「揜其不善、而著其善。」

88条

問。誠其意者、毋自欺也。近改注云。自欺者、心之所發若在於善、而實則未能、不善也。若字之義如何。

曰。若字、只是外面做得來一似都善、其實中心有些不愛、此便是自欺。前日得孫敬甫書、他説自慊字、似差了。其意以為、好善如好好色、惡惡如惡惡臭、如此了、然後自慊。看經文、語意不是如此。此之謂自慊、謂如好好色、惡惡臭、只此便是自慊。是合下好惡時便是要自慊了、非是做得善了、方能自慊也。

自慊正與自欺相對、不差毫髮。所謂誠其意、便是要毋自欺、非至誠其意了、方能不自欺也。所謂不自欺而慊者、只是要自快足我之志願、不是要為他人也。誠與不誠、自慊與自欺、只爭這些子毫髮之間耳。

又曰。自慊則一、自欺則二。自慊者、外面如此、中心也是如此、表裏一般。自欺者、外面如此做、中心其實有些子不願、外面且要人道好。只此便是二心、誠偽之所由分也。　僩

〔校勘〕

○「外面做得來」　萬暦本、和刻本は「來」を「来」に作る。

○「好善如好好色、惡惡如惡惡臭」　萬暦本、和刻本は「好善如好〻色、惡〻如惡〻臭」に作る。

○「看經文」　萬暦本、朝鮮古写本、和刻本は「經」を「経」に作る。

○「謂如好好色、悪悪臭」萬曆本、和刻本は「謂如好〻色、悪〻臭」に作る。
○「是合下好悪時」萬曆本、和刻本は「悪」を「恶」に作る。
○「不差毫髮」成化本は「毫」を「豪」に作る。萬曆本、朝鮮古写本、和刻本は「髮」を「髮」に作る。
○「只爭這些子毫髮之間耳」成化本は「毫」を「豪」に作る。萬曆本、朝鮮古写本、和刻本は「髮」を「髮」に作る。

〔訳〕

質問「「その意を誠にするは、自ら欺くこと毋きなり」（『大学章句』伝六章）に関して最近先生は、その注を以下のように改訂されました。「自ら欺くとは、心の発するところ（＝「意」）が善を志向している若若くであっても、実際のところそれがまだできていなければ、それは不善に他ならない。」この場合の「若」字の意義は、いかなるものなのでしょうか。」

先生「「若」の字の意義とは、ただ外見上は、その行っていることは全く以て善そのもののようであったとしても、実際のところは、心中にいくばくなりとも（善に対して）気乗りのしない部分が有るならば、それがとりもなおさず自ら欺くことなのだ、ということだ。

先日、孫敬甫から受け取った書翰の中で、彼は「自ら慊る」という語句について説明していたが、どうも間違っているようだ。彼の説く趣旨は、「善を好むこと好色を好む如くにし、悪を悪むこと悪臭を悪む如くにする、そのようにし得てこそ、それではじめて自ら慊るのである。」というものであった。しかし（『大学』の）経文を読む限り、その語意は彼が説くようなものではあるまい。「此をこれ自ら慊ると謂う」とは、好色を好む如くにし、悪臭を悪む如くにすれば、それがとりもなおさず自ら慊ることなのである。つまり好悪しはじめたその刹那には、既にして自ら慊っているはずなのであって、善を為し終わって、それではじめて自ら慊る、ということではないのだ。

「自慊」はまさに「自欺」と対極をなすもので、その間に髪の毛一筋をすら差し挟む余地はない。所謂「その意を誠にする」とは、とりもなおさず自ら欺くこと毋きようにすることなのであって、その意を誠にしおわるのを待ってから、そこではじめて自ら欺かないことができる、というわけではないのだ。所謂「自ら欺かずして慊る」とは、（好善悪悪に対する）自己の志向願望が満たされて快いようにする、ということに他ならないのであって、他人（からの評価）の為にすることではないのだ。誠と不誠、自慊と自欺とは、この髪の毛一筋ほどの差が問題となるのに他ならないのだ。」

またおっしゃった。「自慊ならば（内外表裏は）一つであり、自欺ならば（内外表裏は）二つである。自慊とは、外見上もこのようであり、心中もやはりこのようであって、表裏は同一である。自欺とは、外見上はこのように振る舞っているが、心中はその実、いくばくか気が進まない部分があって、ただその外見上、とりあえずは人に「よろしい」と言ってもらいたいだけなのである。これこそが二心に他ならないのであって、これが誠と偽に分かれ目なのだ。　沈僩録

〔注〕

(1)「近改注云」云々　現行本『大学章句』伝六章「所謂誠其意者、毋自欺也。」における「自欺」に対する朱注は以下の通り。「自欺云者、知為善以去悪、而心之所發有未實也。」朱熹は最晩年に至るまで『大学章句』の改訂を繰り返した。現行の『大学章句』は、その晩年絶筆の形を伝えるものとされている。従って本条に「近改注云」として引かれる内容は、晩年絶筆に至る前の未定稿段階の注の一形態を示すものと推測される。なお本条に「前日得孫敬甫書」として言及のある書翰中にも『大学章句』『大学或問』の改訂に関する言及が見られる。『朱文公文集』巻六三「答孫敬甫」第六書「又論誠意一節、極為精密。…所論謹獨一節、亦似太説開了。…此段章句或問、近皆畧有脩改、見此刋正舊版。俟可印即寄去。但難得便、或只寄輔漢卿、令其轉達也。」なお同書は慶元四年戊午（一一九八、朱熹六十九歳）の書翰と推定されている（陳来『朱子書信編年考証　増訂本』四七九頁）。また本条の記録者である沈僩の所録は「戊午以後所聞」である（『朱子語録姓氏』）。従って本条に言及のある『大学章句』改訂も、戊午（六十九歳）以降の晩年におけるものである。『大学章句』改訂に関しては、本巻五四条の注を参照。また吉原文昭『南宋学研究』所収「大学章句研究――その改訂の跡附を中心として」を参照（研文社、二〇〇二年）。

(2)「心之所發」「心之所發」は「意」を指す。『大学章句』経、朱注「意者、心之所發也。」

(3)「外面做得來一似都善」「做得來」の「得來」は、動詞や形容詞の後ろに用いて、なにがしかの程度に到達したことや、ある種の結果をもたらしたことを示す（『漢語大詞典』参照）。『語類』巻四、九二条、徐寓録（Ⅰ77）「又曰。天之所命、固是均一、到氣稟處、便有不齊。看其稟得來如何。稟得厚、道理也備。」「一似」は、「まるで～のようである」、「一似都」は「まるで全く～のようである」『朱子語類』巻三、五十二条、葉賀孫録（Ⅰ46）「故祭祀之禮、盡其誠敬、便可以致得祖考之魂魄。這箇自是難説。看既散後、一似都無了。能盡其誠敬、便有感格。」

(4)「其實中心有些不愛、此便是自欺」「些」は「些子」と同じで、少し、幾分。ここでの「不愛」は、本条に後出する「中心其實有些子不願」の「不願」とほぼ同義。同趣旨の内容を述べる例を挙げておく。本巻八〇条「心中欲為善、而常有箇不肯底意思、便是自欺也。」

(5)「前日得孫敬甫書」云々　『朱文公文集』巻六三「答孫敬甫」第六書「又論誠意一節、極為精密。但如所論、則是不自欺後、方能自慊。恐非文意。蓋自欺自慊兩事、正相抵背。纔不自欺、即其好悪真如好好色悪悪臭、只為求以自快自足。如寒而思衣以自温、饑而思食以自飽。非有牽强苟且、姑以為人之意。纔不如此、即其好悪皆是為人而然、非有自求快足之意也。故其文曰。所謂誠其意者、毋自欺也。而繼之曰、如悪悪臭、如好好色、即是正言不自欺之實、而其下句乃云、此之謂自慊。即是言如悪悪臭好好色、便是自慊。非謂必如此而後能自慊也。」以上の内容から、孫自修（字敬甫、敬父、

『朱子語録姓氏』所収）は「不自欺（＝如悪悪臭、如好好色）→自慊」を時間的先後関係において把握しようとし、これに対して朱熹は「不自欺（＝如悪悪臭、如好好色）＝自慊」を同時一体のものとして把握していたことがわかる。なお次条で「須無一毫自欺、方能自慊。必十分自慊、方能不自欺。」という弟子の発言が肯定されているのも、全く同趣旨である。

（6）「合下好悪時」「合下」は、すぐに、直ちに。

（7）「不差毫髪」毛筋ほども相違がない。ぴったり一致する。ここでは「自慊」と「自欺」とが盾の両面のように表裏対極の関係を為し、表面と裏面の間に全く隙間がないことをいう。「不差毫髪」の用例、及び類似の表現については以下を参照。『太平広記』巻七六「李淳風」「唐太史李淳風按新暦、太陽合朔、當蝕既、於占不吉。太宗不悦曰。日或不蝕、卿將何以自處。曰。如有不蝕、臣請死之。及期、帝候於庭、謂淳風曰。吾放汝、與妻子別之。對曰。尚早。刻日指影于壁、至此則蝕。如言而蝕、不差毫髪。」『宋書』巻一一「律暦志」上「求古器、得周時玉律、比之、不差毫釐。」

（8）「只爭這些子毫髪之間耳」ただこのほんのわずかの違いが大きな分かれ目となる。「爭」は、「分かれ目となる」の意。『語類』巻一二、三三条、余大雅録（Ⅰ202）「非禮勿視聽言動。勿與不勿、只爭毫髪地爾。」『語類』巻一〇四、四五条、沈僩録（Ⅶ2621）「因言讀書用功之難。諸公覺得大故淺近、不曾著心。某舊時用心甚苦。思量這道理、如過危木橋子、相去只在毫髪之間、才失脚、便跌落下去、用心極苦。五十歳已後、覺得心力短。看見道理、只爭絲髪之間、只是心力把不上。」「些子」は、少し。

（9）「表裏一般」「一般」は、同じ。

（10）「中心其實有些子不願」「中心」は心中。『詩経』国風「王風」「行邁靡靡、中心搖搖。」毛伝「邁、行也。靡靡、猶遲遲也。搖搖、憂無所愬。」

（11）「只此便是二心」「二心」は、不忠の心、異心、といった意味で用いられることが多い。『尚書』周書「康王之誥」「亦有熊羆之士、不二心之臣、保乂王家。」伝「言文武既聖、則亦有勇猛如熊羆之士、忠一不二心之臣、其安治王家。」ここでは外と内、表と裏が一致しない心。

（12）「誠偽之所由分也」本巻七九条「又因論誠與不誠、不特見之於外、只裏面一念之發、便有誠偽之分。」『論語』「顔淵」「子張問。士何如斯可謂之達矣。子曰。何哉、爾所謂達者。子張對曰。在邦必聞、在家必聞。子曰。是聞也、非達也。」朱注「聞與達、相似而不同、乃誠偽之所以分、學者不可不審也。」

89条

問誠意章。曰。過此關、方得道理牢固。

或云。須無一毫自欺、方能自慊。必十分自慊、方能不自欺。故君子必慎獨。

曰。固是。然欲誠其意者、先致其知。知若未至、何由得如此。蓋到物格知至後、已是意誠八九分了。只是更就上面省察。如用兵禦寇、寇

雖已盡翦除了、猶恐林谷草莽間有小小隱伏者、或能間出為害、更當搜過始得。　銖

〔校勘〕

○朝鮮古写本巻一六は本条を収録しない。

○「過此關」　萬暦本、和刻本は「關」を「関」に作る。

○「須無一毫自欺」　成化本は「毫」を「豪」に作る。

○「故君子必慎獨」　呂留良本、伝経堂本を含めて諸本は全て「慎」を「謹」に作る。本巻七五条の校勘を参照。

○「先致其知知若未至」　萬暦本、和刻本は「知知」を「知〻」に作る。

○「蓋到物格知至後」　萬暦本、和刻本は「蓋」を「盖」に作る。

○「已是意誠八九分了」　成化本は「意誠」を「誠意」に作る。朝鮮整版本巻末「考異」「意誠一作誠意」

○「用兵禦寇寇雖已盡翦除了」　萬暦本、和刻本は「寇寇」を「寇〻」に作る。

〔訳〕

誠意章についてお尋ねした。先生「この（誠意という）関門を突破してこそ、はじめて道理を堅固に体得することができるのだ。」

ある者が言う。「毛筋ほども自ら欺くところがないということであって、それでこそ自ら慊ることもできます。必ず十分に自ら慊るところがあって、それでこそ自ら欺かないことも可能になります。だから君子は必ずその独りを慎しむのですね。」

先生「もちろんそうだ。しかしながらその意を誠にしようとする者は、まずその知を致さねばならない。知がもしまだ至っていなければ、どうして誠意がかなおうか。思うに、物格り知至るの段階に至った後は、意は八割方九割方は既に誠になっているのだ。ただしそこのところに更に省察を加えなければならないのだ。例えば兵を率いて外敵を防ぐようなものであって、たとえ外敵が既にすっかり殲滅一掃されていたとしても、さらになお林谷草野の間に多少なりとも潜伏している者がいて、ひそかに出没しては害を為すようなことはないかと危ぶみ、更に捜索し尽くさねばならない、というのと同じことなのだ。　董銖録

〔注〕

(1)「過此關」　誠意を突破すべき関門と見なす見解は、巻一五、八六～八九条、巻一六、八〇条、八六条に既出。

(2)「須無一毫自欺、方能自慊」「須～方～」は「是非とも～であって、それでこそ」の意。

(3)「蓋到物格知至後、已是意誠八九分了。」『語類』巻一五、一〇三条、鄭可学録「問知至而后意誠。曰。知則知其是非。到意誠實、則無不是、無有非、無一毫錯、此已是七八分人。」本巻九三条、九四条にも同種の発言がある。

(4)「更就上面省察」　そこのところで更に省察を加えねばならない。「上面」は、ここでは「誠意上面」の意。誠意のところで、誠意に即して。「上面」は、～のところで、～に即して。本巻一五条「而

今學者只管要日新、却不去苟字上面著工夫。」

（5）「如用兵禦寇」　用兵は、兵器を用いること、兵士を率いて武力を行使すること。『詩経』国風、邶風「擊鼓」「擊鼓其鏜、踊躍用兵。」伝「鏜然、擊鼓聲也。使衆皆踊躍用兵也。」「禦寇」は外敵を防ぐこと。『易経』「漸䷴　九三、鴻漸于陸、夫征不復、婦孕不育、凶。利禦寇。」（本義）「鴻、水鳥也。水鳥、陸非所安也。九三過剛、不中而无應。故其象如此、而其占夫征則不復、婦孕則不育、凶莫甚焉。然以其剛剛也、故利禦寇。」

（6）「更當搜過始得」「搜過」は、探し尽くす。「～過」は動作の完了完成を示す。太田辰夫『中国語歴史文法』（朋友書店、二〇一三年新装再版）頁二一八「二物の間を通りすぎる意味をもつ助動詞。…このような空間における経過をあらわす「過」が時間の場合にも用いられるようになると完成をあらわすこととなった。ただし「了」とは少しく意味を異にし、ある動作を済ませるという感じがつよい。この用法は宋代にできた。」

90条

問。知至而後意誠、則知至之後、無所用力、意自誠矣。傳猶有慎獨之説、何也。

曰。知之不至、則不能慎獨、亦不肯慎獨。惟知至者、見得實是實非、灼然如此、則必戰懼以終之。此所謂能慎獨也。如顔子請事斯語、曾子戰戰兢兢、終身而後已、彼豈知之不至。然必如此、方能意誠。

蓋無放心底聖賢。惟聖罔念作狂。一毫少不謹懼、則已墮於意欲之私矣。此聖人教人徹上徹下、不出一敬字也。

蓋知至而後意誠、則知至之後、意已誠矣。猶恐隱微之間有所不實、又必提掇而謹之、使無毫髪妄馳、則表裏隱顯無一不實、而自快慊也。

銖　慎獨

〔校勘〕

○「傳猶有慎獨之説」　朝鮮古写本は「傳」を「大學傳」に作る。呂留良本、伝経堂本を含めて諸本は、本条の本文に四出する「慎獨」を全て「謹獨」に作る。

○「亦不肯慎獨」　朝鮮古写本は「亦」の下に「」「有」字有り。

○「惟知至者」　朝鮮古写本には「惟」字がない。

○「灼然如此、則必戰懼」　朝鮮古写本は「則」を「而」に作る。

○「曾子戰戰兢兢」　萬暦本、和刻本は「戰戰兢兢」を「戰〻兢〻」に作る。

○「蓋無放心底聖賢」　萬暦本、朝鮮古写本、和刻本は「蓋」を「盖」に作る。

○「惟聖罔念作狂」　萬暦本は「惟聖罔念作聖作狂」に作る。和刻本は「惟聖罔念作狂」の後ろに二文字分の空格が有る。

○「一毫少不謹懼」　成化本は「毫」を「豪」に作る。

○「蓋知至而後意誠」　萬暦本、朝鮮古写本、和刻本は「蓋」を「盖」に作る。

○「使無毫髪妄馳」　成化本は「毫」を「豪」に作る。萬暦本、朝鮮

古写本、和刻本は「髪」を「髮」に作る。

○「銖　慎獨」　呂留良本、伝経堂本を含めて諸本は「慎」を「謹」に作る。朝鮮古写本は「慎獨」の二字なし。

〔訳〕

質問。「「知至りて後に意は誠なり」（『大学章句』経）とある以上、知が至った後には、努力するまでもなく、意は自ずと誠になるはずです。それなのに伝に、慎独すべし、との説が有るのはどうしてでしょうか。」

先生「知が至らないうちは、人は慎独することはできず、また慎独しようともしないものなのだ。知が至った者であってこそ、真是真非が明瞭にしかじかのものであることを体得できるから、必ずや戰き懼れてそれを完結させようとする。慎独することができるとは、まさにこういうことなのだ。例えば顔子の「請う斯の語を事とせん。」、曾子の「戰々兢々」「身を終えて後に已む」等は、彼らにしても、どうして知がまだ至っていないなどということが有ろうか。しかしながら、必ずやこのようにしてこそ、それではじめてその意も誠になり得るのだ。

思うに「放心したままの聖賢など、あり得ない。「惟れ聖も、念うこと罔ければ狂と作る」というやつだ。いささか戒慎恐懼を怠るということがほんのわずかでも有れば、（その意は）私的な意欲に堕してしまう。それ故に聖人が徹頭徹尾、人に教えるのも、敬の一文字より他にはないのだ。

思うに「知至りて後に意は誠なり」とある以上、知が至った後は、意は既にして誠なのだ。それでもなお隠微のところ（＝心の内奥）において不実な部分のあることを恐れるが故に、更に必ず自己の心を呼び覚ましてこれを謹しみ、心があらぬかたへと妄りに馳せるようなことが毛筋ほどもないようにさせれば、表裏隠顕にわたって一片の不実さえなく、自ら快く慊るのである。」　董銖録　慎独

〔注〕

(1)「知至而後意誠」『大学章句』経「物格而后知至、知至而后意誠。」

(2)「知至之後、無所用力、意自誠矣」云々　経文に「知至而后意誠」とある以上、「知至」は自ずと「意誠」に連動するはずなのに、なぜ「知至」の後に「誠意」実現の為に「慎独」の工夫が要請されるのか、という疑問。「知至」と「意誠」の関係については、『語類』巻一五、九八条以下を参照。

(3)「傳猶有慎獨之説」『大学章句』伝六章「所謂誠其意者、毋自欺也。如悪悪臭、如好好色、此之謂自謙。故君子必慎其獨也。」

(4)「實是實非」『語類』では本条の一例のみ。真切確実な是非。「真是真非」に同じ。『二程外書』巻一、三条、程頤語「實是實非能辨、則循實是。天下之事、歸於一是、是乃理也。」陳淳『北溪外集』門人陳沂撰「敘述」（『北溪大全集』所収）「於書無所不讀、於事無所不格。凡千條萬緒、分合出入、實是實非、易惑難辨者、無不毫分縷析、各有以詣其極而無餘。…此先生再見文公而深有得也。」『語類』巻五三、七五条、葉賀孫録（Ⅳ 1295）「問。…聽先生教誨

而能辨別得真是真非、這可見得是非之理形見處。」

(5)「灼然如此」「灼然」は、明瞭に、明確に。『語類』巻一四、一二三条、劉砥録「須是灼然知得物理當止之處、心自會定。」

(6)「戰懼以終之」ここで「終之」というのは、前の「惟知至者」を承け、『易』の「知至至之」「知終終之」を意識した表現であろう。『易経』乾、九三「知至至之、可與幾也。知終終之、可與存義也。」『伊川易伝』「知至至之、致知也。求知所至而後至之。知之在先、故可與幾。所謂始條理者、知之事也。知終終之、力行也。既知所終、則力進而終之。守之在後、故可與存義。所謂終條理者、聖之事也。此學之始終也。」(「始條理者、智之事也。終條理者、聖之事也。」は『孟子』「萬章」下)

(7)「顔子請事斯語」『論語』「顔淵」「顔淵問仁。子曰。克己復禮為仁。一日克己復禮、天下歸仁焉。為仁由己、而由人乎哉。顔淵曰。請問其目。子曰。非禮勿視、非禮勿聽、非禮勿言、非禮勿動。顔淵曰。回雖不敏、請事斯語矣。」

(8)「曾子戰戰兢兢」『論語』「泰伯」「曾子有疾。召門弟子曰。啓予足、啓予手。詩云。戰戰兢兢、如臨深淵、如履薄冰。而今而後、吾知免夫。小子。」(詩は『詩経』小雅「小旻」)

(9)「終身而後已」『論語』「泰伯」「曾子曰。士不可以不弘毅。任重而道遠。仁以為己任、不亦重乎。死而後已、不亦遠乎。」

(10)「蓋無放心底聖賢」『語類』巻一五、一〇七条「自古無放心底聖賢。然一念之微、所當深謹。纔説知至後不用誠意、便不是。」「放心」は、『孟子』「告子」上「學問之道無他、求其放心而已矣。」

(11)「惟聖罔念作狂」たとえ聖人でも、思慮を尽くさなければ愚人と化す。『書経』「多方」「惟聖罔念作狂、惟狂克念作聖」蔡沈『書経集伝』「聖、通明之稱。言聖而罔念則為狂矣、愚而能念則為聖矣。」

(12)「一毫少不謹懼」「一毫も少しく謹懼せず」「少」は「稍」と同じで、やや。『大学衍義』巻二八、誠意正心之要、一、崇敬畏「事天之敬」「如人子之事親、候伺顔色、惟恐一毫少咈於親心。此大舜事天之敬也。」宋、陳文蔚『克齋集』巻二「又答徐子融書」「一毫稍渉異教、深扃固鐍、如拒盗然、庶幾不至陷於其域。」「謹懼」は「慎懼」に同じ、「慎懼」は「戒慎恐懼(戒め慎しみ恐れ懼れる)」の意。『中庸章句』一章「是故君子戒慎乎其所不睹、恐懼乎其所不聞。」

(13)「墮於意欲之私」「意欲之私」は、私的な意欲。ここでの意欲は、天理の対概念としての人欲に近い。以下の『孟子或問』における用例では、朱熹は『孟子』「口之於味也、目之於色也、耳之於聲也、鼻之於臭也、四肢之於佚也、性也」(「尽心」下)の内容を「食色意欲之私」という語彙で表現している。『孟子或問』「或問。二十四章之説、所謂性命者、何不同也。曰。性者、人之所受乎天者。其體、則不過仁義禮智之理而已。其發、則雖食色意欲之私、亦無不本於是焉。命則因夫氣之厚薄而賦於人之名也。不惟智愚賢否之所繫、雖貧富貴賤之所値、亦無不由於是也。故君子於食色意欲之私、則不謂之性、而安於貧富貴賤之有命。於智愚賢否之殊、則不謂之命、而勉於仁義禮智之有性也。」『朱文公文集』巻五六「答方賓王」第四書「人之應事、有不出於意欲之私、而但以不見義理之當然、遂陷於不正者多矣。」なお以下の用例を参照。『朱子語類』巻

一三、三〇条、李閎祖録（Ⅰ225）「凡一事便有兩端。是底即天理之公、非底乃人欲之私。」同、巻一三、三三条、余大雅録（Ⅰ226）「天下只是善惡兩言而已。…問。此善惡分處、只是天理之公人欲之私耳。曰。…」

(14)「徹上徹下」　上から下まで、余すところなく。徹底的に。徹頭徹尾。巻一五、二六条、廖德明録「須是徹上徹下、表裏洞徹。」

(15)「不出一敬字也」「敬」は心を収斂し専一にすること。巻一四、一九条の注を参照。ここでは「放心」と対置されている。『語類』巻一二、八〇条、黄義剛録（Ⅰ209）「敬字、前輩都輕説過了、唯程子看得重。人只是要求放心。何者為心。只是箇敬。今纔敬時、這心便在身上了。」

(16)「隱微之間」　他者にはうかがい知ることのできない、自己の心の内奥。『中庸章句』第一章「莫見乎隱、莫顯乎微、故君子慎其獨也。」朱注「隱、暗處也。微、細事也。獨者、人所不知而己所獨知之地也。」

(17)「又必提掇而謹之」「提掇」は「提醒」「提撕」と同義で、覚醒させる、呼び覚ます。「敬」と関連の深い概念。『語類』巻一二、一二八条、葉賀孫録（Ⅰ215）「或問。一向把捉、待放下便覺恁衰颯、不知當如何。曰。…公若知得放下不好、便提掇起來、便是敬。」巻四四、一三一条、葉賀孫録（Ⅲ1147）「又與文振説。平日須提掇精神、莫令頽塌放倒、方可看得義理分明。」巻一一八、五四条、訓鄭南升（Ⅶ2853）「拜先生訖、坐定。先生云。文振近看得文字較細、須用常提掇起得惺惺、不要昏晦。若昏晦、則不敬莫大焉。」巻一二〇、三五条、葉賀孫録（Ⅶ2892）「初要持敬、也須有些勉強。但須覺見有些子放去、便須收斂提掇起、教在這裏、常常相接、久後自熟。」

91条

問。或言、知至後、煞要著力做工夫。竊意致知是著力做工夫處。到知至、則雖不能無工夫、然亦無大段著工夫處。

曰。雖不用大段著工夫、但恐其間不能無照管不及處、故須著防閑之。所以説君子慎其獨也。

行夫問。先生常言、知既至後、又可以驗自家之意誠不誠。先生久之曰。知至後、意固自然誠。但其間雖無大段自欺不誠處、然亦有照管不著所在、所以貴於慎其獨。至於有所未誠、依舊是知之未真。若到這裏更加工夫、則自然無一毫之不誠矣。　道夫

〔校勘〕

○「煞要著力做工夫」　萬曆本、和刻本は以下、本条の「著」を全て「着」に作る。

○「竊意致知是著力做工夫處」　成化本、朝鮮古写本は以下、本条の「著」を全て「着」に作る（初出箇所である「煞要著力做工夫」の「著」は底本に同じ）。

○「君子慎其獨也」　呂留良本、伝経堂本を含めて諸本は本条に二出する「慎」を全て「謹」に作る。

○「行夫問」　朝鮮古写本は「夫」を「甫」に作る。

○「驗自家之意誠不誠」　和刻本は「驗」を「駐」に作る。
○「無一毫之不誠矣」　成化本は「毫」を「豪」に作る。
○「若到這裏」　萬曆本、和刻本ｉは「裏」を「裡」に作る。

〔訳〕

質問。「知が至った後にこそ、大いに努力を傾注して工夫をなすべきだ、と主張する者もおります。私が思いますのには、致知は、確かに努力を傾注して工夫をなすべき場です。しかし既にその知が至った段階では、工夫が全くないというわけにはいかないにせよ、それはやはり、大いに努力を傾注して工夫をなす、というような場ではないように思います。」

先生「大いに工夫を行う必要まではないにせよ、ただそこには注意の行き届かない部分の生ずるのは不可避であろうから、それ故にこそ、是非ともそういったことは防いでやらねばならない。君子はその独りを慎しむ、と説かれるのも、その為なのだ。」

行夫がお尋ねした。「先生は常に、知が既に至った後にも、自己の意の誠と不誠とを検証することができる、と仰られていますよね。」先生はしばらくしてから仰った。「知が至った後は、意はもちろん、自ずと誠になる。ただし、そこには大いに自ら欺き不誠であるようなことはないにせよ、しかしやはり注意の及ばないところはあるものなのであって、だからこそ慎独の工夫が重要視されるのだ。意に誠でないところが有るとすれば、それは依然としてその知が真ではないからなのだ。もしもそこのところで更に工夫を行えば、自ずと毛筋ほどの不誠さえもなくなるのだ。　楊道夫録

〔注〕

(1)「煞要著力做工夫」「煞」は、はなはだ、非常に。「著力」は、力を込める、尽力する、努力する。
(2)「無大段著工夫處」「大段」は、非常に、大いに。「著工夫」は工夫を行う。「著」は、用いる。
(3)「不能無照管不及處」「照管」は、管理する、世話する、見守る、気をつける。「不及」は、動詞の後に用いて「及ばない」「～し切れない」の意を表す。
(4)「故須著防閑之」「須著」は、是非とも～しなければならない。「防閑」は、「防」も「閑」も、ふせぐ、守り防ぐ。『詩経』斉風「敝笱」序「敝笱、刺文姜也。齊人惡魯桓公微弱、不能防閑文姜、使至淫亂、爲二國患焉。」疏「文姜、是魯桓夫人。…文姜淫亂、由魯桓微弱使然。」なお「防閑」による「誠」の実現、という発想に近似するものとしては『易経』乾卦、文言伝「閑邪存其誠」が有る。
(5)「行夫問」　蔡恩、字行夫。『朱子語録姓氏』所収。
(6)「亦有照管不著所在」「在」は断定の語気を示す句末の助詞。「不著」は動詞の後に用いて、ちゃんと～できない、十分～できない、の意を表す。『語類』巻一三、五六条、楊道夫録（Ｉ230）「凡事莫非心之所為、雖放僻邪侈、亦是此心。善悪但如反覆手、翻一轉便是悪。只安頓不著、亦便是不善。」巻一四、九一条、林夔孫録「公説胸中有箇分曉底、少間捉摸不著、私意便從這裏生、便去穿鑿。」

（7）「至於有所未誠、依舊是知之未真」「依舊」は、依然として、相変わらず。「知至」「知真」「意誠」の関係については以下を参照。『語類』巻一五、一〇二条、楊道夫録「欲知知之真不真、意之誠不誠、只看做不做如何。真箇如此做底、便是知至、意誠。」また、以下に引く条でも「知至」と「真知」、「知不至」と「非真知」とが、それぞれほぼ同内容の語として用いられている。即ち「知至」（＝「真知」）とは、自ずと「意誠」へと連動帰結すべきものであり、従って「意不誠」の原因は「知不至」（＝「知不真」）に帰されることになる。『語類』巻一八、五条、廖德明録（Ⅰ391）「人各有箇知識、須是推致而極其至。不然、半上落下、終不濟事。須是真知。問。固有人明得此理、而涵養未到、却為私意所奪。曰。只為明得不盡。若明得盡、私意自然留不得。若半青半黄、未能透徹、便是尚有渣滓、非所謂真知也。問。須是涵養到心體無不盡處、方善。不然知之雖至、行之終恐不盡也。曰。只為知不至。今人行到五分、便是它只知得五分、見識只識到那地位。譬諸穿窬、稍是箇人、便不肯做、蓋真知穿窬之不善也。虎傷事亦然。」なお巻一五、二条、楊道夫録には「致知所以求為真知。」とある。「真知」については同条注を参照。

92条

光祖問。物格知至、則意無不誠、而又有慎獨之説、莫是當誠意時、自當更用工夫否。

曰。這是先窮得理、先知得到了、更須於細微處用工夫。若不真知得到、都恁地鶻鶻突突、雖十目視、十手指、衆所共知之處、亦自七顛八倒了。更如何地慎獨。　賀孫

〔校勘〕

○「光祖問物格知至」　朝鮮古写本は「物格」を「格物」に作る。

○「而又有慎獨之説」　呂留良本、伝経堂本を含めて諸本は、本条に二出する「慎」を全て「謹」に作る。

○「更須於細微處用工夫」　成化本、朝鮮古写本は「細微」を「微細」に作る。

○「都恁地鶻鶻突突」　朝鮮古写本は「都」を「都自」に作る。

〔訳〕

光祖がお尋ねした。「物格り知至れば、意は誠でないことはないはずです、それにもかかわらず更に慎独すべしとの説が有るのは、誠意の時にあたっても当然、工夫を行うべきだ、との趣旨ではないでしょうか。」

先生「これはつまり、まず理を窮め、まず知が到達してから、更に是非とも細微なる場（＝「独」）において工夫を用いるべし、ということだ。もしも真に知が到達し得ずに、全く以てこんな風にうすぼんやりとしているようでは、十目に注視され、十手に指さされ、衆人全てに知られてしまうような場においてさえ、応対がぐちゃぐちゃになってしまうのだ。ましてやどうやって慎独などできようか。　葉賀孫録

〔注〕

(1)「光祖問」　曾興宗、字光祖、号唯庵、江南西路贛州寧都県人。『考亭淵源録』巻一八。『朱子門人』頁二三八。

(2)「莫是當誠意時、自當更用工夫否。」「莫是～否」は、～ではないか。現代中国語の「不是～吗」と同じ。「自當」は、当然～すべきである。

(3)「都恁地鶻鶻突突」「都」は、全く、すべて。「恁地」はこのように。文言の「如此」に同じ。「鶻鶻突突」は「鶻突」と同じ。「鶻突」は現代中国語の「胡塗」と同じで、ぼんやりしている、曖昧である。『語類』巻五、一九条、包揚録（Ⅰ84）「聖人只是識得性。百家紛紛、只是不識性字。揚子鶻鶻突突、荀子又所謂隔靴爬痒。」巻六、八四条、周明作録（Ⅰ114）「人毎日只鶻鶻突突過了、心都不曾收拾得在裏面。」「鶻鶻突突」は本巻三条にも既出。同条の注も参照のこと。

(4)「十目視、十手指」『大学章句』伝六章「曾子曰。十目所視、十手所指、其嚴乎。」朱注「引此以明上文之意。言雖幽獨之中、而其善惡之不可揜如此。可畏之甚也。」

(5)「亦自七顛八倒了」「亦自」は二文字で「また」。「七顛八倒」は混乱する、混乱を極める。『語類』巻一四、一六五条、甘節録「人本有此理、但爲氣稟物欲所蔽。若不格物致知、事至物來、七顛八倒。」巻一五、二六条、廖德明録「有一般人專要就寂然不動上理會、及其應事、却七顛八倒、到了又牽動他寂然底。」

(6)「更如何地慎獨」「如何地」は「如何」と同じ。どのようにして。

93条

知至而後意誠、已有八分。恐有照管不到、故曰慎獨。　節

〔校勘〕

○「照管不到」　朝鮮古写本は「照」を「服」に作る。

○「故曰慎獨」　呂留良本、伝経堂本を含めて諸本は「慎」を「謹」に作る。

〔訳〕

知が至ってしかる後に意は誠になる、というのは、誠意が八割がた実現するということだ。ただしそこにはなお注意の行き届かない部分があろうから、それ故に慎独せよというのだ。　甘節録

〔注〕

(1)「知至而後意誠、已有八分。」　本巻八九条にも「蓋到物格知至後、已是意誠八九分了。」とある。

(2)「有照管不到」　注意の行き届かないところがある。「照管」は九一条に既出。「不到」は、動詞の後に用いて、動作がある場所や程度にまで到達しないこと、動作が不十分なことを示す。『語類』巻一四、一九条、甘節録「大學總説了、又逐段更説許多道理。聖賢怕有些子照管不到、節節覺察將去。」

94条

致知者、誠意之本也。慎獨者、誠意之助也。致知、則意已誠七八分了、只是猶恐隱微獨處尚有些子未誠實處。故其要在慎獨。　銖

〔校勘〕

○「慎獨者、誠意之助也」　朝鮮古写本を除き、呂留良本、伝経堂本を含めて諸本は「慎」を「謹」に作る。

○「故其要在慎獨」　呂留良本、伝経堂本を含めて諸本は「慎」を「謹」に作る（朝鮮古写本も同じ）。

〔訳〕

致知とは、誠意の本である。慎独とは、誠意の補助である。知を致せば、意は既にして七割八割は誠になっている。ただそれでもなお、隠微にして独なる処（＝心の深奥）において幾分かは誠実でない部分が有るかも知れない。それ故に、その緊要処は慎独にあるのだ。　董銖録

〔注〕

（1）「致知者、誠意之本也」　『大学章句』経「欲誠其意者、先致其知。」

（2）「慎獨者、誠意之助也」　清の李光地は、この部分をテキストの訛誤ではないかと疑っている。『榕村語録』巻一「大学」「朱子語類中有一處言、慎獨為誠意之助。助字、或係訛誤。而陸稼書與四舎弟、皆堅執以為誠意有正面工夫、謹獨所以幫誠意。如此、則兩謹獨皆幫助的工夫、惟末節誠意為正面。豈有此理。」

（3）「致知、則意已誠七八分了」　本巻八九条、九三条参照。

（4）「隱微獨處」　『中庸章句』第一章「莫見乎隱、莫顯乎微、故君子慎其獨也。」

（5）「尚有些子未誠實處」「些子」は、少し、幾分。

95条

誠意章、上云必慎其獨者、欲其自慊也。下云必慎其獨者、防其自欺也。蓋上言如悪悪臭、如好好色、此之謂自慊、故君子必慎其獨者、欲其察於隱微之間、必吾所發之意、好善必如好好色、悪悪必如悪悪臭、皆以實而無不自慊也。

下言小人閒居為不善、而繼以誠於中、形於外、故君子必慎其獨者、欲其察於隱微之間、必吾所發之意、由中及外、表裏如一、皆以實而無少自欺也。　銖

〔校勘〕

○「蓋上言」　成化本、萬暦本、朝鮮古写本、和刻本は「蓋」を「盖」に作る。

○「如悪悪臭」　萬暦本、和刻本は本条における「悪」字を全て「恶」に作る。

○「小人閒居」　成化本、萬曆本、朝鮮古写本、和刻本は「閒」を「間」に作る。
○「而繼以誠於中」　朝鮮古写本は「繼」を「継」に作る。
○「表裏如一」　萬曆本、和刻本は「裏」を「裡」に作る。

〔訳〕

誠意章のうち、上で「必ずその独りを慎む」というのは、自ら慊ることを要請したものである。下で「必ずその独りを慎む」というのは、自ら欺くことを防ごうとするものである。

思うに上で「悪臭を悪むが如く好色を好むが如し、此をこれ自ら慊ると謂う、故に君子は必ずその独りを慎む。」と述べるのは、君子たる者、隠微のところ（「独」）を考察し、自分の発した意が必ずや、善を好むこと必ず好色を好むが如くし、悪を悪むこと必ず悪臭を悪むが如くし、その（好善と悪悪の）いずれの場合にも、意が実となって自ら慊らないところはないようにすることを、要請しているのである。

下で「小人閒居して不善を為す」と言い、これに継いで「中に誠ならば、外に形わる、故に君子は必ず其の独りを慎む。」と述べるのは、君子たる者、隠微のところ（「独」）を考察し、自分の発した意が必ずや、中から外まで、表裏が一体となり、その（表と裏の）いずれもが、実となって自ら欺くところが少しもないようにすることを、要請しているのである。　董銖録

〔注〕

（1）「上云必慎其獨者」『大学章句』伝六章「所謂誠其意者、毋自欺也。如悪悪臭、如好好色、此之謂自謙。故君子必慎其獨也。」
（2）「下云必慎其獨者」『大学章句』伝六章「小人閒居為不善、無所不至、見君子而后厭然揜其不善、而著其善。人之視己、如見其肺肝然、則何益矣。此謂誠於中、形於外、故君子必慎其獨也。」

96条

誠意者、好善如好好色、悪悪如悪悪臭、皆是真情。既是真情、則發見於外者、亦皆可見。如種麻則生麻、種穀則生穀、此謂誠於中、形於外。又恐於獨之時有不到處、故必慎獨。　節

〔校勘〕

○「慎獨」　すべての版本は「謹獨」に作る。

〔訳〕

意を誠にするということは、「善を好むことは良い色を好むことのようであり、悪を悪むことは悪臭を悪むことのようである」ことで、これらはすべて偽りのない感情に根ざしている。偽りのない感情である以上、それが外面に現れたものは、すべて見て取ることができる。例えば麻を植えれば麻が生えてき、穀物を植えれば穀物が生えてくるようなものであり、これを「心の中で誠であれば、外に現れてくる」と謂う。そしてさらに、独りでいる時に行き届かないところがあるの

を恐れるがために、必ず慎独しなければならないのだ。　甘節録

〔注〕

（1）「好善如好好色、悪悪如悪悪臭」『大学章句』伝六章「所謂誠其意者、毋自欺也、如悪悪臭、如好好色。」朱注「使其悪悪則如悪悪臭、好善則如好好色、皆務決去、而求必得之。」

（2）「誠於中、形於外」「必慎獨」『大学章句』伝六章「人之視己、如見其肺肝然、則何益矣。此謂誠於中、形於外、故君子必慎其獨也。」

（3）「有不到處」「不到處」は、十分に行き届かないところ、至善を尽くせていないところ。『語類』巻一七、二九条、葉賀孫録（Ⅱ378）「曰。大抵至善只是極好處、十分端正恰好、無一毫不是處、無一毫不到處。」

97条

或説慎獨。曰。公自是看錯了。如悪悪臭、如好好色、此之謂自慊、已是實理了。下面故君子必慎其獨、是別舉起一句致戒、又是一段工夫。至下一段、又是反説小人之事以致戒。君子亦豈可謂全無所爲。且如著衣喫飯、也是爲飢寒。大學看來雖只恁地滔滔地説去、然段段致戒、如一下水船相似、也要柂、要楫。　夔孫

〔校勘〕

○「慎獨」「必慎其獨」　すべての版本は「慎」を「謹」に作る。

○「全無所爲」「爲飢寒」　萬暦本・和刻本は「爲」を「為」に作る。

○「著衣」　成化本・萬暦本・朝鮮古写本・和刻本は「著」を「着」に作る。

○「下水船」　成化本・萬暦本・和刻本は「船」を「舡」に作り、呂留良本・伝経堂本は「舩」に作る。

〔訳〕

ある人が慎独について議論した。先生はおっしゃった。「あなたはきっと正しく見て取れていないのだ。「悪臭を悪むようにし、良い色を好むようにすることを、自ら満足するというのである」、というのはすでに切実な道理なのだ。その次の「故に君子は必ずその独りでいるところを慎まなければならない」というのは、改めて一文を設けて戒めようとしているのであり、なお一層工夫をしなければならない。次の段に至っては、また小人のことを反対の例として述べて戒めようとしている。君子もまた全く為にするところがないなどと、どうしていえようか。例えば服を着るのもご飯を食べるのも、飢えや寒さを免れるためだ。『大学』はこのように話がすっと流れていくように見えるが、実は一段ごとに戒めているのだ。恰も流れを下る船のようで、舵（かじ）も櫂（かい）も必要なのだ。」　林夔孫録

〔注〕

（1）「公自是看錯了」「公」は二人称。君、あなた。質問者が何らかの見解を提示したことに対して、朱熹がその誤りを指摘したもの。

〔参考〕を参照。

(2)「已是實理了」「已是實理了」は後文の「又是一段工夫」と呼応している。ここでの「實理」には、「切実に体得された理」「理を切実に体得する工夫」といったニュアンスが含まれる。以下に示す通り、「實理」には「性」一般と同義で用いられる用例の他に、「自盡」「忠」「信」「誠」といった語と結びつく概念として言及される用例が散見される。『語類』巻五、一四条、廖德明録（Ⅰ83）「性是實理。仁義禮智皆具。」巻一六、二〇五条、葉賀孫録（Ⅱ358）「又曰。盡己不是說盡吾身之實理、自盡便是實理。若有些子未盡處、便是不實。如欲為孝、雖有七分孝、只中間有三分未盡、固是不實。」巻二一、一九条、程端蒙録（Ⅱ485）「蓋忠信以理言、只是一箇實理、以人言之、則是忠信。」巻二一、二八条、黄卓録（Ⅱ486）「又問。忠與誠如何。曰。忠與誠皆是實理。一心之謂誠、盡心之謂忠。」

(3)「反説」反面から説く。反対の例を取り上げて論じる。

(4)「君子亦豈可謂全無所為」「無所為（為にする所無し）」は「有所為而為（為にする所有りて為す）」の否定。「有所為而為」は張栻の語。ある行為を、それ自体を重要視するが故に行うのではなく、他の目的の為に行うこと。功利的であり動機が不純であるという理由で、否定的に言及されることが多い。巻一五、一五五条の注を参照。

(5)「且如著衣喫飯」「且如」は、たとえば。「著衣喫飯」は以下の用例を参照。『臨済録』「示衆」（岩波文庫、五〇頁）「師示衆云。道流。佛法無用功處。秖是平常無事。屙屎送尿、著衣喫飯、困來即臥。愚人笑我。智乃知焉。」

(6)「大學看來」「看來」は、見たところでは、一見したところ。

(7)「滔滔」水が勢いよく流れていくさま。『論語』「微子」「滔滔者、天下皆是也、而誰以易之。」朱子集注「滔滔、流而不反之意。」ここでは水の流れるように話が進んでいくさまを指す。

(8)「如一下水船相似」「如…相似」は「…のようである」「下水」は流れを下る。『語類』巻五三、五九条、陳文蔚録（Ⅳ1291）「若能知而擴充、其勢甚順、如乘快馬、放下水船相似。」

(9)「柂」「舵」と同じ。

(10)「楫」櫂。

〔参考〕

本条の問答において質問者がどのような見解を提示したのかは未詳であるが、李宜哲は後出の「君子亦豈可謂全無所為」を手がかりに、質問者の発言内容を推測している。『朱子語類考文解義』「或説…全無所為　或説、蓋謂慎獨是當然之事、非以小人為戒、然後方謹之也。若曰戒此而然、則是有所為而為之、非天理之本然。此説甚高、而實則不然。故先生云然。」

98条

或問。在慎獨、只是欲無間。先生應。　節

〔校勘〕

○「慎獨」　すべての版本は「謹獨」に作る。

○賀瑞麟「朱子語類記疑」は「或問條、語似不完」と述べ、底本（中華書局本）も「賀疑此条未完」との校注を施している。

〔訳〕

ある人は問うた。「慎独しなければならないのは、これはとりもなおさず（天理に目覚めた意識に）間断がないようにしたいのでしょうか。」先生は「うん」と答えた。　甘節録

〔注〕

（1）「只是欲無間」「無間」は「無間斷」と同じ。工夫の実践において間断、断絶がないこと。『語類』巻一七、一四条、鄭可学録（Ⅱ373）「大抵敬有二。有未發、有已發。所謂毋不敬、事思敬、是也。曰。雖是有二、然但一本、只是見於動靜有異、學者須要常流通無間。」巻三一、四三条、黄榦録（Ⅲ791）「侯氏亦曰。三月不違仁、便是不遠而復也。過此則通天通地、無有間斷。尹氏亦曰。三月言其久、若聖人、則渾然無間矣。」なお三浦國雄「間斷のない思想」（『中國哲學史の展望と模索』一九七六年、所収）を参照。

99条

問誠意章句所謂必致其知、方肯慎獨、方能慎獨。曰。知不到田地、心下自有一物與他相争鬬、故不會肯慎獨。　銖

〔校勘〕

○「方肯慎獨」「方能慎獨」「不會肯慎獨」　すべての版本は「慎獨」を「謹獨」に作る。

○「相争鬬」　成化本、萬暦本、朝鮮古写本、朝鮮整版本、和刻本は「鬬」を「闘」に作る。

〔訳〕

「誠意」の章句にある「必ず知を致してこそ、初めて慎独しようとするのであり、初めて慎独ができるのである」について質問した。（先生は）おっしゃった。「知が一定の境地に到達しなければ、心のなかには自ずと夾雑物があって心と争うのであり、そのため決して慎独しようとしないのだ。」　董銖録

〔注〕

（1）「誠意章句所謂必致其知、方肯慎獨、方能慎獨」　今本章句には見えない。あるいは未定稿か。致知を誠意の前提条件（必要条件）とする考え方については以下を参照。本巻八九条「然欲誠其意者、先致其知。知若未至、何由得如此。」同、九〇条「問。知至而後意誠、則知至之後、無所用力、意自誠矣。傳猶有慎獨之説、何也。曰。知之不至、則不能慎獨、亦不肯慎獨。」同、九四条「致知者、誠意之本也。慎獨者、誠意之助也。」

（2）「知不到田地」『朱子語類考文解義』「知不到田地　田地、所當至之地位。謂致知不能到其極處也。」「田地」は、『語類』では「聖人田地」（巻七）、「孔子田地」（巻六〇）など、地歩・境地・境涯などの意で用いられる。「田地」単独でも「一定の水準」「一定の地歩」の意で用いられる。『語類』巻一一三、二一条、訓輔広（Ⅶ2743）「此箇物事極密、毫釐間便相爭、如何恁地疏略說得。若是那真箇下工夫到田地底人、說出來自別。」

（3）「心下自有一物」「心下」は、心のうち、心中。

（4）「不會肯」　決して…しようとしない。

100条

問。自欺與厭然揜其不善而著其善之類、有分別否。

曰。自欺只是於理上虧欠不足、便胡亂且欺謾過去。如有得九分義理、雜了一分私意、九分好善惡惡、一分不好不惡、便是自欺。到得厭然揜著之時、又其甚者。原其所以自欺、又是知不至、不會見得道理精至處、所以向來說表裏精粗字。

如知爲人子止於孝、這是表。到得知所以必著孝是如何、所以爲孝當如何、這便是裏。見得到這般處、方知決定是著孝、方可以用力於孝、又方肯決然用力於孝。人須是掃去氣稟私欲、使胸次虛靈洞徹。　木之以下論揜其不善

〔校勘〕

○「表裏精粗字」「這便是裏」　萬曆本、和刻本は「裏」を「裡」に作る。朝鮮古写本は「表裏精粗字」を「表裏精粗底字」に作る。

○「所以必著孝」「決定是著孝」　成化本、朝鮮古写本、和刻本は「著」を「着」に作る。

○「掃去」　成化本、萬曆本、朝鮮古写本、朝鮮整版本、和刻本は「掃」を「掃」に作る。

○「胸次」　成化本、朝鮮古写本、朝鮮整版本は「胸」を「胷」に作る。

○「以下論揜其不善」　成化本、呂留良本、伝経堂本、朝鮮整版本は「論揜其不善以下」に作る。萬曆本、和刻本は「侖揜其不善以下」に作る。朝鮮古写本にこの一句なし。

〔訳〕

問うた。「自らを欺くことと、ひるんでその善くないところを覆い隠して善いところを偽って見せようとすることの類とは、違いがありますか。」

（先生は）おっしゃった。「自らを欺くことはただ理（の把握）において足りないところがあるため、でたらめにとりあえず（理を体得した自分を）欺いてやっていくことだ。例えば九割は義理を把握していても一割の私意を混ぜており、九割は善を好み悪を憎んでも、一割は（善を）好まず（悪を）悪まないのであれば、これはつまり自らを欺くことだ。ひるんで（善くないことを）覆い隠して（善いところを偽って）見せようとする方はと言えば、これはさらにひどいものだ。それが自らを欺くことの原因を探れば、やはりそれは知が至らず、道

理の精微で至極なところがまったく見えていないからであり、だから（私は）かねて「表裏精粗」の語を説いてきた。

例えば人の子としては孝に止まるべきを知ることは、これは表だ。孝でなければならないのはなぜか、孝であるにはどうすべきなのかを知ることは、それがつまり裏だ。このような地歩が見えてきたら、初めて是が非でも孝でなければならないことを知り、初めて孝であることに力を入れようとするのである。人は気禀と私欲による阻害を取り払って、胸の中を透き通っているようにしなければならない。」　銭木之録　以下は「その善くないところを覆い隠す」について論ず。

〔注〕

（1）「自欺」『大学』伝六章「所謂誠其意者、毋自欺也。」朱注「自欺云者、知爲善以去惡、而心之所發有未實也。」

（2）「厭然揜其不善而著其善之類」『大学』伝六章「小人閒居爲不善、無所不至、見君子而后厭然、揜其不善而著其善。」章句「此言小人陰爲不善、而陽欲揜之、則是非不知善之當爲與惡之當去也、但不能實用其力以至此耳。然欲揜其惡而卒不可揜、欲詐爲善而卒不可詐、則亦何益之有哉。」

（3）「便胡亂且欺謾過去」「胡亂」はでたらめに。「欺謾」は欺く、騙す。「謾」とは、言葉で真相を覆い隠すこと。

（4）「所以向來説表裏精粗字」「表裏精粗」に関しては、本巻五一条を参照。

（5）「為人子止於孝」『大學章句』傳三章「爲人君、止於仁。爲人臣、止於敬。爲人子、止於孝。爲人父、止於慈。與國人交、止於信。」

（6）「到得知所以必著孝是如何」「著」は、「用いる」「行う」の意。

（7）「見得到這般處」「般」は、量詞。「這般」はこのような。

（8）「方知決定是著孝」「決定是」は、「決定」と同義。「きっと」、「必ず」の意。後出の「決然」と同義。

（9）「氣禀」『大学章句』経「大學之道、在明明德、在親民、在止于至善。」朱注「明德者、人之所得乎天、而虚靈不昧、以具衆理而應萬事者也。但爲氣禀所拘、人欲所蔽、則有時而昏。然其本體之明、則有未嘗息者。」禀受した気質。

（10）「胸次」胸の中。

（11）「虚靈」注（9）に引く『大学章句』の朱注を参照。朱子はかつて「虚靈」を「心の本体」と解釈したことがある。『語類』巻五、三八条、万人傑録（Ⅰ87）「虚靈自是心之本體、非我所能虚也。」巻十四、八五条注（1）を参照。

101条

問意誠。曰。表裏如一便是。但所以要得表裏如一、却難。今人當獨處時、此心非是不誠、只是不柰何他。今人在静處、非是此心要馳騖、但把捉他不住。此已是兩般意思。至如見君子而後厭然詐善時、已是第二番罪過了。　祖道

〔校勘〕

○「柰何」　成化本、朝鮮整版本は「柰」を「奈」に作る。

〔訳〕

「意誠」について問うた。（先生は）おっしゃった。「表と裏が同じであることがつまりこれだ。ただ表と裏を同じようにする手立ては難しい。今の人は独りでいる時も、この心が誠ではないわけではないが、しかし心（が不誠に陥るの）をどうすることもできないのだ。今の人は静かにしている時も、心が駆け回ろうとするわけではないが、しかし心をしっかりと捉えて抑えることができないのだ。このようではすでに（表と裏が）二通りのものとなっている。君子を見てひるんで善いところを偽って見せようとするようであれば、これはすでにさらなる過ちだ。」　曾祖道録

〔注〕

（1）「馳騖」　馬を走らせる。かけまわる。

（2）「但把捉他不住」「不住」は、動作の後ろに用いて、その動作がしっかりと遂行し切れない意を示す。「把捉不住」は、把捉し切れない。

（3）「已是第二番罪過了」「第二番」は、第二番目の。さらなる。「當獨處時」にまず自らを欺き、ここに至って更に君子の目を欺こうとするから「第二番罪過」と称している。

102条

誠意只是表裏如一。若外面白、裏面黑、便非誠意。今人須於静坐時見得表裏有不如一、方是有工夫。如小人見君子則掩其不善、已是第二番過失。　人傑

〔校勘〕

○「裏面」　萬暦本、和刻本は「裏」を「裡」に作る。

〔訳〕

「誠意」とはただ表と裏が同じであることだ。もし外が白で、中が黒のようであれば、これは誠意ではない。今の人は静坐するときに、表と裏が同じではないところが見えるようであってこそ、初めて工夫となるのだ。小人が君子を見たらその善くないところを覆い隠すようであれば、これはすでにさらなる過ちだ。　万人傑録

103条

此一箇心、須每日提撕、令常惺覺。頃刻放寛、便隨物流轉、無復收拾。如今大學一書、豈在看他言語、正欲驗之於心如何。如好好色、如惡惡臭、試驗之吾心、好善惡惡果能如此乎。閒居爲不善、見君子則掩其不善而著其善、是果有此乎。一有不至、則勇猛奮躍不已、必有長進處。今不

知爲此、則書自書、我自我、何益之有。　大雅

〔校勘〕

○朝鮮古写本巻十六にこの条なし。

○「此一箇心」　萬暦本、和刻本は「箇」を「个」に作る。

〔訳〕

この心は、是非とも毎日呼び覚まし、それが常に目覚めている状態に保たなければならない。一刻たりとも緩むことがあれば、（心は）すぐ物に惹かれて流れていき、もはや収拾することができない。今この『大学』という書物は、どうして単にその言葉を読むことだけが目的なのだろうか。まさにそれで自らの心の如何なるかを検証しようとするのだ。「（善を好むことは）善い色を好むことのようであり、（悪を悪むことは）悪臭を悪むことのようである」ということを、試しにこれに照らして自らの心を検査すれば、果たしてこのように善を好むことと、悪を悪むことができているであろうか。「一人でいる時に善くないことをなし、君子を見ればその善くないところを覆い隠して善いところを偽って見せようとする」ことは、果たして自分自身にもあるだろうか。一つでも不十分なところがあれば、勇んで奮い立ってやまないようにすれば、必ず進歩するところがある。今もしこうすることを知らなければ、書物は書物、自分は自分であって、何の益があろうか。　余大雅録

〔注〕

（1）「提撕」　精神を覚醒させる、励ます。本巻二三条注（4）を参照。

（2）「惺覺」「惺惺」と同じ。いつも目覚めているさま。『語類』巻十三、三三条、余大雅録（Ⅰ226）「要須驗之此心、真知得如何是天理、如何是人欲、幾微間極索理會。此心常常要惺覺、莫令頃刻悠悠慣慣。」

（3）「放寛」　注意力が切れる。心が緩む。『語類』では心をゆったりと落ち着かせるとの意でも使われる。巻十、三十条、不知何氏録（Ⅰ164）「讀書放寛著心、道理自會出來。若憂愁迫切、道理終無緣得出來。」巻十一、三五条、楊道夫録（Ⅰ181）「放寛心、以他説看他説、以物觀物、無以己觀物。」

（4）「如今大學一書、豈在看他言語」『大学』の内容を言葉として読むだけではだめで、必ず実地に実践すべきであるということ。同趣旨を述べる条を巻一四から引いておく。一二条「大學一書、如行程相似、自某處到某處幾里、自某處到某處幾里。識得行程、須便行始得。若只讀得空殼子、亦無益也。」一三条「大學如一部行程曆、皆有節次。今人看了、須是行去。今日行得到何處、明日行得到何處、方可漸到那田地。若只把在手裏翻來覆去、欲望之燕之越、豈有是理。」一四条「大學是一箇腔子。而今却要去填教實著。如他説格物、自家是去格物後、填教實著。如他説誠意、自家須是去誠意後、亦填教實著。」二六条「大學所載、只是箇題目如此。要須自用工夫做將去。」

（5）「一有不至」　ここでの「有不至」は、九六条の「有不到處」と同義。

不十分なところが有る。

(6)「長進」 その人の徳や学問が向上する。

(7)「書自書、我自我」『語類』巻四二、四三条、鄭可学録(Ⅲ1082)「為學須先尋得一箇路逕、然後可以進歩、可以觀書。不然、則書自書、人自人。」

104条

問。誠於中、形於外、是實有悪於中、便形見於外。然誠者、真實無妄、安得有悪。有悪、不幾於妄乎。曰。此便是悪底真實無妄、善便虚了。誠只是實、而善悪不同。實有一分悪、便虚了一分善。實有二分悪、便虚了二分善。 淳

〔校勘〕

○「淳」 伝経堂本は「淳」に作る。

〔訳〕

問うた。「「心の中で誠であれば、外に現れてくる」ということなら、心の中に確実に悪があれば、それが外に現れてくるはずです。しかし「誠」とは、真実無妄であり、どうして悪なんかがあり得るでしょうか。悪があれば、妄に近いのではないでしょうか。」(先生は)おっしゃった。「これはつまり悪における真実無妄なのであって、その場合に善は消失してしまうのだ。誠であるというのは、(善悪いずれにせよ)ただ確実である、というだけのことなのであって、それが善である場合と悪である場合の違いがあるのだ。確実に一割の悪があれば、その分、一割の善が消える。確実に二割の悪があれば、その分、二割の善が消えてしまうのだ。」 陳淳録

〔注〕

(1)「誠者、真實無妄」『中庸章句』一六章「詩曰。神之格思、不可度思。矧可射思。」朱注「詩、大雅抑之篇。格、來也。矧、況也。射、厭也。言厭怠而不敬也。思、語辭。」「夫微之顯、誠之不可揜、如此夫。」朱注「誠者真實無妄之謂。陰陽合散、無非實者。故其發見之不可揜如此。」『中庸章句』二〇章「誠者天之道也。誠之者人之道也。誠者、不勉而中、不思而得、從容中道、聖人也。誠之者、擇善而固執之者也。」朱注「此承上文誠身而言。誠者、真實無妄之謂、天理之本然也。誠之者、未能真實無妄而欲其真實無妄之謂、人事之當然也。聖人之德、渾然天理、真實無妄、不待思勉而從容中道、則亦天之道也。未至於聖、則不能無人欲之私、而其為德、不能皆實、故未能不思而得、則必擇善然後可以明善。」

(2)「誠只是實、而善悪不同」『大学章句』では朱子は伝七章について「意誠則真、無悪而實有善矣」と注を加えており、ここでの発言と趣旨を異にしている。

105条

誠於中、形於外。大學和悪字説。此誠只是實字也。悪者却是無了天理本然者、但實有其悪而已。　方

〔校勘〕

○朝鮮古写本巻十六にこの条なし。

〔訳〕

「心の中が誠であれば、外に現れてくる」。『大学』は「悪」についてもこのことを説いている。ここの「誠」は「実」字の意に他ならない。悪とは本然たる天理を無くしたことであり、こうなると確実にあるのはもはや悪だけだ。　楊方録

「注」

（1）「大學和悪字説」「和」は現代中国語の「連」と同じ。～も、～さえも。『宋元語言詞典』「和、連、連同。」（頁五五一）

106条

凡悪悪之不實、爲善之不勇、外然而中實不然、或有所爲而爲之、或始勤而終怠、或九分爲善、尚有一分苟且之心、皆不實而自欺之患也。所謂「誠其意」者、表裏内外、徹底皆如此、無纖毫絲髪苟且爲人之弊。如飢之必欲食、渴之必欲飲、皆自以求飽足於己而已、非爲他人而食飲也。又如一盆水、徹底皆清瑩、無一毫砂石之雜。如此、則其好善也必誠好之、悪悪也必誠悪之、而無一毫強勉自欺之雜。所以説自慊、但自滿足而已、豈有待於外哉。

是故君子慎其獨、非特顯明之處是如此、雖至微至隱、人所不知之地、亦常慎之。小處如此、大處亦如此。顯明處如此、隱微處亦如此。表裏内外、精粗隱顯、無不慎之、方謂之誠其意。

孟子曰。人能充無欲害人之心、而仁不可勝用也。夫無欲害人之心、人皆有之。閑時皆知惻隱、及到臨事有利害時、此心便不見了。

且如一堆金寶、有人曰。先爭得者與之。自家此心便欲爭奪推倒那人、定要得了方休。又如人皆知穿窬之不可爲、雖稍有識者亦不肯爲、及至顛冥於富貴而不知耻、或無義而受萬鍾之祿、便是到利害時有時而昏。所謂誠意者、須是隱微顯明、小大表裏、都一致方得。

孟子所謂、見孺子入井時、怵惕惻隱、非悪其聲而然、非爲内交要譽而然。然却心中有内交要譽之心、却向人説、我實是惻隱、羞悪。所謂爲悪於隱微之中、而詐善於顯明之地、是所謂自欺以欺人也。

然人豈可欺哉。人之視己、如見其肺肝然、則欺人者適所以自欺而已。誠於中、形於外、那箇形色氣貌之見於外者、自別、決不能欺人、祇自欺而已。

這樣底、永無綠做得好人、爲其無爲善之地也。外面一副當雖好、然裏面却踏空、永不足以爲善、永不濟事、更莫説誠意、正心、修身。至於治國、平天下、越没干渉矣。㑹　以下全章之旨

〔校勘〕

○「几悪悪之不實」　萬暦本、和刻本は以下、「悪」を全て「悪」に作る。

○「纖毫」「一毫」　成化本は「毫」字を「豪」に作る。
○「是故君子慎其獨」　以下、呂留良本、伝経堂本を含む諸本は、本条の「慎」を全て「勤」に作る。本訳注で定本とする『理学叢書』本が「慎」に作るのは、恐らく『礼記』の「大学」「中庸」や朱熹『大学章句集注』の諸本に基づいて「謹」字を「慎」字に改めたのであろう。
○「表裏内外、精粗隱顯」　萬曆本、和刻本は「裏」を「裡」に作る。
○「閑時」　朝鮮整版本は「閑」字を「閒」に作る。
○「雖稍有識者」　朝鮮古写本は「識」を「誠」に作る。
○「顛冥於富貴」　成化本、朝鮮古写本、朝鮮整版本は「冥」を「冥」に作る。
○「不知耻」　萬曆本、朝鮮古写本、朝鮮整版本、和刻本は「耻」を「恥」に作る。
○「然人豈可欺哉」　成化本、萬曆本、朝鮮整版本は「人」字を「又」に作る。但し、朝鮮整版本巻末「考異」には「又一作人」とある。
○「那箇」　萬曆本、朝鮮古写本は「箇」字を「个」に作る。和刻本は「箇」字を「人」に作る。
○「然裏面却踏空」　萬曆本、和刻本は「裏」を「裡」に作る。成化本、萬曆本、和刻本は「踏」を「踏」に作る。因みに、本条において萬曆本と和刻本は、四出する「裏」字のうち、一出目「表裏内外、徹底皆如此」と三出目「小大表裏、都一致方得」では「裏」に、二出目「表裏内外、精粗隱顯」と四出目「然裏面却踏空」では「裡」に作る。
○「以下全章之旨」　朝鮮古写本にはこの六文字無し。

〔訳〕

およそ、悪を憎むのに（誠意が）実でなく、善を為すのに勇敢でなく、外見は悪を憎み善を為しているようでも内面の実はそうではなく、何か他に目的があってそうしたり、初めのうちは善を為すことに勤めていながら終わりには怠ってしまったり、九分までは善を為しながらなお一分のおざなりの心があったりするのは、みな（誠意が）実でなくて自分を欺くという病である。『大学』経一章の「其の意を誠にす」とは、表裏内外、すべて徹底して己の意を誠にし、かりにも他人の目を気にするなどという病弊が毛筋ほどもないことである。

たとえば飢えた者が必ず食べたいと思い、喉の渇いた者が必ず飲みたいと思うのは、すべて自分を満足させようとするのに他ならないのであって、他人を気にして飲食するのではない。また、鉢の中の水に喩えるなら、その水が底まですっかり清澄で、わずかの砂や小石も混じっていないようなものだ。このように混じりけがなければ、善を好むのも必ずや誠から好むのであり、悪を憎むのも必ずや誠から憎み、そうしてわずかばかりも強い勉めて自分を欺くという混じりけがない。だから「自ら慊る」と言うのは、ただ自分に満足することであって、自分以外に何かを期待することなど有ろうか。

こういう訳で、君子が一人で居ることを慎み深くするのは、外から見て明らかなところだけ慎むのではなく、至って微かで隠れたところや他人の知らないことであっても、やはり常に慎み深くする。些細な

ことにも慎み深くし、大事にもやはり慎み深くし、外から見て明らかなところも慎み深くし、他人のうかがい知れぬ隠微なことにもやはり慎み深くする。己の表裏内外、精粗も隠顕も、すべてにおいて慎み深くする。これこそまさしく「其の意を誠にす」ということだ。

孟子は「人能く人を害せんと欲する無きの心を充たさば、而ち仁用ふるに勝ふべからざるなり（人は他人に危害を及ぼすまいとする心を充実させれば、すべてが仁となる）」とおっしゃった。そもそも、他人に危害を及ぼすまいとする心は、人は皆持っている。自分独りで心静かな時には誰もがこの惻隠の心をわきまえているが、己の利害に関わる事柄に臨むと、この惻隠の心はたちまち消えてしまう。

たとえば、もしうずたかく盛られた金銀財宝に、誰かが「先に手にした者に与えよう」と言ったとすれば、こちらの心はすぐさま奪い争ってその人を押し倒そうとの欲を興し、手に入れて初めてその欲心も止む。またたとえば、人は誰でも盗みをしてはならないことは分かっていて、すこしでも見識をそなえている者なら、やはり盗みなどしようとはしないのだが、富貴に目がくらんで恥を忘れ、受ける義もないのに厚禄を受けたりすることがあるのは、とりもなおさず利害が絡むと時として義（是非）の心がくらまされるのだ。いわゆる「誠意」とは、隠微なところでも明らかなところでも、小事でも大事でも表も内も、すべて一致してこそのものだ。

孟子のおっしゃった「孺子の井に入らんとするを見る時、怵惕惻隠するは、其の声を悪みて然するに非ず、交りを内れ誉を要めんが為にして然するに非ず（乳児が井戸に落ちそうなのを目にする時、驚きいたましく思う心が動くのは、助けなかったという悪評を嫌がってそうするわけではなく、乳児の親族と親交を結んだり名誉を求めたりするためにそうするのではない）」というのも、逆に心中に乳児の親族と親交を結んだり名誉を求めたりする心があるのに、他人には「私は本当にはっと驚きいたましく思い、（手をさしのべないことを）恥じ憎んだのです」と言ったりすれば、いわゆる他人に見えない隠微なところで悪を為し、他人にも見えやすい明らかなところで善を取り繕っているのであって、これぞいわゆる「自分を欺いて他人も欺く」ことなのだ。

しかしそれで他人は欺けるであろうか。伝六章の「人の己を視るや、其の肺肝を見るが如く然り（他人がこちらを視るのは、まるでこちらの肺臓や肝臓までも見通すようだ）」のとおり、他人を欺くのはまさしく自分を欺くことに他ならない。「中に誠なれば、外に形る」のとおり、顔かたちや風采など、あの外に表れたものは自己の真実とは別物で、決して他人を欺くことなどできず、ただただ自分を欺いているだけである。

このようにして、永遠に善人となるよすがをもてないのは、本人に善を為す素地が無いからである。もし外見上は（全体に）ぱっと見たところ良くても、その内面は逆に虚ろで、永遠に善を為すことはできず、永遠に何の役にも立たず、まったく「誠意、正心、修身」を説くこともなく、「治国、平天下」などますます無関係である。　沈僩録

以下は全章の要旨について

〔注〕

（1）「爲善之不勇」『論語』「爲政」、「子曰。非其鬼而祭之、諂也。見義不爲、無勇也。」朱注「知而不爲、是無勇也。」

（2）「有所爲而爲之」　張栻『南軒集』巻一四「闡範序」「誠知是書所載、莫非吾分内事、而古之君子、皆非有所爲而爲之、則精微親切、必有隱然自得於中者、雖欲捨是而不由、亦不可得矣。」同、巻一七「温嶠得失」「昔人之事業、皆非有所爲而爲之、事理至前、因而有成之耳。」『朱文公文集』巻八九「右文殿修撰張公神道碑」「蓋其常言有曰。學莫先於義利之辨。而義也者、本心之所當爲而不能自已。非有所爲而爲之者也。一有所爲而後爲之、則皆人欲之私而非天理之所存矣。嗚呼。至哉言也。其亦可謂擴前聖之所未發而同於性善養氣之功者歟。」巻一五、一五五条、巻一六、九七条の注を参照。

（3）「或始勤而終怠」『抱朴子』内篇「論仙」第二「事之難者、爲之者何必皆成哉。彼二君兩臣、自可求而不得。或始勤而卒怠、或不遭乎明師、又何足以定天下之無仙乎。」-『大学衍義』巻二、帝王爲學之本「堯舜禹湯文武之學」「先儒謂、人之學、不日進則日退。故德不可以不日新。不日新者、不一害之也。始勤而終怠、始敬而終肆、以一出一入之心爲或作或輟之事、德何自而新乎。終始之間、常一不變、則德日以新矣。」

（4）「纖毫絲髮」「纖毫」も「絲髮」も、ほんのわずか。「絲髮」の用例は『語類』では本条を含む五例（巻一三の五一条、巻三五の五五条、巻一〇四の四五条、巻一二六の六一条。記録者は巻三五のもののみ周謨録、他はすべて沈僩録）。

（5）「爲人之弊」「非爲他人而食飲」「爲人」は、他人からの評価を意識すること。巻十四、二八条の注（1）を参照。『論語』「憲問」「子曰。古之學者爲己、今之學者爲人。」朱注「爲、去聲。程子曰。爲己、欲得之於己也。爲人、欲見知於人也。」『大学或問』（或問六章之旨）「夫好善而中無不好、則是其好之也、如好好色之眞欲以快乎己之目、初非爲人而好之也。惡惡而中無不惡、則是其惡之也、如惡惡臭之眞欲以足乎己之鼻、初非爲人而惡之也。所發之實既如此矣。」

（6）「飢之必欲食、渴之必欲飲」『孟子』「公孫丑」上に「飢者易爲食、渴者易爲飲。」とある。朱注は「易爲飲食、言飢渴之甚、不待甘美也。」また、同「盡心」上「孟子曰。飢者甘食、渴者甘飲、是未得飲食之正也。飢渴害之也。豈惟口腹有飢渴之害、人心亦皆有害。人能無以飢渴之害爲心害、則不及人不爲憂矣。」とあり、朱注に「口腹爲飢渴所害、故於飲食不暇擇、而失其正味。人心爲貧賤所害、故於富貴不暇擇、而失其正理。人能不以貧賤之故而動其心、則過人遠矣。」とある。

（7）「如一盆水、徹底皆清瑩、無一毫砂石之雜」『語類』巻六、一〇八条、呉雉録（Ⅰ117）「周明作謂、私欲去則爲仁。曰。謂私欲去後、仁之體見、則可。謂私欲去後便爲仁、則不可。譬如日月之光、雲霧蔽之、固是不見。若謂雲霧去、則便指爲日月、亦不可。如水亦然。沙石雜之、固非水之本然。然沙石去後、自有所謂水者、不可便謂無沙無石爲水也。」

（8）「豈有待於外哉」「有待於外」は「無待於外」の対概念。『韓昌黎文集校注』巻一「原道」「博愛之謂仁。行而宜之之謂義。由是

而之焉、之謂道。足乎己無待於外、之謂德。」『孟子集注』「尽心」上の「充實之謂美」に「力行其善、至於充滿而積實、則美在其中而無待於外矣。」『論語或問』「学而」に「曰。人不知而不慍、何以爲君子也。曰。常人之情、人不知而不能不慍者、有待於外也。若聖門之學、則以爲己而已。本非爲是以求人之知也。人知之、人不知之、亦何加損於我哉。」とある。他『朱文公文集』には「有待於外」の用例が四例有る。

(9)「至微至隱」「愼獨」を「微」「隱」を以て説くのは『中庸』による。『中庸章句』第一章「莫見乎隱、莫顯乎微、故君子慎其獨也。」朱注「隱、暗處也。微、細事也。獨者、人所不知而己所獨知之地也。言幽暗之中、細微之事、跡雖未形、而幾則已動。人雖不知而己獨知之、則是天下之事、無有著見明顯而過於此者。是以君子既常戒懼、而於此尤加謹焉。所以遏人欲於將萌、而不使其潛滋暗長於隱微之中、以至離道之遠也。」

(10)「人能充無欲害人之心、而仁不可勝用也」及び「穿窬」『孟子』「尽心」下「孟子曰。人皆有所不忍、達之於其所忍、仁也、人皆有所不爲、達之於其所爲、義也。人能充無欲害人之心、而仁不可勝用也。人能充無穿窬之心、而義不可勝用也。人能充無受爾汝之實、無所往而不爲義也。士未可以言而言、是以言餂之也。可以言而不言、是以不言餂之也。是皆穿窬之類也。」朱熹集注「勝、平聲。充、滿也。穿、穿穴。踰、踰牆、皆爲盜之事也。能推所不忍、以達於所忍、則能滿其無欲害之人心、而無不仁矣。能推其所不爲、以達於所爲、則能滿其無穿踰之心、而無不義矣。此申說上文充無穿踰之心之意也。蓋爾汝人所輕賤之稱、人雖或有所貪昧隱忍而甘受之者、然其中心必有慚忿而不肯受之之實。人能即此而推之、使其充滿無所虧缺、則無適而非義矣。」

(11)「一堆金寶」「堆」は、うずたかく盛る、重なるの意で、ここでは量詞として用いられている。韓愈『朱文公校昌黎先生文集』巻六「華山女」「抽釵脱釧解環佩、堆金疊玉光青熒。」

(12)「惻隱」いたましく思う。『孟子』「公孫丑」上、「告子」上に見える。朱熹集注「怵惕、驚動貌。惻、傷之切也。隱、痛之深也。此即所謂不忍人之心也。」

(13)「定要…方休」是が非でも…してはじめて止める。「方休」は巻十五、三十条に既出。

(14)「顛冥」顛倒冥昧。目がくらみ、まよいまどう。『荘子』雑篇「則陽」「夫夷節之爲人也、無德而有知。不自許、以之神其交固、顛冥乎富貴之地。非相助以德、相助消也。」成玄英疏「顛冥、猶迷沒也。言夷節交游堅固、意在榮華。顛倒迷惑、情貪富貴。」陸德明釋文「顛冥、音眠。司馬云。顛冥、猶迷惑也。言其交結人主、情馳富貴。」福永光司『荘子』では、「富貴の地位に心くつがえり目のくらんだ（強欲な男）」「（富貴に）目がくらんで正気を失うこと。」（朝日新聞社『中国古典選16　荘子』雑篇・上、一七〇　頁）

(15)「無義而受萬鍾之祿」受けるのは正しくないのに厚禄を受け取る。「鍾」は量詞。『孟子』「滕文公」下「仲子、齊之世家也。兄戴、蓋祿萬鍾。以兄之祿爲不義之祿而不食也、以兄之室爲不義之室而不居也。」「告子」上「一簞食、一豆羹、得之則生、弗得則死。呼

爾而與之、行道之人弗受。蹴爾而與之、乞人不屑也。萬鍾則不辨禮義而受之。萬鍾於我何加焉。」趙岐注「鍾、量器也。」「公孫丑」下「我欲中国而授孟子室。養弟子　以萬鍾。」朱注「萬鍾、穀禄之数也。鍾、量名。受六斛四斗。」

(16)「有時而昏」『大学章句』経、朱注「明德者、人之所得乎天、而虚靈不昧、以具衆理而應萬事者也。但爲氣稟所拘、人欲所蔽、則有時而昏。」

(17)「孟子所謂、見孺子入井時、怵惕惻隱、非惡其聲而然、非爲内交要譽而然」『孟子』「公孫丑」上「所以謂人皆有不忍人之心者、今人乍見孺子將入於井、皆有怵惕惻隱之心。非所以内交於孺子之父母也。非所以要譽於鄉黨朋友也。非惡其聲而然也。」朱熹集注「怵、音黜。内、讀爲納。要、平聲。惡、去聲、下同。乍、猶忽也。怵惕、驚動貌。惻、傷之切也。隱、痛之深也。此即所謂不忍人之心也。内、結。要、求。聲、名也。言乍見之時、便有此心、隨見而發、非由此三者而然也。」

(18)「所謂爲惡於隱微之中、而詐善於顯明之地」『朱文公文集』巻一五「経筵講義」大学「此謂誠於中、形於外、故君子必慎其獨也。」(小字注)「臣熹曰。閒居、獨處也。厭然、銷沮閉藏之貌。小人爲惡於隱微之中、而詐善於顯明之地、則自欺之甚也。然既實有是惡於中、則其證必見於外。徒爾自欺而不足以欺人也。君子之謹獨、不待監此而後能然、亦不敢不監此而加勉也。」衛湜『礼記集説』巻一五〇「新安朱氏曰。…小人爲惡於隱微之中而詐善於顯明之地、其自欺亦甚矣。」

(19)「詐善」『論衡』巻一一「答佞」「觀其陽以考其陰、察其内以揆其外、是故詐善設節者可知。」『後漢書』巻二七「張湛傳」「人或謂張湛僞詐。湛聞而笑曰。我誠詐也。人皆詐惡、我獨詐善。不亦可乎。」

(20)「外面一副當雖好」「一副當」は、一組、ひとそろい。三浦『「朱子語類」抄』四五五頁。湯浅幸孫『近思録』上、一六一頁(朝日新聞社、中国文明選4、一九七二年)

(21)「踏空」虚ろ、空っぽ。『漢語大詞典』では『語録』の本条を引いて、「虚空、不切実。」とする。

(22)「永不濟事」「不濟事」は、だめだ、なんにもならない、ものにならない、役に立たない。

(23)「越沒干涉矣」「越」は、益々。「沒干涉」は、無関係である、無縁である、没交渉である。

107条

問。誠意章自欺注、今改本恐不如舊注好。曰。何也。曰。今注云。心之所發、陽善陰惡、則其好善惡惡皆爲自欺、而意不誠矣。恐讀書者不曉。又此句、或問中已言之、却不如舊注云。人莫不知善之當爲、然知之不切、則其心之所發、必有陰在於惡而陽爲善以自欺者。故欲誠其意者、無他、亦曰禁止乎此而已矣。此言明白而易曉。曰。不然。本經正文只説所謂誠其意者、毋自欺也。初不曾引致知兼説。今若引致知在中間、則相牽不了、却非解經之法。又況經文誠其意者、毋自欺也、這説話極細。蓋言爲善之意稍有不實、照管少有不到處、

便爲自欺。未便説到心之所發、必有陰在於惡、而陽爲善以自欺處。若如此、則大故無狀、有意於惡、非經文之本意也。

所謂心之所發、陽善陰惡、乃是見理不實、不知不覺地陷於自欺。非是陰有心於爲惡、而詐爲善以自欺也。如公之言、須是鑄私錢、假官會、方爲自欺。大故是無狀小人、此豈自欺之謂邪。

（原注「又曰。所謂毋自欺者、正當於幾微毫釐處做工夫。只幾微之間少有不實、便爲自欺。豈待如此狼當、至於陰在爲惡、而陽爲善、而後謂之自欺邪。此處語意極細、不可草草看。」）

此處工夫極細、未便説到那粗處。所以前後學者多説差了、蓋爲牽連下文小人閒居爲不善一段看了、所以差也。

又問。今改注下文云。則無待於自欺、而意無不誠也。據經文方説毋自欺。毋者、禁止之辭。若説無待於自欺、恐語意太快、未易到此。

曰。既能禁止其心之所發、皆有善而無惡、實知其理之當然、使無待於自欺、非勉強禁止而猶有時而發也。若好善惡惡之意有一毫之未實、則其發於外也必不能掩。既是打疊得盡、實於爲善、便無待於自欺矣。

如人腹痛、畢竟是腹中有些冷積、須用藥驅除去這冷積、則其痛自止。不先除去冷積、而但欲痛之自止、豈有此理。僩。

〔校勘〕

○「心之所發、陽善陰惡」　萬曆本、和刻本は、本条の「惡」を全て「悪」に作る。

○「恐讀書者」　成化本、朝鮮古写本、朝鮮整版本は「讀書」を「初讀」に作る。

○「正當於幾微毫釐處」　萬曆本、朝鮮古写本、和刻本は「於」字を「于」に作る。成化本は「毫」字を「豪」に作る。

○「蓋言爲善之意稍有不實」　萬曆本、朝鮮古写本、和刻本は「蓋」を「盖」に作る。

○「狼當」　朝鮮古写本、朝鮮整版本は「狼」を「郎」に作る。

○「未便説到那粗處」　朝鮮古写本は「未」字の上に「在」字有り。成化本、朝鮮古写本本は「粗」字を「麁」に作る。

○「蓋爲牽連下文」「蓋」字、成化本、萬曆本、朝鮮古写本、和刻本は「盖」に作る。「牽」字、呂留良本を含めて諸本は「賺」に作る。伝経堂本は「牽」に作る。「連」字の下、朝鮮古写本は「却」字有り。伝経堂本巻末附載「朱子語類正譌」に「牽連　原作賺、非。」とある。

○「一段」　萬曆本は「段」字を「叚」に作る。

○「使無待於自欺」　朝鮮古写本は「使」字を「便」に作る。

○「一毫之未實」　成化本は「毫」字を「豪」に作る。

○「既是打圜得盡」　成化本、萬曆本、伝経堂本、朝鮮古写本、朝鮮整版本、和刻本は「圜」を「疊」に作る。呂留良本は「圜」に作る。

〔訳〕

質問した、「「誠意」の章の「自欺」の先生の注は、今の改訂本より恐らく旧注の方が良いでしょう」と。（先生は）「どういう事か」と言われた。

申し上げた、「今の注の『心の発する所、陽に善、陰に悪なれば、則ち其の善を好み悪を悪むは皆自ら欺くを為して、意誠ならず（心が

発動した時、表向き善でひそかに悪であれば、その善を好み悪を憎むことはすべて自分を欺くこととなり、意は誠ではない）』は、恐らく読者には理解し難いでしょう。またこの句は、『或問』の中で既におっしゃっていますが、かえって旧注に『人善の当に為すべきを知らざる莫きも、然れども之を知ること切ならざれば、則ち心の発する所、必ず陰（ひそか）に悪に在りて陽に善を為して以て自ら欺く者有り。故に其の意を誠にせんと欲する者は、他無し、亦曰く、此を禁止するのみ、と（人は誰でも善のなすべきことを知っているが、しかし、知ることが切実でなければ、心の発動時には、必ずひそかに悪に在りながらもうわべは善を為してそれで自分を欺くものがある。だから、自分の意を誠にしようとするなら、他でもない、やはり、この動きを禁止するだけだと言うのだ）』とあるのに及びません。この旧注の言葉は明白で理解しやすいでしょう」と。

先生はおっしゃった、「そうではない。もともと『大学』の経の正文はただ「所謂其の意を誠にすとは、自ら欺くこと毋（な）きなり」と説くだけである。初めから「致知」に言及して「毋自欺」と兼ね合わせて説いてはいない。今かりに「致知」を引いて「誠其意」と「毋自欺」との話の中に置けば、どちらにも結びつくことができず、かえって経を解する方法ではない。ましてや、経の本文の「所謂其の意を誠にすとは、自ら欺くこと毋（な）きなり」の、この解き方が極めて細緻であるのだから（なおさら「致知」に言及する必要はない）。恐らく経の言おうとしているのは、善を為す意が少しでも実でなく、心に少しばかり目配りの及ばないところがあれば、それはすぐさま自分を欺くことになるということであって、心の発動時には必ずひそかに悪に在りながらもうわべは善を為して、それで自分を欺くというところまでただちに説こうとはしていないであろう。もしそのようであるならば、それは極めて醜悪で、意図的に悪を為す者となってしまうが、それは『大学』の経文に説こうとする本意ではないのだ。

最新の注（今の注）にいう『心の発する所、陽に善、陰に悪なれば』とは、それは理を見ることが実でなく、覚えず知らずに自分を欺くことに陥っていることである。心中ひそかに悪を為そうとしながら、それを偽って善を為すことで自分を欺くのではない。もし君の言う通りとすれば、私銭を鋳造しニセ金を作って、はじめて自分を欺くことになる。これは特別に悪い小人であって、「自分を欺く」と言えるだろうか。

（原注「また、先生はおっしゃった、「いわゆる「自ら欺くこと毋（な）きなり」とは、まさに心がほんのわずかばかり動こうとするところで工夫する。ただこの微かに動こうした時に、少しでもその意が実（純一・誠実）でなければ、それがすぐさま自分を欺くことである。あのようにだらしなく放蕩で、心中ひそかに悪を為そうとしながら、うわべは善を為そうとするなどという有り方になって、そうして初めてこれを「自ら欺く」と言うだろうか。ここの表現は意味が極めて細緻で、いい加減に読むことはできない」と。）

ここの工夫は極めて細緻で、すぐさまあの大まかなところまで説いているわけではない。今までの人々が説き誤ることが多かったのは、おそらく、伝の下文の『小人閒居して不善を為す（つまらぬ人は独り

居ると不善を働く）』の一段をひきつなげて読むからで、それで間違うのだ」と。）

さらに問うた、「今、改めた注（今注）の下文に『則ち自ら欺くを待つ無くして、意誠ならざる無きなり』とあります。経文によればまさに「毋自欺也」と説いております。「毋」は禁止の語です。「自ら欺くを待つ無く（自分を欺くまでもなく）」と説くのは、恐らく話の進め方が性急すぎて、ここまで至るのは易しくありません」と。

先生はおっしゃった、「心の発動時にくい止めて、（意に）全く善のみが有って悪は無いようにすることができれば、心底から理の当然そうあるべきところを知り、（したがって）自分を欺く隙も無いのであって、勉め強いてくい止めてもそれでも時として（悪意が）発動してしまう、というのではない。もし善を好み悪を憎む意にわずかでも実でないところがあれば、心が発動すればその意の不実を絶対に覆い隠すことはできない。もし前もって（不善の芽を）払拭し尽くすことができていれば、善を為す意も実となり、従って自分を欺く隙もないのだ。

たとえば、人の腹痛は、詰まるところ腹にいささかの冷えがあるのであって、薬を用いてこの冷えを除けばよいのであって、そうすればその痛みは自ずから止む、というようものだ。先ず冷えを除かずに、ただ痛みの自然と止むのを望むだけ（で腹痛が止む）など、そんな道理はない」と。　沈僩録

〔注〕

（1）「誠意章自欺注」　朱注は「誠其意者、自脩之首也。毋者、禁止之辭。自欺云者、知爲善以去悪、而心之所發有未實也。謙、快也。足也。獨者、人所不知而己所獨知之地也。言欲自脩者知爲善以去其悪、則當實用其力、而禁止其自欺。」

以下の問答に言及される「改本」、「舊注」、「今注」、「或問」について整理しておく。「改本」はおそらく「今注」を指す。「或問」は『大学或問』には類似の表現はなく、『中庸或問』の二〇章（注（3）を参照）を指すと思われる。これは「今注」に近いものである。質問は「舊注」の方が「今注」（改本・今改注）や「（中庸）或問」よりも良いとする考えからのものである。

引用される「今注」も「舊注」も、その内容は現行の『大学章句』の朱注とは異なる。また、現行『大学章句』は、朱熹晩年絶筆に近いテキストであると考えられている。従って「今注」「旧注」として引かれる注は、いずれも草稿段階の注の内容を示すものと判断できる。しかも本条の記録者沈僩は一一九八年から従学したと考えられる（『朱門弟子師事年攻』）から、朱熹の没年が一二〇〇年であることを考え合わせると、本条は朱熹最晩年の思索営為を示すものとして資料的な価値が高いと言えるであろう。

ちなみに、本条と同じ沈僩の記録に、本条に類似する内容の記事が有るので紹介しておく（巻十八、第一二五条、Ⅱ―423）。

「因説自欺、欺人、曰。欺人亦是自欺、此又是自欺之甚者。便教盡大地只有自家一人、也只是自欺、如此者多矣。到得那欺人時、大故郎當。若論自欺細處、且如爲善、自家也知得是合當爲、也勉強

去做、只是心裏又有些便不消如此做也不妨底意思。如不爲不善、心裏也知得不當爲而不爲、雖是不爲、然心中也又有些便爲也不妨底意思。此便是自欺、便是好善不如好好色、惡惡不如惡惡臭。便做九分九釐九毫要爲善、只那一毫不要爲底、便是自欺、便是意不實矣。或問中説得極分曉。」（大学五、或問下、傳六章）

「大故」については本条の注（10）を、「郎當」については注（14）を参照。

（2）「今注云」「心之所發、陽善陰惡、則其好善惡惡、皆爲自欺、而意不誠矣。」内容は現行『大学章句』朱注とは異なる。

「陽善陰惡」は、周敦頤『太極図説』「惟人也、得其秀而最靈、形既生矣、神發知矣、五性感動而善惡分、萬事出矣。」朱熹「太極図説解」「形生於陰、神發於陽、五常之性、感物而動、而陽善陰惡、又以類分、而五性之殊、散爲萬事。」

（3）「又此句、或問中已言之」『中庸或問』二〇章「曰。然則大學論小人之陰惡陽善、而以誠於中者目之、何也。曰。若是者、自其天理之大體觀之、則其爲善也、誠虚矣。自其人欲之私分觀之、則其爲惡也、何實如之。而安得不謂之誠哉。但非天理眞實無妄之本然、則其誠也、適所以虚、其本然之善、而反爲不誠耳。」

（4）「舊注云」「人莫不知善之常爲、然知之不切、則其心之所發、必有陰在於惡而陽爲善以自欺者。故欲誠其意者無他、亦曰禁止乎此而已矣。」この内容も現行の『大学章句』朱注とは異なる。

（5）「初不曾引致知兼説」上引の「舊注」のうち、「知之不切」云々が内容的に致知説に関わるものであることを問題にした発言。なお致知説の文脈で知の切・不切を話題にする資料として以下がある。『語類』巻一八、六条、黄卓録（Ⅱ―391）「致知、是推極吾之知識無不切至、切字亦未精、只是一箇盡字底道理。見得盡、方是真實。」『朱文公文集』巻五〇「答周舜弼」第一〇書所引周謨（字舜弼）語「補亡之章謂、用力之久而一旦廓然貫通焉、則理之表裏精粗、無不盡、而心之分別取舍、無不切。」ただし実際には「知不至」（＝「知不切」）と自欺は密接に関連する。本巻七〇条「問。知不至與自欺者如何分。」云々を参照。

（6）「在中間」「中間」は「なか」（『漢語大詞典』「中間…裏面」）

（7）「則相牽不了」「不了」は直前の動詞が不可能なことを表す。「致知」を「誠其意」と「毋自欺」との中に入れたのでは、「致知」の話は「誠其意」と「毋自欺」とのどちらとも結びつくことができない。

（8）「這説話極細。」下文小字注の「所謂毋自欺者、正當於幾微毫釐處做工夫。」「此處語意極細」と同趣旨。「自欺」とは、内に悪意を抱きながら表面的に善を装ってこれを偽る、というような単純明白な構造をとるものではなく、より微細微妙な心の様態を意味する、ということ。

（9）「照管少有不到處」「照管」は、管理する、管理下に置く、掌握する、制御する。巻十四、第十八条の注（1）（汲古書院『朱子語類』訳注巻十四、二十四頁）

（10）「大故無狀」「無狀」は、醜悪、悪逆。「大故」は、「特に、本当に、はなはだ」（『宋語言詞典』六一頁、「特別、実在、太」）。『語類』

から三例を引用する）。また、『河南程氏遺書』巻第十八、八一条に「今習俗如此不美、然人却不至大故薄悪者、只是爲善在人心者不可忘也。」の用例がある。

ただし、朱熹には「大故」を「悪逆」と解している例もある。『論語』「微子」「周公謂魯公曰。君子不施其親、不使大臣怨乎不以。故舊無大故、則不棄也。無求備於一人。」朱注「大故、謂悪逆。」

(11)「不知不覺地陥於自欺」「不知不覺」は「覚えず知らず」「知らず知らず」。ここでは「不知不覺」によって「自欺」を説明しているが、一方で朱熹は「不知不識」と「自欺」を明確に区別する発言も残している。本巻七一条を参照。

(12)「鑄私錢、假官會」　銅銭などを私的に鋳造したり、ニセの紙幣を作る。「官會」（官會子）は官制の「会子」。「会子」は北宋の大都市の商人や金融業者が発行した約束手形・送金手形で、信用のおけるものは紙幣の代わりになったという。南宋に入って政府は民間の会子を禁止し、国家として兌換期限のある会子を発行した（以上、『東洋史辞典』京大東洋史事典編纂会編、東京創元社、一九八〇による。）

『宋史』「食貨志」下3「会子」、「（紹興）三十年、戸部侍郎錢端禮被旨造會子、儲見錢、於城外流轉、其合發官錢、並許兌會子輸左藏庫…會子初行、止於兩浙、後通行於淮、浙、湖北、京西。」（巻一八一、冊13、頁4406）。宋・葉適「淮西論鐵錢五事狀」「於江南沿江州郡、以銅錢會子中半、或一分銅錢二分會子、直行兌換鐵錢。」（河洛図書出版『葉適集』巻之二、p22、「状表」）

(13)「正當於幾微毫釐處做工夫」「幾微」は微細な兆し。周敦頤『通書』「誠幾德」「誠無爲。（朱熹注「實理自然、何爲之有、即太極也。）幾善悪。（注「幾者、動之微、善悪之所由分也。蓋動於人心之微、則天理固當發見、而人欲亦已萌乎其間矣。此陰陽之象也。）『語類』巻一三、二〇条、呂燾録（Ⅰ224）「天理人欲、幾微之間。」『易経』「姤」大象「姤之時義、大矣哉。」朱熹本義「幾微之際、聖人所謹。」

(14)「狼當」　だらしなく、きちんとしない。放蕩。『語類』巻三六、第八七条、林夔孫録（Ⅲ967）「如人飲酒、飲得一盃好、只管飲去、不覺醉郎當了。」

(15)「不可草草看」「草草」は、いい加減に。

(16)「多説差了」「所以差也」「差」は、間違っている、間違うの意。

(17)「毋者、禁止之辭」　質問者は舊注の意（「故欲誠其意者、無他、亦曰禁止乎此而已矣」）に拠っている。注（4）を参照。本条の朱熹の論ずるところでは、「毋」を禁止の辞とすることを否定しているが、現行の『大学章句』では注（1）に引いたように、「毋者、禁止之辭。」としている。

(18)「今改注下文云」「則無待於自欺、而意無不誠也。」「今改注」は「今注」のこと。注（2）「今注云」に続く内容か。ただし、これも現行の『大学章句』とは異なる。

(19)「恐語意太快」「快」は、速い、急ぐ。「太快」は、速すぎる。ここでは語気が性急に過ぎる、の意。『河南程氏遺書』巻十、「二程解、窮理盡性以至於命、只窮理便是至於命。子厚謂、亦是失於太快、此義儘有次序。須是窮理、便能盡得己之性、則推類又盡人

之性。既盡得人之性、須是并萬物之性一齊盡得、如此然後至於天道也。其間煞有事、豈有當下理會了。」『朱文公文集』巻三一「答張敬夫論中庸章句」「率夫性之自然。此語誠似大快。然上文説性已詳、下文又舉仁義禮智以為之目、則此句似亦無害。」

(20)「打疊」　あらかじめしておく。整理する。

(21)「冷積」　冷え。腹（内臓）が長く冷えたための病。『黄帝素問靈樞經』巻十「積之始生、得寒乃生。厥乃成積也。」

108条

敬子問。所謂誠其意者、毋自欺也。注云。外爲善而中實未能免於不善之雜。某意欲改作外爲善而中實容其不善之雜、如何。蓋所謂不善之雜、非是不知、是知得了又容著在這裏、此之謂自欺。

曰。不是知得了容著在這裏、是不柰他何了、不能不自欺。公合下認錯了、只管説箇容字、不是如此。容字又是第二節、緣不柰他何、所以容在這裏。此一段文意、公不曾識得它源頭在、只要硬去捺他、所以錯了。（原注「大概以爲有纖毫不善之雜、便是自欺。」）自欺、只是自欠了分數、恰如淡底金、不可不謂之金、只是欠了分數。如爲善、有八分欲爲、有兩分不爲、此便是自欺、是自欠了這分數。

或云。如此則自欺却是自欠。

曰。公且去看。（原注「又曰。自欺非是要如此、是不柰它何底。」）荀子曰。心臥則夢、偸則自行、使之則謀。某自十六七讀時、便曉得此意。蓋偸心是不知不覺自走去底、不由自家使底、倒要自家去捉它。使之則謀、這却是好底心、由自家使底。

李云。某每常多是去捉他。如在此坐、心忽散亂、又用去捉它。

曰。公又説錯了。公心粗、都看這説話不出。所以説格物致知而後意誠、裏面也要知得透徹、外面也要知得透徹、便自是無那箇物事。譬如果子爛熟後、皮核自脱落離去、不用人去咬得了。如公之説、這裏面一重不曾透徹在。只是認得箇容著、硬遏捺將去、不知得源頭工夫在。所謂誠其意者、毋自欺也、此是聖人言語之最精處、如箇尖鋭底物事。如公所説、只似箇椿頭子、都粗了。公只是硬要去強捺、如水恁地滾出來、却硬要將泥去塞它、如何塞得住。

又引中庸論誠處而曰。一則誠、雜則僞。只是一箇心、便是誠。才有兩箇心、便是自欺。好善如好好色、惡惡如惡惡臭、他徹底只是這一箇心、所以謂之自慊。若才有些子間雜、便是兩箇心、便是自欺。如自家欲爲善、後面又有箇人在這裏拗你莫去爲善、欲惡惡、又似有箇人在這裏拗你莫要惡惡、此便是自欺。（原注「因引近思録如有兩人焉、欲爲善云云一段、正是此意。」）如人説十句話、九句實、一句脱空、那九句實底被這一句脱空底都壞了。如十分金、徹底好方謂之眞金、若有三分銀、便和那七分底也壞了。

又曰。佛家看此亦甚精、被他分析得項數多。如云有十二因緣、只是一心之發、便被他推尋得許多、察得來極精微。又有所謂流注想、他最怕這箇。所以潙山禪師云。某參禪幾年了、至今不曾斷得這流注想。此即荀子所謂偸則自行之心也。　僩

〔校勘〕

○「中實未能免於不善之雜」　萬曆本、和刻本は「能」を「能」に作る。以下同じ。
○「某意欲改作」　朝鮮古写本は、「某」を「其」に誤る。
○「蓋所謂不善之雜」　成化本、萬曆本、和刻本は「蓋」を「盖」に作る。
○「不是知得了容著在這裏」　萬曆本、朝鮮古写本、和刻本は、「著」を「着」に作る。以下同じ。萬曆本、和刻本は「裏」を「裡」に作る。以下同じ。
○「是不柰他何了」　成化本、朝鮮整版本は「柰」を「奈」に作る。以下同じ。
○「只管説箇容字」　萬曆本、朝鮮古写本、和刻本は「箇」を「个」に作る。以下同じ。
○「硬去捺他」　朝鮮整版本「硬」を「鞭」に作る。
○「大概以爲有纖毫不善之雜、便是自欺」　朝鮮古写本はこの十五字を小字にせず。
○「大概」　成化本、萬曆本、朝鮮古写本、朝鮮整版本、和刻本は「概」を「槩」に作る。
○「纖毫」　成化本、朝鮮古写本は「毫」を「豪」に作る。
○「只是自欠了分數」　萬曆本、和刻本は「數」を「数」に作る。以下同じ。
○「是不柰它何底」　成化本、朝鮮整版本は「它」を「他」に作る。
○「又用去捉它」　成化本、朝鮮古写本、朝鮮整版本「它」を「他」に作る。
○「公心粗」　成化本、朝鮮古写本は「粗」を「麁」に作る。
○「裏面也要知得透徹、外面也要知得透徹」　成化本、朝鮮古写本は「面」を「面」に作る。以下同じ。
○「譬如果子爛熟後」　萬曆本、和刻本は「熟」を「熟」に作る。
○「只是認得箇容著」　成化本、萬曆本、朝鮮古写本、和刻本は「著」を「着」に作る。
○「只似箇椿頭子」　朝鮮古写本は「椿」を「搗」に作る。
○「都粗了」　成化本、朝鮮古写本は「粗」を「麁」に作る。
○「却硬要將泥去塞它」　成化本、朝鮮古写本、朝鮮整版本は「它」を「他」に作る。
○「只是一箇心」　萬曆本、和刻本は「箇」を「個」に作り、朝鮮古写本は、「个」に作る。
○「才有兩箇心」　成化本、萬曆本、朝鮮古写本、和刻本は「才」を「纔」に作る。以下同じ。
○「惡惡如惡惡臭」　萬曆本、和刻本は「惡」を「悪」に作る。以下同じ。
○「只是這一箇心」　朝鮮古写本は「只是」と「這」との間に二文字分の空格あり。
○「後面又有箇人在這裏」　朝鮮古写本は「人」を「心」に作る。
○「拗你莫去爲善」「拗你莫要惡惡」　萬曆本は「拗」を「拗」に作る。
○「某參禪幾年了」　萬曆本、和刻本は「參」を「叅」に作る。
○「不曾斷得」　朝鮮古写本は「斷」を「断」に作る。

〔参考〕

本条は眞德秀『大學集編』に収める。

本条の一部は、三浦國雄訳注『「朱子語類」抄』一八二～一九一頁に収める。

〔訳〕

李敬子（燔）が質問する。「『大学』伝六章の「所謂其の意を誠にするとは、自ら欺くこと毋きなり」の（「自ら欺く」の）注に、「外面では善を行っているが、内面では実のところいまだに不善の夾雑を免れていない」とありますが、私は「外面では善を行っているが、内面では実のところ不善の夾雑を許容してしまっている」と改めたいと思いますが、如何でしょうか。私が考えますに、所謂不善の夾雑とは、自らそれを知らないのではなく、知ってはいるがここ（心）に許容してしまうということで、それを「自ら欺く」というのではないでしょうか。」

先生が仰る。「知ってはいるがここ（心中）に許容してしまうのではなく、それ（不善の夾雑）をどうすることもできず、自ら欺かざるをえないのだ。君は最初から誤解していて、ひたすら「容」（許容、容認）という語を用いているが、そうではない。「容」というのも第二段階のものであって、それをどうすることもできないので、ここ（心中）に許容してしまうのである。この（『大学』の）一段の文意について、君はどこにその（自欺の）根源があるのかまるで分かっておらず、ひたすらそれ（不善の夾雑）を強引に抑えつけようとするから、間違うのだ。（原注「そもそもほんの少しでも不善の夾雑があれば、それがとりもなおさず自ら欺くということである。」）自ら欺くとは、自ら何分かを欠くということで、ちょうど、純度の低い金でも金と呼ばざるをえないが、それが何分かを欠いているようなものだ。たとえば善を行う場合、善を行おうと思う気持ちが八分あっても、二分のしたくない気持ちがあれば、これがとりもなおさず自ら欺くことであって、自らこの何分かを欠くということである。」

ある者がいう、「そうであれば自ら欺くとは、自ら欠くということですね。」おっしゃる。「君、考えてみなさい。（原注「またおっしゃるに、「自ら欺くとは、意図的にそのようにするものではなく、そうせざるを得ないものだ。」」）『荀子』に「心は、眠れば夢を見るし、いい加減にすれば放逸になるし、制御すれば謀りごとをめぐらす」という。私は十六、七の頃にこれを読んだ時から、この意味がはっきりと分かった。思うに「偸心」とは、知らず識らずのうちにどこかに行ってしまうものであり、自らの制御がきかないものであるから、むしろ自分でそれ（偸心）を捉まえて制御する必要がある。「これを使すれば則ち謀る」とは、これはかえってよい心のことで、自ら制御できるものである。」

李燔がいう。「わたしはつね日ごろ概ねそれ（心）を捉まえようとしていて、ここに坐っているときも、心が乱れそうになると、それを捉まえます。」

おっしゃる。「君はまた言い間違えた。君の心は粗雑で、この話を分かっていない。（『大学』で）なぜ「格物致知してその後に意が誠になる」というのかといえば、内面においても知が透徹し、外面においても知が透徹する必要があり、そこではじめて自然に「あのもの」（不

善の夾雑）がなくなるのだ。たとえば果実が熟したら、皮や種子は自然に剥がれ落ち、人が齧（ってそれらを無理に取り去）る必要はない。君の説だと、この中に一重の透徹していないものがある。ただこの（残った不善の夾雑を）「容」（許容）すると考え、無理にそれを抑えつけていくばかりで、（格物致知の）根本的な修練について分かっていない。「所謂其の意を誠にする者は、自ら欺くこと毋きなり」とは、聖人の言葉の最も精密なところで、あたかもこのように切っ先の鋭い物のようである。君の説は、棒杭のようで、まったく粗雑だ。君がひたすら強引に（心の内なる不善の夾雑を）抑えつけようとするのは、水がこのように湧き出ているのに、かえって無理に泥によってそれを塞ごうとするようなものだが、どうして塞ぎとめることができようか。」

また、『中庸』の「誠」について論じた部分を引いておっしゃる。「純一であれば誠であり、雑じり気があれば偽りである。ただ一つの心だけが、誠である。少しでも二つの心があれば、自ら欺くということである。「善を好むこと好色を好むが如く、悪を悪むこと悪臭を悪むが如く」、そのように徹底して一つの心であれば、それゆえにこれを「自ら慊（あきた）る」というのである。もしわずかでも間雑があれば、それは二つの心であり、自ら欺くということである。例えば、自ら善を行おうとしても、後ろにもう一人の人（自分）がここにいて、善を行わせないように仕向けたり、悪を悪もうと思っても、もう一人の人（自分）がここにいて、悪を悪まないようにさせるのが、自ら欺くということである。（原注「そこで『近思録』の「兩人の有るが如し、善を為さんと欲すれども云云」の一段を引いて、まさしくこの意味だとおっしゃる。」）例えば、ある人が十の話をしたとして、九つは本当の話で、一つだけでたらめだったとしたら、その九つの本当の話もこの一つのでたらめによってすべて駄目になってしまう。例えば、十分（じゅうぶ）の金は、徹底してよいものであってこそ純金と呼ぶことができるが、もし三分の銀が混じっていれば、その七分の金さえも駄目になってしまう。」

またおっしゃる。「仏家はこの点をとても精密に考えていて、彼らによって分析された項目はたくさんある。例えば、十二因縁というものがあり、（これらはすべて）一心から発したものというが、彼らによって多くの種別が探究され、その考察も極めて精緻である。また、いわゆる「流注の想」（連綿と続いていく想念）というものがあり、彼らはこれを最も怖れる。だから潙山霊祐禅師は、「私は長い間参禅してきたが、今に至るまでこの流注の想を断ち切ることはできなかった」といっているが、これは『荀子』のいう「偸なれば則ち自ら行く」という心のことである。」　沈僩録

〔注〕

(1)「敬子」　李燔。字は敬子。江西省建昌の人、紹熙元年（一一九〇）の進士。『宋史』巻四三〇「道學傳」に伝が立てられる。それによれば、「改襄陽府教授、復往見熹。熹嘉之、凡諸生未達者、先令訪燔、俟有所發、乃從熹折衷、諸生畏服。熹謂人曰。燔交友有益而進學可畏。且宜諒樸實、處事不苟、它日任斯道者必燔也。」といわれ、朱子の高弟の一人であった。また「紹定五年、帝論及當時高士累召不起者。史臣李心傳以燔對、且曰。燔乃朱熹高弟、

經術行義亞黄榦、當今海内一人而已」ともいわれる。『文集』巻六二に「答李敬子」の書を収める。陳栄捷『朱子門人』一二九頁を参照。

（2）「注云外爲善而中實未能免於不善之雜」この注は、現行本の『大学章句』とは異なる。すでに本巻七四条、八八条、一〇七条に見たように、朱子は『大学』伝六章の「自欺」の注釈を何度も書き直している。「不善之雜」は、次のものに見える。『朱文公文集』巻五六「答朱飛卿」「改誠意章説。誠意一章、來喻似未曉。章句中意當云。人意之發形於心者、本合皆善。惟見理不明、故有不善雜之而不能實其爲善之意。今知已至、則無不善之雜、而能實其爲善之意、則又無病矣。爲惡之實、則其爲善也不誠矣。有爲善之實、則無爲惡之雜、而意必誠矣。純一於善而無不實者、即是此意未嘗異也。」

（3）「不是知得了容著在這裏、是不柰他何了、不能不自欺」「容」は、許容する、容認する、目をつぶる。「著」は、動作の持続を表す助字。「這裏」は、「ここ」。この場合は、「心の中」の意。李敬子のいう「知得了容著在這裏」（不善の夾雜を知ってはいるが、それを許容してしまう）は、「不柰他何了、不能不自欺」（不善の夾雜をどうすることもできず、自ら欺かざるをえない）というのと異なり、前者は意図的、後者は無自覚なものである。ただし、朱子はこの問答の翌朝、「昨晚考えてみたが李敬子の説は正しい、ただ粗雜であっただけだ」（昨夜思量敬子之言自是、但傷雜耳）と、考えを改めている。本巻、一〇九条を参照。

（4）「合下」はじめから。

（5）「只管説箇容字」「只管」は、ひたすら。「箇」は、一、冠詞的用法で「ひとつの…」、「…というもの」、二、指示代詞の「これ」「この」の意。入矢・古賀『禅語辞典』一二〇頁。

（6）「容字又是第二節」「第二節」は、「第二段階」の意。巻一二〇、九五条、呂燾録（Ⅶ2909）「國秀問。向曾問身心性情之德。蒙批誨云云。…曰。這裏未消説敬與不敬在。蓋敬是第二節事、而今便把來夾雜説、則鶻突了、愈難理會。」ここでは、「不柰他何」（それをいかんともすることができない）ことが第一段階であり、それゆえそれを「容」（許容）せざるをえないというのは第二段階のことだということ。

（7）「公不曾識得它源頭在」「它源頭」とは、自欺の根源のこと。「源頭」は巻一五、九六条、九七条に既出。九六条「曰。源頭只在致知。知至之後、如從上面放水來、已自迅流湍決、只是臨時又要略略撥剔、莫令壅滯爾銖。」九七条「致其知者、自裏面看出、推到無窮盡處、自外面看入來、推到無去處、方始得了、意方可誠。致知格物是源頭上工夫。」本来は「みなもと」「水源」の意だが、『語類』では、特に、格物致知が修養の根本であることをいう文脈で用いられる。

（8）「大概以爲有纖毫不善之雜、便是自欺」この一文は、朝鮮古写本を除く諸本では双行小字で記される。文脈から考えると、この前の部分との関連は薄く、むしろ後文とつながっているから、朝鮮古写本のように、本来は注釈ではなく、問答の地の文かも知れない。

(9)「欠了分數」「分數」は、「八分」「九分」など「全体のうちの割合」の意。ここで「分數を欠く」とは、「何分かを欠く」、つまり百パーセントではない、の意。『語類』巻一三、一六条、黄榦録（Ⅰ224）「天理人欲分數有多少。天理本多、人欲便也是天理裏面做出來。雖是人欲、人欲中自有天理。」巻一一七、五〇条、記録者欠（Ⅷ2829）「問。事各有理、而理各有至當十分處。今看得七八分、只做到七八分處、上面欠了分數。莫是窮來窮去、做來做去、久而且熟、自能長進到十分否。」

(10)「淡底金」「淡」は、薄い、純度が低い、濃度が低いの意。

(11)「『荀子』曰。心臥則夢、偸則自行、使之則謀」『荀子』「解蔽篇」「心、臥則夢、偸則自行、使之則謀。故心未嘗不動也。」楊倞注「臥、寢也。自行、放縱也。使、役也。言人心有所思、寢則必夢、偸則必放縱、役用則必謀慮。」本巻、八六条に既出。

(12)「某自十六七讀時」『語類』巻一〇四、八条、楊道夫録（Ⅶ2612）「某是自十六七時、下工夫讀書、彼時四旁皆無津涯、只自恁地硬著力去做。」

(13)「偸心」「偸」は、いいかげんであるさま。『禮記』「表記」「子曰。君子莊敬曰強、安肆曰偸。」鄭注「偸、苟且也。」

(14)「倒要自家去捉它」「倒」は、「かえって」。

(15)「看這説話不出」「看…不出」は、「…を見出すことができない」「…をわかっていない」。巻一四、四四条に既出。

(16)「譬如果子爛熟後、皮核自脱落離去、不用人去咬得了」「果子」は格物致知、「爛熟」は、その工夫を充分に行うこと、「皮核」は「不善之雜」、「自脱落離去」は意が自ずと誠になること、「人去咬得」は不善の雜を無理やり抑えこむこと、をそれぞれ喩える。「皮核」は、皮と種。『語類』巻一八、九四条、輔廣録（Ⅱ415）「大凡爲學、須是四方八面都理會教通曉、仍更理會向裏來。譬如喫果子一般、先去其皮殼、然後食其肉、又更和那中間核子都咬破、始得。若不咬破、又恐裏頭別有多滋味在。若是不去其皮殼、固不可。若只去其皮殼了、不管裏面核子、亦不可。恁地則無緣到得極至處。」『齊民要術』巻四「桃酢法。桃爛自零者、收取内之於瓮中、以物蓋口。七日之後既爛、漉去皮核、密封閉之。三七日、酢成香美、可食。」

(17)「一重不曾透徹在」格物致知によって、薄皮を一枚ずつ剥いでいくイメージ。格物致知が不徹底なために認識に不十分なところがあり、なお薄皮一枚を隔てている、ということ。」

(18)「如箇尖鋭底物事」『大学』伝六章冒頭の聖人の言葉を、「この尖鋭なもののようだ」とする喩えは、具体的にその場にあった何か鋭利なものを用いたものか。

(19)「椿頭子」「椿子」ともいう。「椿」には、一、切り株、二、杭棒、三、中心、などの意味がある。ここでは、杭の意。尖鋭なものに対して鈍重な木の棒杭。

(20)「硬遏捺」「硬要去強捺」「硬」は「無理に」の意。「捺」「強捺」は、抑えつける、抑制する。

(21)「如何塞得住」「どうして塞ぎきることができようか。」「…得住」は、動詞のあとにつけて、その動作が確実に遂行されることをあらわす。否定形は「…不住」。

(22)「又引中庸論誠處而曰」『中庸章句』二〇章「天下之達道五、所以行之者三。曰。君臣也、父子也、夫婦也、昆弟也、朋友之交也。五者、天下之達道也。知仁勇三者、天下之達德也。所以行之者、一也。」朱注「一則誠而已矣。」

(23)「若才有些子間雜」「些子」は、「わずかの」。

(24)「拗你莫去爲善」「拗你莫要惡惡」「拗」は、反対の方向に引っぱっていくこと。

(25)「因引『近思録』「如有兩人焉、欲爲善云云」一段」『近思録』巻四「(明道先生曰)…有人胸中常若有兩人焉。欲爲善、如有惡以爲之間。欲爲不善、又若有羞惡之心者。本無二人、此正交戰之驗也。持其志、使氣不能亂、此大可驗。要之、聖賢必不害心疾。」程明道の言葉。この一文の異文は、『語類』巻六九、五〇条、楊道夫録(Ⅴ1721)に、「程子謂『一心之中如有兩人焉。將爲善、有惡以間之。爲不善、又有愧恥之心。此正交戰之驗。』程子此語、正是言意不誠、心不實處。」としても引かれる。

(26)「脱空」でたらめ、虚妄であること。巻一五、一〇四条に既出、注(3)を参照。『雲門廣録』巻下「問僧。曾講百法論是不。僧云。是。師云。爲什麼脱空妄語。」

(27)「壞了」「壞」は「壞れる」ではなく、現代漢語の「壞」(huài)(悪い、劣悪である)の意。

(28)「便和那七分底也壞了」「和」は、現代漢語の「連」と同じく「…と同じく」「…さえも」の意。太田辰夫前掲書、二六六頁「現代語では《連》を用いるが、包括のみならず強調のこともある。…古くは《和》もこれに用いられた。…《和》によってこのように強調するいいかたは宋元に多い。」

(29)「十二因縁、只是一心之發」「十二因縁」は、一、「無明」(無知)二、「行」(潜在的形成力)、三、「識」(識別作用)、四、「名色」(名称と形態)、五、「六処」(眼・耳・鼻・舌・身・意の六つの感覚器官)、六、「触」(接触)、七、「受」(感受作用)、八、「愛」(渇愛、妄執)、九、「取」(執着)、十、「有」(生存)、十一、「生」(生まれること)、十二、「老死」(老いること死ぬこと)。「現実の人生の苦悩の根元を追究し、その根元を断つことによって、苦悩を滅するための12の条件を系列化したもの」(『岩波仏教辞典』、三九六頁)。新訳で「十二縁起」といい、旧訳で「十二因縁」という。『大乗義章』巻一「如經中説、十二因縁皆一心作。」(大正四四、四八六中)

(30)「又有所謂流注想、他最怕這箇。…此即荀子所謂偸則自行之心也」「流注」は、瑜伽行派の術語。織田得能『仏教大辞典』(一八〇七頁)「有為法の刹那刹那に前滅後生して相続不断なること水の流注する如きを云う。」例えば、『楞伽經』巻一「最勝無邊善根成熟、離自心現妄想虚僞、宴坐山林、下中上修、能見自心妄想流注、無量刹土諸佛灌頂、得自在力神通三昧」。(大正一六、四八四中)『語類』において、朱子はしばしば佛家の「流注想」に言及し、それは『荀子』の「偸則自行」と同じであるという。巻二一、一三条、潘時舉録(Ⅱ484)「曰。人之本心、固是不要不忠信。但才見是別人事、便自不如己事切了。若是計較利害、猶只是因利害上起、這箇病猶是輕。惟是未計較利害時、已自有私意、這箇病却最重。往

往是才有這箇軀殼了、便自私了、佛氏所謂流注想者是也。所謂流注者、便是不知不覺、流射做那裏去。但其端甚微、直是要省察。」卷七二、一一五条、憂淵録（V 1838）「『中行無咎、中未光也。』事雖正而意潛有所係吝、荀子所謂偸則自行、佛家所謂流注不斷、皆意不誠之本也。」

(31)「所以潙山禪師云。某參禪幾年了、至今不曾斷得這流注想」「潙山禪師」は、中唐から唐末の潙山霊祐禅師（七七一～八五三）。百丈懐海の法嗣。弟子の仰山慧寂とともに潙仰宗の祖とされる。現行の『潙山語録』および『祖堂集』、『景德傳燈録』などには、この話は見いだせない。

109条

次早、又曰。昨夜思量敬子之言自是、但傷雜耳。某之言、却即説得那箇自欺之根。自欺却是敬子容字之意、容字却説得是。蓋知其爲不善之雜而又蓋庇以爲之、此方是自欺。

謂如人有一石米、却只有九斗、欠了一斗、此欠者便是自欺之根。自家却自蓋庇了、嚇人説是一石、此便是自欺。

謂如人爲善、他心下也自知有箇不滿處、他却不説是他有不滿處、却遮蓋了硬説我做得是、這便是自欺。却將那虚假之善來蓋覆這眞實之悪。某之説却説高了、移了這位次了、所以人難曉。

大率人難曉處、不是道理有錯處時、便是語言有病。不是語言有病時、便是移了這歩位了。今若只恁地説時、便與那小人閒居爲不善處都説得貼了。　倜

〔校勘〕

○「次早又曰」　朝鮮古写本は「又」を「文」に誤る。

○「那箇自欺之根」　萬曆本、朝鮮古写本、和刻本は「箇」を「个」に作る。以下同じ。

○「蓋知其爲不善之雜」　萬曆本、朝鮮古写本、和刻本は「蓋」を「盖」に作る。以下同じ。

○「此欠者便是自欺之根」　朝鮮整版本は「便」を「偃」に作る。以下同じ。

○「硬説我做得是」　朝鮮整版本は「硬」を「硜」に作る。

○「虚假之善」　萬曆本、朝鮮整版本、和刻本は「虚」を「虛」に作る。

○「蓋覆這眞實之悪」　萬曆本、和刻本は「悪」を「恶」に作る。

○「小人閒居爲不善」　成化本、朝鮮古写本は「閒」を「間」に作る。

〔参考〕

本条は、眞德秀『大學集編』に「次早又曰」から「此方是自欺」までが引かれる。

〔訳〕

翌朝またおっしゃる。「昨晩考えてみたが李敬子の説は正しいが、ただ粗雑であっただけだ。私の説は、あの「自ら欺く」の根っこにつ

いていったものだ。自ら欺くとは、李敬子のいう「容」（容認する）の意味であり、「容」の字は正しい。思うに、不善の夾雑があることを知っていながら、その自覚する気持ちに蓋をして不善を行うことを、自ら欺くという。

例えば、人に一石の米があるとして、実際には九斗しかなく、一斗足りない場合、この足りない一斗が自ら欺くことの根っこである。自分自身で（足りないことを）覆いかくして、他人にこれは一石だと言い張るのは、これが自ら欺くことである。

例えば、人が善を行おうとして、心の中に意に満たないところがある場合に、意に満たないところがあるとはいわず、却ってそれを覆いかくして、自分がやっていることは正しいと強引にいうのが、これが自ら欺くことである。あの虚偽の善によって真実の悪を覆いかくしてしまうのである。私の説き方は高きに過ぎ、このような（高い）次元にまで達してしまって、他人が理解するのは難しい。

およそ他人が理解するのが難しいところとは、道理に誤りがある場合でなければ、言葉に問題がある場合である。言葉に問題がなく、しかも理解が難し）いとすれば、（それは内容が）このような（高い）次元に達している場合である。いまもしそのようにいえば（李敬子のいうとおり自欺を「容」で解釈すれば）、「小人閑居して不善を為す」の部分とぴったり符合するのだ。」沈僩録

〔注〕

（1）「蓋庇」覆いかくす。

（2）「謂如人有一石米」「謂如」は、「たとえば」。宋代の一升は、約六六〇ミリリットル、一斗は約六、六リットル、一石は約六六リットル。呉慧『新編簡明中国度量衡通史』（中国計量出版社、二〇〇六年）第七章「宋元的度量衡」参照。

（3）「嚇人」「嚇」は大きな声でどなる、はったりをきかせる。本巻、一一五条「伊川問尹氏。「讀『大學』如何。」對曰。「只看得『心廣體胖』一句甚好。」又問如何、尹氏但長吟「心廣體胖」一句。尹氏必不會嚇人、須是它自見得。今人讀書、都不識這樣意思。」

（4）「他心下也自知有箇不滿處」「心下」は、心のうち、心中。「不滿」の逆に、自ら満ち足りて、快いのが「自慊」。

（5）「某之説却説高了、移了這位次了、所以人難曉」「位次」とは、次元、レベル。「高度なことをいってしまった」（説高了）とか、「このような（高い）次元に達してしまって」（移了這位次了）というのは、朱子が、自欺の根源について論じていることを指す。

（6）「便是移了這歩位了」「歩位」は、位置、地歩。

（7）「説得貼了」「貼」は、ふさわしい、妥当。『文選』巻一七・陸機「文賦」「或妥帖而易施、或岨峿而不安。」「帖」と「貼」は通用。

110条

次日、又曰。夜來説得也未盡。夜來歸去又思、看來如好好色、如惡惡臭一段、便是連那毌自欺也説。言人之毌自欺時、便要如好好色、如惡惡臭様、方得。若好善不如好好色、惡惡不如惡惡臭、此便是自欺。

毋自欺者、謂如爲善、若有些子不善而自欺時、便當斬根去之、真箇是如悪悪臭、始得。

　如小人閒居爲不善底一段、便是自欺底、只是反説。閒居爲不善、便是悪悪不如悪悪臭、見君子而後厭然、揜其不善而著其善、便是好善不如好好色。若只如此看、此一篇文義都貼實平易、坦然無許多屈曲。某舊説忒説闊了、高了、深了。然又自有一様人如舊説者、欲節去之又可惜。但終非本文之意耳。僩

〔校勘〕

○「如悪悪臭一段」　萬暦本、和刻本は本条の「悪」を全て「悪」に作る。

○「真箇」「箇」を萬暦本、和刻本は「個」、朝鮮古写本は「个」に作る。

○「闊」　萬暦本、朝鮮整版本、和刻本は「濶」に作る。

〔訳〕

　次の日、またおっしゃった。「昨晩は言い尽くせなかった。昨晩もどってさらに考えて思うに、「好色を好むが如く、悪臭を悪むが如し」はあの「自ら欺くこと毋し」をもあわせ説かれていることに思い至った。それは、人が「自ら欺くこと毋し」の時に「好色を好むが如く、悪臭を悪むが如く」のようであってはじめてよい、ということなのだ。もし善を好むことが好色を好むが如くではなく、悪を悪むことが悪臭を悪むがごとくでなかったら、それが「自ら欺く」ということなのだ。「自ら欺く毋し」とは、たとえば善をなすとき、もしいささかでも不善であって自ら欺くことがあったなら、それを根源からたちきるべきで、本当に「悪臭を悪むが如く」であってはじめてよいのだ。

「小人閒居して不善を為す」の一段は、「自ら欺く」ことであって、これは反対の面から言ったものにすぎない。「閒居して不善を為す」とは、悪を悪むことが悪臭を悪むが如くではない、ということである。「君子を見て、而る後に厭然とし、其の不善を揜いて其の善を著す」とは、これは善を好むことが好色を好むが如くではない、ということである。もしこのように考えれば、この伝六章という一編の文章の意味は、非常に穏当平易で内容とぴったり合致するものであって、なんの曲折もない平明なものだということになる。わたしの以前の説は、広闊に過ぎ、高尚に過ぎ、深遠に過ぎた。とはいうものの、同様に旧説のように考えていた人たちがいるので、そこだけ削除しようとするならそれはそれで残念だ。しかしながら結局のところ旧説は『大学』の本文の意を尽くしたものではない。」　沈僩録

〔注〕

（1）「夜來説得也未盡」「自欺」の解釈をめぐって、先の一〇八条では、それと知りながら不善を許容してしまう（「容」）、とする李燔（字敬子）の説を否定、「容」字自体の使用は認めるものの、それは意識的に許容するのではなく、どうしてもそれをとどめられないから結果的に許容してしまうのであって、許容しようとして許容するのではないとし、従って、「誠意」＝「毋自欺」の工夫において、不善を「おさえつける」（「捺」「遏捺」）という在り方に対しても、朱子は否定的だった。翌日早朝の記録である

一〇九条では朱子は一転、李燔の説を肯定している。そして同じく翌朝の記録と思われる本条では、「當斬根去之」として、はっきり意識的にたちきる方向で読むという解釈を採っており、その点では基本的に一〇九条と同じ立場である。だから「昨晩は言い尽くせなかった」として、一〇八条における前言を撤回した形になっている。なお本巻一二〇条参照。

(2)「夜來歸去又思」　ここでの「歸」とは、講学を行う部屋から自身の寝室に退く意か。朱子と門人は書院・精舎で飲食起居をともにしながら講学していた。門人が朱熹の寝室に招じられるケースもあったが、広間のような場所で講学し、講学が済むと朱熹も門人もそれぞれ寝室に退く、というケースが一般的であったようだ。以下の例を参照。『語類』巻六四、四八条、沈僩録（Ⅳ 1568）「或曰。中庸之盡性、即孟子所謂盡心否。曰。只差些子。或問差處。曰。不當如此問。今夜且歸去與衆人商量、曉得箇至誠能盡人物之性分曉了、却去看盡心、少間差處自見得、不用問。」巻一〇七、二二条、葉賀孫録（Ⅶ 2668）「季通被罪、臺評及先生。先生飯罷、樓下起西序行數回、即中位打坐。賀孫退歸精舍、告諸友。…是夜諸生坐樓下、圍爐講問而退。」巻一一七、四六条、訓陳淳（Ⅶ 2825）「是夜再召淳與李丈入臥內、曰。」巻九〇、三〇条、葉賀孫録（Ⅵ 2295）「新書院告成、明日欲祀先聖先師、古有釋菜之禮、約而可行、遂檢五禮新儀、令具其要者以呈。先生終日董役、夜歸即與諸生斟酌禮儀。雞鳴起、平明往書院、以廳事未備、就講堂禮。…請先生就中位開講。先生以坐中多年老、不敢居中位、再辭不獲、諸生復請、遂就位、說為學之要。午飯後、集衆賓飲、至暮散。」なお朱熹の居所の傍らに建てられた精舎の例としては竹林精舎（滄洲精舎、後の考亭書院）が有る。崔銑『朱子実紀』巻七「考亭書院」「（紹熙）五年（一一九四）、以四方來學者衆、復築室於所居之東、以處之。扁曰竹林精舎。後因舎前有洲環遶、更名曰滄洲精舎。」

(3)「看來如好好色」「看來」は、思うに。

(4)「連～也」　～もまた

(5)「様」　～のように、～と同様に。如～様、若～様の句法でも用いられ、現代語の「像～一様」に相当する。

(6)「些子」　いささか

(7)「如小人間居為不善底一段、便是自欺底、只是反説」「容」字に改めるべしという李燔の主張を肯定した一〇九条においても、「今若只恁地説時、便與那小人間居為不善處、都説得貼了」と述べ、「自欺」を「小人間居」云々と抱き合わせて解釈する立場を示している。

(8)「真箇是」　ほんとうに。確実に。

(9)「反説」　逆の面から言う。本巻九七条参照。

(10)「貼實」　内容と表現がぴったり合致している。『語類』巻一三九、六二条、楊道夫録（Ⅷ 3311）「坡文、雄健有餘、只下字亦有不貼實處。」

(11)「平易」　わかりやすい。『語類』巻七〇、二六条、夔淵録（Ⅴ 1747）「卦辭有平易底、有難曉底。」

(12)「坦然」　道（＝道理）が本来平坦なものであることを、道路にでこぼこがないこと、さらに本来人はその道を安んじて進む（＝

実践する）ことができるものであることと重ね合わせたイメージで朱子は考えている。従って、続く「屈曲」も、文章にむやみな屈曲がないことだが、それは道自体がまっすぐであることと対応する。『語類』巻一五、一〇一条、沈僩録（Ⅰ302）「如人夜行、雖知路從此去、但黑暗、行不得。所以要得致知。知至則道理坦然明白、安而行之。」

（13）「無許多」　許多は、「多い」意と「少ない」意の両方を持つが、はここでは「いささか」の意。従って「いささかの～もない」。『語類』巻二二、一一条、董銖録（Ⅱ509）「問「良、易直」之義。曰。平易坦直、無許多艱深纖巧也。」

（14）「某舊說忒說闊了、高了、深了」「忒」は、～にすぎる。極端すぎる。『語類』巻四一、二一条、潘時挙録（Ⅲ1047）「如此等語也說忒高了。」なおこの発言は一〇九条における「某之說、却說高了」に対応している。ここでの「舊說」とは「容」字に改める李燔説に対して、自身の元来の説、即ち一〇八条に誠意章の注として言及される「外為善、而中實未能免於不善之雜。」を指す。なお「舊說」に関しては一二〇条にも言及がある。

111条

看誠意章有三節、兩必慎其獨、一必誠其意。十目所視、十手所指、言小人閒居爲不善、其不善形於外者不可揜如此。德潤身、心廣體胖、言君子慎獨之至、其善之形於外者證驗如此。　銖

〔校勘〕

○朝鮮古写本は巻一六にこの条不載。

○「慎」　各本みな「謹」に作る。以下同じ。

○「證」　朝鮮整版本は「徵」に作る。

〔訳〕

誠意章を読んでみると、三節に分かれている。二つの「必慎其独」とひとつの「必誠其意」である。「十目の視る所、十手の指さす所」とは、「小人間居して不善を為」し、その不善の外にあらわれるものがおおいかくすことができないことがこのようにあきらかであるということを言っている。「徳は身を潤し、心は広く体は胖（はん）たり」とは、君子は充分に慎独しているので、その善が外に現れてこのようにはっきりと見て取れるということを言っている。　董銖録

〔注〕

（1）「三節」　『大学章句』の伝六章は、それぞれ末文が「必慎其獨也」「必慎其獨也」「必誠其意」で終わる三つの部分に区切られて注釈がつけられている。

（2）「十目云々」　『大学章句』伝六章「曾子曰。十目所視、十手所指、其嚴乎。富潤屋、德潤身、心廣體胖。故君子必誠其意。」朱注「引此以明上文之意。言雖幽獨之中、而其善惡之不可揜如此。可畏之甚也。胖、安舒也。言富則能潤屋矣、德則能潤身矣。故心無愧怍、

則廣大寛平而體常舒泰。德之潤身者然也。蓋善之實於中而形於外者如此。故又言此以結之。」同所鄭玄注「胖、猶大也。三者言有實於内顯見於外。」

（3）「不可揜如此」「十目所視云々」に対する章句の文。

（4）「善之形於外者」「富潤屋云々」に対する章句に「蓋善之實於中而形於外者如此」と見える。

（5）「證驗」　証拠、その事実をはっきりしめすものごと。

112条

問十目所視、十手所指。曰。此承上文人之視己如見其肺肝底意。不可道是人不知、人曉然共見如此。　淳　十目所視以下

〔校勘〕

○「上文」　朝鮮古写本は「上文云」に作る

○「十目所視以下」　朝鮮古写本はこの六字を欠く

〔訳〕

「十目の視る所、十手の指さす所」をおたずねします。」先生がおっしゃった。「これは上の文章の「人の己を視ること、其の肺肝を視るが如し」の意味を承けている。「これは人が知らないことだから（何をしても構わない）」などと言ってはだめで、人はみなこのようにはっきり見ているのだ。」陳淳録　「十目所視」以下について

〔注〕

（1）「人曉然共見」『朱文公文集』巻一五「經筵講義」に「臣熹曰。言雖幽隱之中、吾所獨知之地、而衆所共見有如此者、可畏之甚也。」とあるのを参照。

113条

魏元壽問十目所視止心廣體胖處。曰。十目所視、十手所指、不是怕人見。蓋人雖不知、而我已自知、自是甚可皇恐了、其與十目十手所視所指、何以異哉。富潤屋以下、却是説意誠之驗如此。　時舉

〔校勘〕

○「魏元壽問」　朝鮮古写本は「元壽問誠意章曽子曰」に作る

○「曰」　朝鮮古写本は「先生曰」に作る

〔訳〕

魏椿が「十目の視る所」から「心広ければ体胖たり」までのところについて質問した。先生がおっしゃった。「「十目の視る所、十手の指す所」とは、人が見ていることを恐れるということではない。思うに人が知らなくとも、わたしは既に自分でわかっているわけだから、当然これははなはだ恐恐とすべきことなのであって、それは十目十手で視られたり指されたりするのと、どこが違うというのか。「富は屋

を潤し」以下は、こちらは「意誠」になるとそれがどのようにあらわれてくるかということを説明した部分だ。」　潘時挙録

〔注〕

(1)「魏元壽」　魏椿、字元壽。『朱子語録姓氏』に見える。

(2)「怕人見」　『列子』「周繆王」に「鄭人有薪於野者、遇駭鹿、御而擊之斃之。恐人見之也、遽而藏諸隍中覆之。」とあるのを参照。

(3)「皇恐」　おそれること。「惶恐」に同じ。『漢書』巻六六「劉屈氂伝」「上聞而大怒、下吏責問御史大夫曰。司直縱反者、丞相斬之、法也。大夫何以擅止之。勝之皇恐自殺。」

(4)「甚可皇恐了」　章句に「可畏之甚也」とあるのを参照。

(5)「我已自知」　胡渭はこの条を引いて次のように言う。「此必朱子未定之論。雲峰因此而誤、近世良知家解此二句謂、以吾心之明還而照吾心之隱。是十目十手、不在他人而在吾心。所視所指、非他人之視我指我、而吾心之自視自指矣。此即佛氏觀心之説。隱者一心也。還而照之者又一心也。如目視目、如手指手、有是理乎。」(『大學翼真』巻六)

114条

心廣體胖、心本是闊大底物事、只是因愧怍了、便卑狹、便被他隔礙了。只見得一邊、所以體不能常舒泰。　僩

〔校勘〕

○「闊」　萬曆本、朝鮮整版本、和刻本は「濶」に作る。

○「常舒泰」　成化本、朝鮮古写本、朝鮮整版本は「常」を「得」に作る。また朝鮮整版本の巻末校記に「得一作常」と記される。(呂留良本が既に「常」に作っている)

〔訳〕

「心広ければ体胖たり」について、心はもともとひろびろとしたものなのだが、ただうしろめたいことがあることによって小さく狭められ、それによってへだてさまたげられてしまう。そしてただ一面しか見えなくなる。だから体が常にのびのびしているというわけにはいかないのだ。　沈僩録

〔注〕

(1)闊大　心が闊大だというイメージは、程子に基づく。『二程遺書』巻二上「須是大其心使開濶。譬如為九層之臺、須大做脚、始得。」(『近思録』巻二にも引く)

(2)「愧怍」　うしろめたいこと。『孟子』「盡心」上「仰不愧於天、俯不怍於人。」なお、この「愧怍」あるいは文末の「常舒泰」などは朱子はそのまま本章の章句に使っている。本巻一一一条の注を参照。

(3)「卑狹」　『韓非子』「難一」「凡對問者、有因問小大緩急而對也、所問高大而對以卑狹、則明主弗受也。」

（4）「隔礙」　隔離阻礙。『魏書』巻一〇一「氏傳」「隔礙姚興、不得歲通貢使。」

（5）「常舒泰」「心廣體胖」の章句「故心無愧怍、則廣大寛平、而體常舒泰。」を参照。

115条

伊川問尹氏、讀大學如何。對曰。只看得心廣體胖一句甚好。又問如何。尹氏但長吟心廣體胖一句。尹氏必不會嚇人、須是它自見得。今人讀書、都不識這樣意思。

〔校勘〕

○朝鮮古写本巻一六はこの条不載。

〔参考〕

本条は巻九七（八八条、Ⅶ2497）にも沈僩録として「伊川問尹和靖、近日看大学功夫如何。和靖曰。只看得心廣體胖處意思好。伊川曰。如何見得好。尹但長吟心廣體胖一句而已。看他一似瞞人、然和靖不是瞞人底人。公等読書、都不見這般意思。」と記録される（朝鮮古写本も同じ）。

〔訳〕

伊川が尹氏に質問して「大学は読んでどう思うか」ときいたところ、尹氏は「心広ければ体胖たり」の一句がとてもよいということがわかりました」と答えた。伊川がさらに「どういうことだ」と問うたところ、尹氏はただ「心広ければ体胖たり」の句をゆったり吟じた。尹氏はどうみても人をけむにまくようなことができる人間ではない。きっと彼は自分ではわかっていたのだ。今の人は本を読むとき、まったくこういう気持ちがわかっていない。　記録者名を欠く

〔注〕

（1）「須是」　きっと、必ず。『宣和遺事』後集「須是忍耐強行、勿思佗事。」

（2）「嚇人」　人をけむにまく。まどわす。校勘記に挙げた巻九七の文章が「瞞人」に作るのを参照。また『朱文公文集』巻五三の胡季隨に答えた手紙の中で、胡氏の「中和未易識也」に対して朱子が「中和未易識、亦是嚇人。此論著實做處、不論難識易識也。」と、中和は着実に実行することが問題であって、わかりやすいかどうかで説くのが「嚇人」だと批判しているのを参照。

（3）「今人讀書、都不識這樣意思」　この「這樣」が何を指すのかわかりにくいが、高攀龍『朱子節要』巻三はこの条を「尹氏必不会嚇人、須是它自見得。」の二句を省略して引用しており、「這樣」が尹和靖の読書法を指すと解したことを示している。

116条

問。尹和靖云、心廣體胖、只是樂、伊川云、這裏著樂字不得、如何。曰。是不勝其樂。　徳明。

〔校勘〕

○「裏」　萬暦本、和刻本は「裡」に作る

○「著」　成化本、萬暦本、朝鮮古写本、和刻本は「着」に作る

〔訳〕

質問した。「尹和靖が「心広ければ体胖たり」はただもう楽しいのです、と言ったところ、伊川が「ここは「楽」という表現を用いることさえできない。」と言ったのはどういうことでしょう。」先生がおっしゃった。「「楽」という文字では、この大学にいう「心廣體胖」という真の楽しみをあらわせないということだ。」　廖徳明録

〔注〕

（1）「尹和靖云」『程氏外書』巻一二に「和靜嘗請曰。某今日解得心廣體胖之義。伊川正色曰。如何。和靜曰。莫只是樂否。伊川曰。樂亦沒處著。」（涪陵記善録）また「先生一日看大學有所得、欲舉以伊川。伊川問之。先生曰。心廣體胖只是自樂。伊川曰。到這裏和樂字也著不得。」（祁寛所記尹和靜語）

（2）「不勝其樂」『北溪大全集』巻三八、陳伯澡の「問程子説心廣體胖、這裏著樂字不得。」に対する陳淳の答え「心廣體胖、地位高、自是樂之發散、有自然安泰氣象。人見其為樂、而自不知其為樂也。如何更著得樂字。」を参照。ここで陳淳は、その楽しみが自然と出てくるものであって、その人が「楽しもうと思って楽しむ」ということではない、としている。また『黄氏日抄』巻三三「周子於通書固嘗言之曰。見其大而忘其小焉。爾大者、性命之源、道徳之至尊至貴。小則所謂芥視軒冕、塵視金玉者也。夫然故唫風弄月、自然不勝其樂。如吾與點也之意、亦正由浴沂舞雩、脫然自有真樂。」が参考になる。

117条

問心廣體胖。曰。無愧怍、是無物欲之蔽、所以能廣大。指前面燈云。且如此燈、後面被一片物遮了、便不見一半了。更從此一邊用物遮了、便全不見此屋了。如何得廣大。　夔孫

〔校勘〕

諸本異同無し

〔訳〕

「心広ければ体胖たり」について質問した。先生がおっしゃった。「うしろめたいことがなければ、物欲に蔽われていない、ということだ。だから心が広々としていることができるのだ。」そして、前にあった灯りを指して言われた。「たとえばこの灯りだが、後ろ側を何か一つのもので遮れば、半分は見えなくなる。そしてさらにこちら側もなにかで遮ってしまえば、全くこの部屋は見えなくなってしまうのであっ

て、どうしたって広々というわけにはいかない。」　林夔孫録

〔注〕

（1）「燈」　朱子はしばしば灯明を喩えに用いる。『語類』巻一四、一四五条、襲蓋卿録（Ⅰ276）「先生指燈臺而言、如以燈照物。照見處所見便實、照不見處便有私意、非真實。」灯明をおおう例は、巻一五、一〇一条、沈僩録（Ⅰ302）を参照。

118条

問誠意章結注云此大學一篇之樞要。曰。此自知至處便到誠意、兩頭截定箇界分在這裏、此便是箇君子小人分路頭處。從這裏去、便是君子、從那裏去、便是小人。這處立得脚、方是在天理上行、後面節目未是處、却旋旋理會。　寓

〔校勘〕

○「箇界分」　朝鮮古写本は「箇」を「个」に作る。

○「在這裏」　萬曆本、和刻本は「裏」を「裡」に作る。以下同じ。

○「箇君子」　萬曆本、朝鮮古写本、和刻本は「箇」を「个」に作る。

○「旋旋」　萬曆本、和刻本は二文字目をおどり字に作る。

〔訳〕

誠意章の注釈の結びとして「ここが大学という一篇の文章の枢要である」とあるのについて質問した。先生がおっしゃった。これは、「知至」から「誠意」に至るまでのあいだに、二箇所でしっかりと境界を区切っている、ということだ。これは君子と小人の分かれ目のところだ。こちらの誠意から進んでいけば君子であり、あちらから進めば小人となる。ここの誠意のところに足をすえて、はじめて天理の上を進むことができるのであり、のちの条目のまだ十分でないものも、そこからしだいに取り組めるのだ。　徐寓録

〔注〕

（1）「此大学一編云々」　現在の章句にはこの文章は見えない。

（2）「兩頭截定箇界分在這裏」　二箇所できっちりと境界を峻別している。「兩頭」は二つ、二箇所。『字海便覧』「兩頭トハ兩方ト云フコトナリ。」「截定」は裁断する、区切る。「在這裏」は、上の動作がしっかりと行われることを指す。格物致知と誠意が『大学』における二大関門である、という趣旨に関しては、以下を参照。巻一五・八五条（Ⅰ298　林夔孫録）に「格物是夢覺關、誠意是善惡關。過得此二關、上面工夫却一節易如一節了、到得平天下處、尚有些工夫。只為天下濶、須要如此點檢。又曰。誠意是轉關處。」

（3）「分路頭」　わかれめ

（4）「從～去」　移動の始点を示す場合と、方向を示す場合とがある。ここでは始点の意で訳しているが、「誠意に進んでいけば」の可能性もある。

（5）「立脚」　足場を決める。『語類』巻一三、一八条、曽祖道録（Ⅰ224）「大抵人能於天理人欲界分上立得脚住、則儘長進在。」

（6）「旋旋」　しだいに

（7）「未是處」　充分になっていないところ。『語類』巻二二、二七条、沈僩録（Ⅱ511）「才説三年無改、便是這事有未是處了。若父之道已是、何用説無改。終身行之可也。事既非是、便須用改、何待三年。孝子之心、自有所不忍耳。若大段害人底事、須便改始得。若事非是而無甚妨害、則三年過了、方改了。」

119条

居甫問。誠意章結句云此大學之樞要、樞要説誠意、是説致知。曰。上面關著致知、格物、下面關著四五項上。須是致知。能致其知、知之既至、方可以誠得意。到得意誠、便是過得箇大關、方始照管得箇身脩正。若意不誠、便自欺、便是小人。過得這箇關、便是君子。

又云。意誠、便全然在天理上行。意未誠以前、尚汨在人欲裏。　賀孫

〔校勘〕

○「關」　萬曆本、朝鮮古写本、和刻本は「関」に作る。以下同じ。

○「著」　成化本、萬曆本、朝鮮古写本、和刻本は「着」に作る。以下同じ。

○「箇」　萬曆本、朝鮮古写本、和刻本は「个」に作る。以下同じ。

○「裏」　萬曆本、和刻本は「裡」に作る。

〔訳〕

徐寓が質問した。「誠意章の結句に「これは大学の枢要」とありますが、枢要なのは誠意のことでしょうか、致知のことでしょうか。」先生がおっしゃった。「上は致知格物にかかわり、下は正心以下の五つの事柄にかかわる。知を致さねばならないのであって、知が至れば、それではじめて意を誠にすることができる。意が誠になったら、これはこの大きな関門を通れたということで、それではじめて自分の身心を制御できたことになる。もし意が誠でなければ、自らを欺いたのであり、これでは小人である。この関門を通れてこそ君子なのだ。」

またおっしゃった。「意が誠なら、全くもって天理の上を行くことになり、意がまだ誠になっていなければ、依然として人欲の中に埋没しているのだ。」　葉賀孫録

〔注〕

（1）「居甫」　徐寓、字居甫（父）、『朱子語録姓氏』所収。

（2）「四五」　数字を二つ並べて、その後ろの数字を指示する。ここでは「四か五」ではなく、「五」と言うに同じ。本巻一八七条、林子蒙録（Ⅱ354）「嘗謂脩身更多少事不説、却説此五者何謂。子細看來、身之所以不脩者、無不是被這四五箇壞。」従って、四を言うなら「三四」となる。『語類』巻三五、一五九条、劉炎録（Ⅲ944）「此三四人終是有不服底意。舜只得行遣。故曰。四罪而天下咸服。」なお、「五」つのものとは、正心以下の五条目。

120条

因説誠意章、曰。若如舊説、是使初學者無所用其力也。中庸所謂明辨、誠意章而今方始辨得分明。　夔孫

〔校勘〕

○「使」　成化本、朝鮮整版本は「便」に作る（呂留良本作使）。朝鮮整版本巻末「考異」に「便一作使」と記す。（考文解義の「考異」は「便一作使」とした上で「按此是」とする。）

〔訳〕

誠意章について話されたときにこうもおっしゃった。「もし旧説のままだと、これでは初学者はどこに手をつけたらよいかわからない。『中庸』には「明らかに弁ずる」といわれているが、誠意章はまさに今やっと初めてはっきりと弁別することができたよ。」　林夔孫録

〔注〕

（1）「旧説云々」　この百二〇条は、ある時点でのこの伝六章の注の改作について述べたものである。またこの問題は一〇九条に「某之説、却説高了」、一一〇条に「某舊説忒説闊了、高了、深了。」とあり、本条における「若如舊説、是使初學者無所用其力也」と基本的に同方向の自己評価である。従って一一〇、一二〇の両条における「舊説」は同じものを指すと思われる。なお、一〇八条に「容字又是第二節、緣不柰他何、所以容在這裏。此一段文意、公不曾識得它源頭在、只要硬去捺他、所以錯了。」「只是認得箇容著、硬遏捺將去、不知得源頭工夫在。」とあり、一〇九条には「某之言、却即説得那箇自欺之根」とあって、自説と李燔の説が対比されている。

○朱子説「外為善、而中實未能免於不善之雜」

○李燔説「外為善、而中實容其不善之雜」（ともに一〇八条）

一〇八条は「源頭処」について説いたものなので、初学者にとっては高きに過ぎて実践しがたい、ということにもなる。従ってここでの旧説は「外為善、而中實未能免於不善之雜」という章句旧注を指すと思われる。なお、「旧説」が何を指すのかについては、『大学翼真』において胡渭はこの条を引用した上で、ここでの「旧説」を「偸則自行之説」のことを言うと注記している。即ち、朱子は八五条、一〇八条において「毋自欺也」に関連して『荀子』の「偸則自行」を引用して説くが、特にその部分のことを言うのだという解釈である。さらに胡渭は同書において次のようにも書いている。「説自欺云陰在於惡而陽為善、未免太麤、以不知不覺陷於自欺、為荀子之偸心。又説得太高。及與李敬子辨論、始有定見。知毋自欺為大學教人徹上徹下事。故語人曰。誠意章而今始辨得分明。蓋今本章句云云、即其時所更定也。然惟聖罔念作狂。即到聖賢地位、亦須防自欺。顔子尚有不善。曽子日省其身。故偸心自行之説、亦不可廢。」ただ、本巻を見るに、「毋」を「なし」とするか「なかれ」とするかに関して朱子は揺れており、押さえつけようとするのはいけない、つまり「なかれ」としてはいけないと厳しく言っ

たことを語類には載せる（たとえば、一〇八条「公只是硬要去強捺、如水恁地滚出來、却硬要将泥去塞它、如何塞得住。」）が、結局現在の章句は「毋者、禁止之辞」とあって、はっきり「なかれ」と読ませている。「なし」では茫洋としていて初学者がどう取り組めばよいのかわからないので、最終的には現在の章句のように「なかれ」として、自欺をしないように、と工夫がしやすい初学者向けの解釈に変えたのだ、とここでは考えたい。（なお、考文解義は旧説を注疏の文とするが採らない。）

（2）「用其力」　伝六章は、力の用いどころなので、この章の注には「用」字が頻出する。

（3）「明辨」　『中庸』二十章「誠之者擇善而固執之者也。博學之、審問之、慎思之、明辨之、篤行之。」

（4）「而今」　いま

121条

讀誠意一章、炎謂、過此一關、終是省事。曰。前面事更多。自齊家以下至治國、則其事已多。自治國至平天下、則其事愈多。只是源頭要從這裏做去。又曰。看下章、須通上章看、可見。　炎

〔校勘〕

○朝鮮古写本は巻一六にこの条不載。

○「過此一關」　萬暦本、和刻本は「關」を「関」に作る。

○「以下治国」「國」を萬暦本、和刻本は「国」に作る。後ろの「自治國至乎天下」の「國」は両本とも「國」に作る。

○「裏」　萬暦本、和刻本は「裡」に作る。

〔訳〕

誠意の章を読んだときに、わたくし炎が申し上げた。「この関門を通れば、あとは結局のところやるべきことは少ないでしょうか。」先生がおっしゃった。「前半であっても多いぞ。斉家から治国までは、事柄はもちろん多いし、治国から平天下までは、事柄はますます多い。ただ根本のところはここ（＝誠意）からやっていくのだ。」またおっしゃった。「次の章を読むときには、前の章と関連させて読んではじめてわかるものだ。」　劉炎録

〔注〕

（1）「省事」　従事する事柄を減らす、仕事が減る。『淮南子』「詮言訓」「為治之本、務在於安民。安民之本、在於足用。足用之本、在於勿奪時。勿奪時之本、在於省事。省事之本、在於節欲。」なお、本巻八五条を参照。朱子はこの「ここに至るとやるべきことは少ない」こと自体は認めている。

（2）「前面」　前半。ここでは「正心、修身」を指す。『語類』巻一四、一五条、黄士毅録（Ⅰ251）「大學重處都在前面。後面工夫漸漸輕了、只是揩磨在。」同所注を参照。

（3）「從這裏做去」　この「這裏」が指すものは、一一八条の分かれ道を説く所で「從這裏去、便是君子」と言っている部分がそれに

当たるものと思われる。

（4）「看下章云々」　伝六章の「右傳六章、釋誠意」に「故此章之指、必承上章而通考之、然後有以見其用力之始終、其序不可亂而功不可闕如此云。」とあるのを参照。

傳七章釋正心修身

122条

或問。正心章説忿懥等語、恐通不得誠意章。曰。這道理是一落索。才説這一章、便通上章與下章。如説正心誠意、便須通格物致知説。

〔校勘〕

○朝鮮古写本巻一六は本条を収録しない。

○「才説這一章」　成化本は「才」を「纔」に作る。

〔訳〕

ある者がお尋ねした。「正心章に説く忿懥（ふんち）等の語は、誠意章とのつながりが悪いように思うのですが。」先生「ここのところの道理は、一連のものだ。わずかにこの一章に説き及べば、上章にも下章にもつながることになるのだ。正心誠意について説くには格物致知と関連づけて説かねばならない、というのと同じことだ。　記録者名欠

〔注〕

（1）「正心章説忿懥等語」　『大学章句』伝七章「所謂脩身在正其心者、身有所忿懥、則不得其正。有所恐懼、則不得其正。有所好樂、則不得其正。有所憂患、則不得其正。」朱注「程子曰。身有之身、當作心。忿、弗粉反。懥、敕値反。好樂、並去聲。忿懥、怒也。」

（2）「這道理是一落索」「一落索」は、ひと連なりのもの、一連の事柄。『宋元語言詞典』「一絡索　見一落索」「一落索　一連串」『禅語辞典』「一落索　一絡索に同じ」「一絡索　ひとくさりの談義。一落索とも書く。」「一絡（つな）がりの索（ひも）」が原義。『字海便覧』に「一落索トハ一ツニオチコムコトナリ」とあるのは誤釈。『語類』巻二三、九八条、胡泳録（Ⅱ556）「問耳順。曰。…又問。聞無道理之言、亦順否。曰。如何得都有道理。無道理底、也見他是那裏背馳、那裏欠闕。那一邊道理是如何、一見便一落索都見了。」『語類』巻一〇四、三八条、輔廣録（Ⅶ2619）「或説。象山説、克己復禮、不但只是欲克去那欲忿懥之私、只是有一念要做聖賢、便不可。曰。…聖門何嘗有這般説話。人要去學聖賢、此是好底念慮、有何不可。…只如孔子答顔子、克己復禮爲仁。據他説時、只這一句已多了、又況有下頭一落索。」

（3）「才説這一章、便通上章與下章」「才」は、わずかに。前条にも「又曰。看下章、須通上章看、可見。」との発言がある。伝七章と伝六章（上章）、伝八章（下章）との関連については、『大学章句』伝七章の末尾朱注にも言及が有る。「右傳之七章。釋正心脩身。此亦承上章以起下章。蓋意誠則真無惡而實有善矣、所以能存是心

以檢其身。然或但知誠意、而不能密察此心之存否、則又無以直内而脩身也。」

（4）「如説正心誠意、便須通格物致知説」　伝六章と伝五章の関連については『大学章句』伝六章、末尾朱注に以下の言及が有る。「右傳之六章。釋誠意。經曰。欲誠其意、先致其知。又曰。知至而后意誠。蓋心體之明有所未盡、則其所發必有不能實用其力、而苟焉以自欺者。然或已明而不謹乎此、則其所明又非己有、而無以爲進德之基。故此章之指、必承上章而通考之、然後有以見其用力之始終、其序不可亂而功不可闕如此云。」

123条

大學於格物誠意章、都是鍊成了、到得正心修身處、都易了。　夔孫

〔校勘〕

○諸本異同なし。

〔参考〕

巻一五、一二二条、林夔孫録は本条とほぼ同内容である。「大學於格物誠意、都煅煉成了、到得正心修身處、只是行將去、都易了。」

〔訳〕

『大学』は、「格物」と「誠意」の章のところて、鍊成は完了しているから、「正心」「修身」の段に至れば、（その実践は）すっかり容易になる。　林夔孫録

〔注〕

（1）「於格物誠意章、都是鍊成了」『大学』の八条目中、格物致知と誠意とが二大関門であるから、そこさえ突破すれば実践過程中の根幹部分は既に完了したことになる。『語類』巻一五、八六条「致知誠意、是學者兩箇關。」同、八七条「知至意誠、是凡聖界分關隘。」後出の一二七条にも「要緊最是誠意時節、…若打得這關過、已是煞好了。」とある。

（2）「鍊成」「鍊成（煉成）」は、金属を精錬すること。『語類』中における「鍊成（煉成）」の用例は本条以外では参考に引いた巻一五と、以下に引く巻一一八とがあるが、前者は「煅煉して成し了る」、後者は「打煉して器を成す」と訓むべきであろう。巻一一八、四六条、訓王力行（Ⅶ 2848）「力行連日荷教。府判張丈退謂力行曰。士佺到此餘五十日、備見先生接待學者多矣、不過誘之掖之、未見如待吾友著氣用力、痛下鉗鎚如此。以九分欲打煉成器。不得不知此意。」（文中の張丈は、張士佺、字子真）

（3）「到得正心修身處、都易了」『大学』の工夫は後半（＝正心修身以降）は容易になる、という趣旨に関しては、以下を参照。『語類』巻一五、八五条「格物是夢覺關。誠意是善惡關。過得此二關、上面工夫却一節易如一節了。」同、一一四条「自修身以往、只是如

破竹然、逐節自分明去。今人見得似難、其實却易。」同、一一五条、林夔孫録「意誠則心正。誠意最是一段中緊要工夫。下面一節輕一節。」

124条

問。先生近改正心一章、方包括得盡。舊來説作意或未誠、則有是四者之累、却只説從誠意去。

曰。這事連而却斷、斷而復連。意有善惡之殊。意或不誠、則可以爲惡。心有得失之異。心有不正、則爲物所動、却未必爲惡。然未有不能格物致知而能誠意者、亦未有不能誠意而能正心者。　人傑

〔校勘〕

○「連而却斷、斷而復連」　萬曆本、朝鮮古写本、和刻本は「斷」を「断」に作る。

○「意有善惡之殊」　萬曆本、和刻本は「惡」を「悪」に作る（以下同じ）。

〔訳〕

質問。「先生が最近、「正心」章を改訂されたことで、やっと（説明が）すっかり包括的なものとなりました。従来の説き方は「意がまだ誠になっていなければ、この四者の累（わずらい）が有る。」とするものであって、これではただ誠意について説くだけものに過ぎませんでした。

先生「ここのところは連続しながらも断絶しており、断絶しながらもまた連続しているのだ。意には善と悪との相違がある。意が誠にならなければ、それは悪と見なしてよい。心には得と失との違いがある。心が正されなければ、外物によって動揺させられることになるが、それはまだ必ずしも悪とは見なさない。（このように誠意と正心とはそれぞれ別個の工夫ではあるが）しかしながら、格物致知ができていないのにしかも誠意ができる者などは存在しないし、また誠意ができていないのにしかも正心ができる者などもやはり存在しないのだ。　萬人傑録

〔注〕

（1）「先生近改正心一章」云々　ここに言う改訂が、現行『大学章句』伝七章への改訂を指すのか、さらにその前段階における改訂を指すのかは、未詳。以下、ひとまず現行本への改訂を前提に解釈する。ここに言及される旧注は「意或未誠、則有是四者之累」という内容であり、誠意が実現しなければ正心も実現しない、という趣旨となる。現行の伝七章は「所謂脩身在正其心者、身有所忿懥、則不得其正。有所恐懼、則不得其正。有所好樂、則不得其正。有所憂患、則不得其正。」という伝文に対して「程子曰。身有之身當作心。…蓋是四者、皆心之用、而人所不能無者。然一有之而不能察、則欲動情勝、而其用之所行、或不能不失其正矣。」との朱注が付されており、正心の実践の必要性そのものが明示されている。質問者はその点を旧注と対比して、「より包括的になった」と評価したものと思われる。

（2）「只説從誠意去」　ただ誠意について説くだけに過ぎない。旧説は正心の前提としての誠意について説くのみで、正心自体に関する説明が欠如している、との意。「説從～去」は、～について説く。ここでの「從」は、動作の起点ではなく、動作の向かう方向を示す（一二六条参照）。巻一八、一二〇条、沈僩録（Ⅱ421）「這箇道理、自孔孟既沒、便無人理會得。只有韓文公曾説來、又只説到正心誠意、而遺了格物致知。及至程子、始推廣其説、工夫精密、無復遺憾。然程子既沒、諸門人説得便差、都説從別處去、與致知格物都不相干、只不曾精曉得程子之説耳。」巻五九、一一〇条、余大雅録（Ⅳ1405）「孟子恐人不識仁義、故以此喩之。然極論要歸、只是心爾。若於此心常得其正、則仁在其中。故自捨正路而不由、放其心而不知求以下、一向説從心上去。」巻六六、八条、輔廣録（Ⅳ1622）「八卦之畫、本爲占筮。方伏羲畫卦時、止有奇偶之畫、何嘗有許多説話。文王重卦作繇辭、周公作爻辭、亦只是爲占筮設。到孔子、方始從義理去。」巻九五、四一条、黄義剛録（Ⅵ2429）「或問生之謂性一段。曰。此段引譬喩、亦叢雜。如説水流而就下了、又説從清濁處去、與就下不相續。這處只要認得大意、可也。」

（3）「這事連而却斷、斷而復連」　次条にも類似の表現が見える。「誠意」と「正心」の関係を、連続的でありながら（「連」）、互いに区別がありそれぞれが独立した別個の工夫である（「断」）ことを述べる。『大学章句』伝七章の末尾朱注に「右傳之七章。釋正心脩身。此亦承上章以起下章。①蓋意誠則真無悪而實有善矣、所以能存是心以檢其身。②然或但知誠意、而不能密察此心之存否、則又無以直内而脩身也。」とある。うち①は誠意が正心の前提を為すことを述べ、②は誠意とは別個に正心の工夫が必要であることを述べる。①は両者の「連」の側面、②は両者の「断」の側面に相当する。

（4）「意或不誠、則可以爲悪」　誠意を実践し得るか否かが善悪の岐路となる。『語類』巻一五、八五条、林夔孫録「誠意是善悪關。（原注）誠得來是善、誠不得只是悪。」同、八六条、萬人傑録「誠意乃悪與善之關。」

（5）「心有得失之異」　ここでの得失は、心の正を得るか失うかの意であるから、実質的には正不正と同義である。『大学章句』伝七章「所謂脩身在正其心者、身有所忿懥、則不得其正。有所恐懼、則不得其正。有所好樂、則不得其正。有所憂患、則不得其正。」朱注「程子曰。身有之身當作心。…蓋是四者、皆心之用、而人所不能無者。然一有之而不能察、則欲動情勝、而其用之所行、或不能不失其正矣。」

（6）「心有不正、則爲物所動、却未必爲悪」『大学章句』伝七章朱注には「蓋是四者、皆心之用、而人所不能無者。」（前注既引）とあり、後出の一二八条にも「誠意是無悪。憂患・忿懥之類、却不是悪。」とある。「忿懥」「恐懼」「好樂」「憂患」は心の自然なはたらきとして不可避なものであり、それ自体は悪ではないが、ただそのありかたに偏り（「偏重」「偏倚」）が有ると心に累を及ぼし、それが心の不正となる。「正心」とは、その偏りを是正する営みである。『河南程氏遺書』巻一九、五条「問。有所忿懥・恐懼・憂患、心不

得其正。是要無此數者、心乃正乎。曰。非是謂無、只是不以此動（原注「一本作累」）其心。學者未到不動處、須是執持其志。」『語類』巻一八、一三一条、輔廣録（Ⅱ424）「唯是意已誠實、然後方可見得忿懥・恐懼・好樂・憂患有偏重處、即便隨而正之也。」「偏倚」は次条に見える。

（7）「未有不能格物致知而能誠意者」「未有不能A而能B者也」は、AができもしないのにしかもBができる人などいたためしがない。AがBにとっての不可欠の前提条件であることを示す。『史記』巻一一二「平津侯列伝（公孫弘）」「知所以自治、然後知所以治人。天下未有不能自治而能治人者也。此百世不易之道也。」ここでは格致の実践が誠意の前提条件であることを言う。『語類』巻一五、一〇一条「知至而后意誠。須是真知了、方能誠意。知苟未至、雖欲誠意、固不得其門而入矣。」

（8）「未有不能誠意而能正心者」　次条の「意未誠、則全體是私意、更理會甚正心。」も同趣旨。

125条

或問正心誠意章。先生令他説。曰。意誠則心正。曰。不然。這幾句、連了又斷、斷了又連。雖若不相粘綴、中間又自相貫。譬如一竿竹、雖只是一竿、然其間又自有許多節。

意未誠、則全體是私意、更理會甚正心。然意雖誠了、又不可不正其心。意之誠不誠、直是有公私之辨、君子小人之分。意若不誠、則雖外面爲善、其意實不然、如何更問他心之正不正。意既誠了、而其心或有所偏倚、則不得其正、故方可做那正心底工夫。　廣

〔校勘〕

○「連了又斷、斷了又連」「斷斷」を萬曆本、和刻本は「断〻」に、朝鮮古写本は「断断」に作る。

○「又自有許多節」　萬曆本、和刻本は「節」を「莇」に作る。

○「全體是私意」　萬曆本、和刻本は「體」を「体」に作る。

○「則雖外面爲善」「面」を成化本、朝鮮古写本は「回」に作る。

〔訳〕

ある者が「正心」「誠意」章についてお尋ねした。先生は彼に説明させた。「意が誠になれば、心は正しくなります。」先生「そうではない。ここの何句かは、連続したかと思えばまた断絶し、断絶したかと思えばまた連続する。連結していないようでありながらも、それぞれの間はやはり自ずと貫通しているのだ。たとえば一本の竹のようなものであって、一本には違いないのだが、そこにはやはり自ずと多くの節が有るのだ。

意がまだ誠でなければ、それは全くの私意なのであって、そんな状態のままで一体どんな正心に取り組めというか。しかしながらたとえ意が誠になっても、やはりその心は正さなければならないのだ。意の誠と不誠とは、とりもなおさず公と私の岐路、君子と小人の分かれ目である。意が不誠であれば、たとえ表面的には善を為していても、そ

の意は実のところ善ではないのであるから、彼の心が正されているか否かなど、どうして問題にするに値しようか。意が既に誠になったとしても、その心に少しでも偏倚（かたより）が有れば、正しさを得ることはできないわけで、それ故にこそまさにかの正心の工夫を実践することができるのだ。　輔廣録

〔注〕

（1）「意誠則心正」『大学章句』経の「意誠而后心正」に類似する表現であるが、経文は「意誠」が「心正」の前提条件・必要条件であることを示すに止まるのに対して、「意誠則心正」は「意誠」が「心正」の十分条件であるかの如き語気を含む。朱熹がこの語を否定したのはその為であろう。ただし、「誠意」の重要性や困難さを強調する文脈では、実は朱熹自身、この表現を用いてもいた。『語類』巻一五、一一五条「意誠則心正。誠意最是一段中緊要工夫、下面一節輕一節。」同、一一七条「意誠則心正、自此去、一節易似一節。」

（2）「這幾句、連了又斷、斷了又連」　前条にも「這事連而却斷、斷而復連。」とある。「A了又B、B了又A」は、AしてはBし、BしてはAする。A→B→A→Bが繰り返されることを述べる（ABは動詞の場合も名詞の場合もある）。ここでは『大学章句』伝五章、六章、七章、八章等（「這幾句」）が「連」（各章間の連続性）→「断」（各章ごとの独立性）→「連」→「断」の関係にあることを指すものと解釈しておく。『語類』巻一〇、六五条、沈僩録（Ⅰ170）「夫子說、學而不思則罔、思而不學則殆。學便是讀。讀了又思、思了又讀。」巻二四、一四〇条、徐寓録（Ⅱ597）「綱常千萬年磨滅不得。只是盛衰消長之勢、自不可已。盛了又衰、衰了又盛、其勢如此。」巻六二、一三三条、陳淳録（Ⅳ1513）「元了又貞、貞了又元、萬古只如此、循環無窮。」巻七一、五二条、徐寓録（Ⅴ1792）「春了又冬、冬了又春。」

（3）「雖若不相粘綴」「粘綴」は、くっつく、連結する、連接する、連続する。

（4）「中間又自相貫」「中間」は、（それぞれの）間、その間。『語類』巻九五、一一一条、葉賀孫録（Ⅵ2443）「伊川文字、段數分明。明道多只恁成片說將去、初看似無統、子細理會、中間自有路脈貫串將去。」

（5）「譬如一竿竹」「竿」は、量詞。八条目を竹とその節に喩えるものとして以下がある。巻一五、一一四条「自修身以往、只是如破竹然、逐節自分明去。」同、一四六条「物格而后知至、知至而后意誠、意誠而后心正、心正而后身修、身修而后家齊、家齊而后國治、國治而后天下平。只是就這規模恁地廣開去、如破竹相似、逐節恁地去。」

（6）「意未誠、則全體是私意」「全體」は、全て、丸ごと、すっかり。『語類』巻一二〇、五五条、童伯羽録（Ⅶ2900）「吳棨直翁問。學亦頗知自立、而病痛猶多、柰何。曰。未論病痛。人必全體是、而後可以言病痛。譬如純是白物事了、而中有黑點、始可言病痛。公今全體都未是、何病痛之可言。」

（7）「更理會甚正心」「理會」は、取り組む。「甚」は、何、どんな。『語類』巻一八、一三二条、黄士毅録（Ⅱ424）「問意既誠矣一段。曰。不誠是虚偽無實之人、更理會甚正。」

（8）「直是有公私之辨」「直是」は、取りもなおさず。

（9）「君子小人之分」『荀子』「不苟」「君子能則人榮學焉、不能則人樂告之。小人能則人賤學焉、不能則人羞告之。是君子小人之分也」意の誠不誠が君子小人の分かれ目であるという考え方については以下を参照。『語類』巻一五、八八条「某嘗謂、誠意一節、正是聖凡分別關隘去處。若能誠意、則是透得此關。透此關後、滔滔然自在去爲君子。不然、則崎嶇反側、不免爲小人之歸也。」

（10）「如何更問他心之正不正」 誠意を実現していなければその意は既にして不善であるから、その心の正不正などはじめから問題にするに値しない、との意。『語類』巻一八、一三一条、輔廣録（Ⅱ424）「或問。意既誠矣、而心猶有動焉、然後可以責其不正而復乎正。是如何。曰。若是意未誠時、只是一箇虚偽無實之人、更問甚心之正與不正。唯是意已誠實、然後方可見得忿懥・恐懼・好樂・憂患有偏重處、即便隨而正之也。」

（11）「其心或有所偏倚」 心の働きにおける偏り。前注所引の「忿懥・恐懼・好樂・憂患有偏重處」を参照。「偏倚」は、偏向して中正を失ったあり方。『中庸章句』題下朱注「中者、不偏不倚、無過不及之名。庸、平常也。」

亞夫問致知誠意。

曰。心是大底、意是小的。心要恁地做、却被意從後面牽將去。且如心愛做箇好事、又被一箇意道不須恁地做也得。且如心要孝、又有不孝底意思牽了。

所謂誠意者、譬如飢時便喫飯、飽時便休、自是實要如此。到飽後、又被人請去、也且胡亂與他喫些子、便是不誠。須是誠、則自然表裏如一。非是爲人而做、求以自快乎己耳。如飢之必食、渴之必飲、無一毫不實之意。

這箇知至意誠、是萬善之根。有大底地盤、方立得脚住。若無這箇、都靠不得。心無好樂、又有箇不無好樂底在後。心無忿懥、又有箇不無忿懥底在後。知至後、自然無。　恪

〔校勘〕

○「意是小的」 朝鮮古写本は「的」を「底」に作る。

○「却被意從後面牽將去」「面」を成化本、朝鮮古写本は「面」に作る。

○「且如心愛做箇好事」 本条に全部で六出する「箇」を、朝鮮古写本は全て「个」に作る。萬曆本と和刻本は、「又有箇不無好樂底在後」の箇所のみ「箇」に作り、他の五箇所は全て「个」に作る。

○「無一毫不實之意」成化本は「毫」を「豪」に作る。

○「心無好樂」 萬曆本、和刻本は本条に二出する「樂」を全て「楽」に作る。

〔訳〕

亞夫が致知と誠意についてお尋ねした。

先生「心は大なるもの、意は小なるものだ。心がこのようにしようとしても、かえって意によって後ろ向き（＝逆方向）に引きずられていってしまう。たとえば、心は好んで何かよいことをしようとしているのに、またもや一箇の意か現れては「そんなふうにしなくても構わないぞ」と言われてしまう。たとえば、心は孝であろうとしているのに、またもや親不孝な意思（きもち）が生じて心を引きずってしまう。

所謂「誠意」とは、たとえば、お腹がすいたら飯を食い、満腹になったらやめる、というようなものであって、言うまでもなくそれは（当人自身が）本当にそうしたいからなのだ。満腹になった後で、他人に請われるままに、またもとりあえずその人の為に少しばかりをそそくさと食うとすれば、それは「誠」ではない。ぜひとも誠であるべきで、そうすれば表裏は自ずと一体となる。人の為に何かをするのではなく、ただ自分自身が快適でありたいが為に（そうするのに）他ならないのだ。お腹がすいたら必ず食い、のどが渇いたら必ず飲むようなもので、そこには毛筋ほどにも不実なる意は存在しないのだ。

この「知は至り、意は誠になる」ことこそは、万善の根本である。大いなる地盤が有ってこそ、脚をしっかりと踏みしめることもできるのだ。それ（＝地盤）がなければ、全く拠り所を失ってしまうのだ。心に好楽（このみ）がなくても、好楽がないわけにはいかないという意がその背後に存在する。心に忿懥（いかり）がなくても、忿懥がないわけにはいかないという意がその背後に存在する。知が至（り、意が誠にな）った後であれば、それらの意は自ずと無くなるのだ。　林恪録

〔注〕

（1）「亞夫問」　曑淵（かんえん）、字亞夫。『朱子語録姓氏』所収。

（2）「心是大底、意是小的」「意者、心之所發也」（『大学章句』経、朱注）と定義さるように、意は心に包摂される存在である。ここでの「大小」は、両者の包含関係を示している。『語類』巻一五、一一三条「心言其統體、意是就其中發處。…又曰。由小而大、意小心大。」『北溪字義』巻上「意」「以意比心、則心大意小。心以全體言。意只是就全體上發起一念慮處。」

（3）「却被意從後面牽將去」　かえって意によって後ろ向きに引きずられていく。「被」は、～に、～から（～される、～られる）。「～將去」は、～していく。「從～去」の「從」には、動作の起点を示す用法と動作の向かう方向を示す用法とがある（三浦國雄『「朱子語類」抄』三〇八頁、四〇七頁）。本文では仮に後者の用法として解釈しておいたが、後ろから引っぱると解釈しても、結果的には同じ事態を意味することになるだろう。後ろ向き（＝逆方向）に引きずるとは要するに、妨げる、足を引っ張るの意。意が心を良からぬ方向に引きずるという事例については、以下を参照。『語類』巻一五、一一六条「或問。意者心之所發、如何先誠其意。曰。小底却會牽動了大底。心之所以不正、只是私意牽去。」巻一六、六六条「問。誠意是如何。曰。心只是有一帶路、更不著得兩箇物事。如今人要做好事、都自無力。其所以無力是如何。只

爲他有箇爲惡底意思在裏面牽繫。」

(4)「且如心愛做箇好事」「且如」は、たとえば。「愛」は、～することを好む。好んで～する。「好事」は、いいこと、良いこと。

(5)「飽時便休」「休」は、やめる、停止する、おしまいにする。

(6)「也且胡亂與他喫些子」「也且」は、またとりあえず。「胡亂」は、いいかげんに、おざなりに、そそくさと。「與他」の「與」は現代中国語の「給」とおなじで、～のために。「些子」は、すこしばかり。

(7)「須是誠、則自然表裏如一」「如一」は、一様である、一体である。「表裏如一」は、自己の外面と内面とが一致していること。表裏一体は、「誠」「不自欺」「自慊」の比喩として多用される。本巻、七二条「須是表裏如一、便是不自欺。」八八条「自慊則一、自欺則二。自慊者、外面如此、中心也是如此、表裏一般。」一〇二条「誠意、只是表裏如一。若外面白、裏面黒、便非誠意。」

(8)「非是爲人而做、求以自快乎己耳」『大学章句』伝六章「所謂誠其意者、毋自欺也。如悪悪臭、如好好色、此之謂自謙。朱注「謙、快也、足也。…言欲自脩者知爲善以去其悪、則當實用其力、而禁止其自欺。使其悪悪則如悪悪臭、好善則如好好色、皆務決去、而求必得之、以自快足於己、不可徒苟且以殉外而爲人也。」

(9)「飢之必食、渇之必飲」『大戴礼記』「王言」「如飢而食、如渇而飲。」本巻、一〇六条「所謂誠其意者、表裏内外、徹底皆如此、無纎毫絲髪苟且爲人之弊。如飢之必欲食、渇之必欲飲、皆自以求飽足於己而已、非爲他人而食飲也。」

(10)「是萬善之根」「萬善之根」は、あらゆる善を生み出す根源。『朱文公文集』巻五〇「答潘恭叔」第八書「敬之一字、萬善根本。涵養省察、格物致知、種種工夫、皆從此出、方有據依。」

(11)「有大底地盤」「地盤」の比喩を用いた例を挙げておく。『語類』巻一四、一〇条「如人起屋相似、須先打箇地盤。地盤既成、則可舉而行之矣。」

(12)「方立得脚住」「方」は、それでこそ。「～住」は前の動作がしっかりと確実に遂行されることを示す。

(13)「都靠不得」「都」は、全く。「靠」は、寄りかかる、もたれる、依拠する。「～不得」は、～することができない。

(14)「知至後」「知至意誠」を「大底地盤」に喩えた上で、地盤の有る場合と無い場合とで「不無好樂底」「不無忿懥底」の有無が分かれる、と述べている。従ってここの「知至後」は、「知至意誠後」を端折った表現と見なすべきであろう。

127条

敬之問誠意正心。誠意是去除得裏面許多私意、正心是去除得外面許多私意。誠意是檢察於隱微之際、正心是體驗於事物之間。

曰。到得正心時節、已是煞好了。只是就好裏面、又有許多偏。要緊最是誠意時節、正是分別善悪、最要著力。所以重複説道必慎其獨。若打得這關過、已是煞好了。到正心、又怕於好上要偏去。如水相似、那時節已是淘去了濁、十分清了、又怕於清裏面有波浪動蕩處。　賀孫

〔校勘〕

○「去除得裏面許多私意」　萬曆本、和刻本は「裏」を「裡」に作る。以下同じ。「面」を成化本、朝鮮古写本は「面」に作る（以下同じ）。

○「最要著力」　成化本、萬曆本、朝鮮古写本、和刻本は「著」を「着」に作る。

○「必慎其獨」　諸本は呂留良本、伝経堂本を含めて全て「慎」を「謹」に作る。

○「若打得這關過」　萬曆本、朝鮮古写本、和刻本は「關」を「関」に作る。

○「賀孫」朝鮮古写本には記録者名なし。

〔訳〕

敬之が誠意正心についてお尋ねした。「誠意とは、自己の内面の多くの私意を除き去ること、正心とは自己の外面の多くの私意を除き去ることです。誠意とは隠微の際（＝自己の内面において意がかすかに萌す時）にそれを点検精察すること、正心とは心が事物と関わる場でそれを体察することですね。」

先生「心を正す段階に至れば、（誠意を経ているので）既に（その心は）非常によいものとなっている。ただしそのよくなった内面（心）にも、また多くの偏りが有るのだ。一番肝心なのは誠意の段階であって、ここでこそ善悪を弁別するのであり、最も努力を要するのだ。だからこそ（『大学』の伝文も）繰り返し「必ずその独りを慎しむ」と述べているのだ。この関門さえ打破してしまえば、既に（その心は）非常によいものとなっている。しかし心を正す段になると、さらにそのよきところにおいて偏りが生ずることを危惧するのだ。ちょうど水のようなもので、その時（＝正心に取り組む段階）には既にして濁りは淘汰されているから、十分に澄んでいるのだが、その上で更に、その澄んでいる内面（心）にも波浪が揺れ動く部分のあることを危惧するのである。　葉賀孫録

〔注〕

（1）「敬之問誠意正心」「敬之」は朱在、字は敬之、朱熹の三男。巻一五、一二四条にも葉賀孫録の「敬之問誠意正心修身」で始まる問答を収録するが、内容は本条とは別個のものである。

（2）「裏面許多私意」「外面許多私意」　後文の「隠微之際」「事物之間」という表現とあわせて考えれば、朱在は、誠意は独処（「隠微」）における自己の内面（「裏面」）を対象とする工夫、正心は他者（「事物」）との関わりの場（「外面」）における工夫、と考えていたことになる。因みに『大学章句』伝七章にいう「忿懥・恐懼・好樂・憂患」は、朱熹も事物との関わりの場（「應物」）において発現するものとしている。『大学或問』「或問。人之有心、本以應物。而此章之傳、以爲有所喜怒憂懼、便爲不得其正。然則其爲心也、必如槁木之不復生、死灰之不復然、乃爲得其正耶。曰。…唯其事物之來、有所不察、應之既或不能無失、且又不能不與俱往、則其喜怒憂懼、必有動乎中者、而此心之用、始有不得其正者耳。傳者之意、

固非以心之應物便爲不得其正、而必如槁木死灰、然後乃爲得其正也。」

(3)「隱微之際」　ひそかでかすかな時。自己の内面において人知れず意が萌す時。慎独の独。『中庸章句』第一章「莫見乎隱、莫顯乎微、故君子慎其獨也。」

(4)「到得正心時節」「時節」は、時、折、段階。

(5)「已是煞好了」「煞」は、甚だ、非常に、とても。

(6)「只是就好裏面」「只是」は逆接の接続詞。ただし、だが。

(7)「又有許多偏」　本巻一二五条にも「意既誠了、而其心或有所偏倚、則不得其正、故方可做那正心底工夫。」とある。

(8)「要緊最是誠意時節」「要緊」は、肝要な事柄、重要な点、急所、ポイント。

(9)「最要著力」「著力」は、力を入れる、力を込める、尽力する、努力する。

(10)「重複説道必慎其獨」『大学章句』伝六章において「故君子必慎其獨也」の語が二度繰り返されていることを指す。

(11)「若打得這關過」　もしこの関門を打破できれば。「打得這關過」は「打得過這關」に同じ。「打得過」は、打破する、克服する。否定形は「打不過」『語類』巻六一、五条、余大雅録（Ⅳ 2458）「曰。如此、則能讓千乘之國、只是好名、至簞食豆羹見於色、却是實情也。曰。然。…好名之人、大處打得過、小處漏綻也。」（『孟子』「尽心」下「孟子曰。好名之人、能讓千乘之國、苟非其人、簞食豆羹、見於色。」）同、巻二四、九二条、周明作録（Ⅱ 587）「只如墨者夷之、厚葬自打不過、緣無道理、自是行不得。」（墨者夷之云々は、墨家の夷之が薄葬を主張しながら自分の親だけは厚葬したことを指す。『孟子』「滕文公」上）

(12)「如水相似」　水のようなものである。「如～相似」は、～のようである。

128条

問。意既誠、而有憂患之類、何也。曰。誠意是無惡。憂患・忿懥之類、却不是惡。但有之、則是有所動。　節

〔校勘〕

○「意既誠」　朝鮮古写本は「既誠意矣」に作る。

○「憂患忿懥之類」　朝鮮古写本は「有憂患　忿懥之類」に作る（「患」と「忿」の間に一字分の空格有り）。

○「但有之」　朝鮮古写本は「但」を「但是」に作る。

○「誠意是無惡」　萬暦本、和刻本は「惡」を「悪」に作る。

○「却不是惡」　萬暦本、和刻本は「惡」を「悪」に作る。

○「節」　萬暦本、和刻本は「莿」に作る。

〔訳〕

質問「意が既に誠になっているのに、なお（心に）憂患（うれい）の類が存在するのは、どうしたわけでしょう。」先生「意を誠にすれば、（もはや）

悪はない。だから憂患や忿懥の類は、悪ではないのだ。ただしそれらが存在する限り、（心はそれらによって）動揺させられることがあるのだ。　甘節録

〔注〕

（1）「憂患・忿懥之類、却不是悪」云々　一二四条にも「心有不正、則爲物所動、却未必爲悪。」とある。

（2）「但有之、則是有所動」　本巻一二四条「心有不正、則爲物所動」一三五条「四者人所不能無也。但不可為所動。」

129条

意既誠矣、後面忿懥・恐懼・好樂・憂患、親愛・賤悪、只是安頓不著在。便是苟志於仁矣、無悪也。　泳

〔校勘〕

○「後面忿懥」「面」を成化本、朝鮮古写本は「亊」に作る。

○「好樂」　萬暦本、和刻本は「樂」を「楽」に作る。

○「賤悪」萬暦本、和刻本は「悪」を「悶」に作る。

○「無悪也」萬暦本、和刻本は「悪」を「悶」に作る。

〔訳〕

意が既に誠になっていれば、その後における忿懥・恐懼・好樂・憂患、親愛・賤悪は、（それ自体は悪しきものではなく）ただ所を得ていないというだけのことだ。つまりは「本当に仁を志せば、悪を行うことはない。」である。　湯泳録

〔注〕

（1）「忿懥・恐懼・好樂・憂患」『大学章句』伝七章に見える語。一二二条の注を参照。

（2）「親愛・賤悪」『大学章句』伝八章「所謂齊其家在脩其身者、人之其所親愛而辟焉、之其所賤悪而辟焉、之其所畏敬而辟焉、之其所哀矜而辟焉、之其所敖惰而辟焉。故好而知其悪、悪而知其美者、天下鮮矣。」朱注「辟、讀爲僻。悪而之悪、敖、好、並去聲。鮮、上聲。人、謂衆人。之、猶於也。辟、猶偏也。五者、在人本有當然之則。然常人之情、惟其所向而不加審焉、則必陥於一偏而身不脩矣。」

（3）「只是安頓不著在」「安頓」は、置く、おちつく。「～不著」は動詞の後に用いて、ちゃんと～できない、十分～できない、の意を表す。「在」は断定の語気を示す句末の助詞。「安頓不著」は、ちゃんと置かれていない、据わりが悪い、所を得ない、の意。あるべき在り方からずれていること。一二五条「意既誠了、而其心或有所偏倚、則不得其正」における「偏倚」、一二七条「到得正心時節、已是煞好了。只是就好裏面、又有許多偏」における「偏」に相当する。以下の用例にも示されている通り、惻隠や羞悪のよ

うに、それ自体は善であっても、その発現が時と所を得なければ、それらは瞬時に悪に翻転する。『語類』巻一三、五六条、楊道夫録（Ⅰ230）「凡事、莫非心之所爲。雖放僻邪侈、亦是此心。善悪但如反覆手。翻一轉、便是悪。只安頓不著、亦便是不善。」巻九四、一四六条、萬人傑録（Ⅵ2395）「凡事微有過差、才有安頓不著處、便是悪。」巻九五、八九条、童伯羽録（Ⅵ2438）「蓋凡事、莫非心之所爲。雖放僻邪侈、亦是心之爲也。善悪但如反覆手耳。翻一轉、便是悪。止安頓不著、也便是不善。如當惻隱而羞悪、當羞悪而惻隱、便不是。」なお『朱子語類考文解義』は「安頓不著在　猶言着不得。謂意既誠、則此四者不足以爲累於心也。在語辭。」とし、「安頓不著」を「くっつかない」の意に解するが、誤釈であろう。

（4）「苟志於仁矣」『論語』「里仁」「子曰。苟志於仁矣、無悪也。」朱注「苟、誠也。志者心之所之也。其心誠在於仁、則必無爲悪之事矣。」

130条

問。心體本正、發而爲意之私、然後有不正。今欲正心、且須誠意否。未能誠意、且須操存否。

曰。豈容有意未誠之先、且放他喜怒憂懼不得其正、不要管它、直要意誠後心却自正。如此則意終不誠矣。所以伊川説、未能誠意、且用執持。　大雅

〔校勘〕

○「須誠意否未能誠意」　朝鮮古写本は「未」の前に「是」字有り。

○「不要管它」　成化本、朝鮮古写本、朝鮮整版本は「它」を「他」に作る。

〔訳〕

質問「心の本体は元来、正しいものであり、それが発現して私意となると、そこではじめて不正が生じます。今、心を正そうとするならば、さしあたり意を誠にすべきなのではありませんか。まだ意を誠にすることができていなければ、さしあたり操存すべきなのではありませんか。」

先生「まさか、意が誠になる前には、心の喜怒憂懼が正されていなくてもとりあえずは放っておいて構おうとはせず、意が誠になった後で心の方が自ずと正されるのを、ずっと期待し続けるなんて、そんなことがあり得ようか。そんなことでは、意も結局は誠にはならないのだ。だから伊川も「意を誠にすることができなければ、とりあえず（心を）しっかりと把捉せよ。」と言ったのだ。　余大雅録

〔注〕

（1）「心體本正」『大学或問』「人之一心、湛然虚明。如鑑之空、如衡之平、以爲一身之主者、固其眞體之本然、而喜怒憂懼、隨感而應、妍蚩俯仰、因物賦形者、亦其用之所不能無者也。故其未感之時、

至虛至靜、所謂鑑空衡平之體、雖鬼神有不得窺其際者、固無得失之可議。」

（2）「且須操存否」「操存」は、心をしっかりと把捉し保持すること。『孟子』「告子」上「孔子曰。操則存、舍則亡。出入無時、莫知其鄉。惟心之謂與。」朱注「程子曰。…操之之道、敬以直内而已。」

（3）「豈容有意未誠之先」云々　「容」は「可（べし）」と同じく、可能を表す助字。～できる。以下この一文は、『大学』八条目の階梯が「誠意」→「正心」の先後関係にあるからといって、「誠意」以前は心の不正を放置しても構わない、とする発想の誤りを指摘する。「格致」→「誠意」に関する同様の発言を挙げておく。巻一五、九五条「説爲學次第、曰。本末精粗、雖有先後、然一齊用做去。且如致知格物而後誠意、不成説自家物未格、知未至、且未要誠意、須待格了知了、却去誠意。安有此理。聖人亦只説大綱自然底次序是如此。」同、一〇三条「問知至而后意誠。曰。…然又不是今日知至、意亂發不妨、待明日方誠。如言孔子七十而從心、不成未七十、心皆不可從。只是説次第如此。」

（4）「且放他喜怒憂懼不得其正」「放」は、放っておく。「他」は、それ。ここでは心を指す。「喜怒憂懼」は『大学章句』伝七章にいう「忿懥・恐懼・好樂・憂患」に対応する。『大学或問』「或問。人之有心、本以應物。而此章之傳、以爲有所喜怒憂懼、便爲不得其正。」云々。

（5）「不要管它」「管」は、かまう、監督する、取り締まる。「它」は、それ。ここでは喜怒憂懼。

（6）「直要意誠後心却自正」「直」は「一直」と同じく、動作の持続を示す。ずっと（～し続ける）。「却」は、主語に関して他と対比対照して述べる語気を示す。「～の方は」「～はと言えば」

（7）「所以伊川説」　ここに引用される語そのものの典拠は未詳。類似する程頤の語を挙げておく。『河南程氏遺書』巻一九、五条「問。有所忿懥・恐懼・憂患、心不得其正。是要無此數者、心乃正乎。曰。非是謂無、只是不以此動（原注「一本作累」）其心。學者未到不動處、須是執持其志。」

131条

誠意、是真實好善悪悪、無夾雜。

又曰。意不誠、是私意上錯了。心不正、是公道上錯了。

又曰。好樂之類、是合有底、只是不可留滯而不消化。無留滯、則此心便虛。　節

〔校勘〕

○「好善悪悪」　萬曆本、和刻本は「悪悪」を「恶恶」に作る。

○「無夾雜」　萬曆本、和刻本は「夾」を「夹」に作る。

○「好樂之類」　萬曆本、和刻本は「樂」を「楽」に作る。

○「無留滯」　朝鮮古写本はこの下に「好樂之類」の四字有り。

○「節」　萬曆本、和刻本は「節」を「莇」に作る。朝鮮古写本はこの下に「○池本注云此一段爲大學釋誠意二章發」の校語有り。因みに甘節録は池録二五所収である（『朱子語録姓氏』）

〔訳〕

「意を誠にするとは、真に善を好んで悪を悪み、そこに夾雑物がないようにすることだ。」

また言われた。「意が誠でないのは、私意における過ちである。心が正しくないのは、公道における過ちである。」

また言われた。「（『大学章句』伝七章にいう）好楽の類は、有って然るべきものなのだが、ただし（心に）固着して消え去らない、ということであってはならない。固着さえしなければ、この心は虚なのである。」 甘節録

〔注〕

（1）「真實好善悪悪」「真實」は、真に、本当に。「好善悪悪」は、善を好み悪を悪む。『大学章句』伝六章「如悪悪臭、如好好色、」朱注「使其悪悪則如悪悪臭、好善則如好好色。」

（2）「無夾雑」「夾雑」は、「夾雑物」、または動詞として「混入する」の意。純粋に善を好み悪を悪むことができず、なにがしか不純な気持ちが混じること。本巻、六六条「問。誠意是如何。曰。…如今人要做好事、…要去做好事底心是實。要做不好事底心是虚。被那虚底在裏面夾雑、便將實底一齊打壊了。」

（3）「意不誠、是私意上錯了。心不正、是公道上錯了」「公道」は、公共の道路。転じて公明正大な在り方。『韓非子』内儲説上「七術」説二「殷之法、棄灰于公道者、斷其手。」『朱文公文集』巻一九「同監司薦潘燾韓邈蔡咸方銓狀」「臣等竊見、比年以來、臣僚申嚴薦舉之法、以革獨員之弊。蓋所以示公道而杜私情也。」以下に示す通り、朱熹は「意不誠」と「心不正」を、それぞれ「私過」と「公過」、「私罪」と「公罪」に喩えている。一二五条に「意之誠不誠、直是有公私之辨、君子小人之分。」とある通り、誠意の成否が公私の分かれ目であるから、誠意以前は私、正心に取り組む段階は既に誠意を経ているから公、という理屈になる。『語類』巻一五、九一条「又曰。意不誠底、是私過。心不正底、是公過。」巻一八、一三〇条、襲蓋卿録（Ⅱ424）「且意未誠時、譬猶人之犯私罪也。意既誠而心猶動、譬猶人之犯公罪也。亦甚有間矣。」

（4）「好樂之類、是合有底」「合」は「当」と同じで、「まさに～（す）べし」「合有底」は、有って然るべきもの、無いわけにはいかないもの。『大学章句』伝七章、朱注「蓋是四者、皆心之用、而人所不能無者。」巻一五、一二六条「所謂好悪哀矜、與修身齊家中所説者、皆是合有底事。但當時時省察其固滞偏勝之私耳。」

（5）「不可留滞」「留滞」は、留まり滞る、固着する。「合有底」ではあっても、「留滞」すればとらわれや偏向をもたらすことになる。『語類』巻一二、一三六条、胡泳録（Ⅰ242）「因言。悔字難説。既不可常存在胸中以爲悔、又不可不悔。若只説不悔、則今番做錯且休、明番做錯又休、不成説話。…不得不悔、但不可留滞。」なお後出の一三七～一四〇条においても、「忿懥」等の心における「留」「滞留」が話題とされている。

（6）「不消化」「消化」は消去する、消失する。『語類』巻

七五、一一四条、黄榕録（V 1937）「變化二者不同。化是漸化、如自子至亥、漸漸消化、以至於無。如自今日至來日、則謂之變、變是頓斷有可見處。」

（7）「無留滯、則此心便虚」「虚」は、空虚、空っぽ。余計な夾雑物が混入残存していないこと。『河南程氏遺書』巻一五、一七七条「如何爲主。敬而已矣。有主則虚、虚謂邪不能入。無主則實、實謂物來奪之。」

（二〇一四年十月一日受理）

（うさみ　ぶんり　京都大学大学院文学研究科教授）
（おがさ　ともあき　京都大学高等教育研究開発機構非常勤講師）
（こがち　りょう　京都大学文学部非常勤講師）
（しょう　こん　武漢大学歴史学院講師）
（なか　すみお　京都府立大学文学部教授）
（ふくたに　あきら　京都大学大学院文学研究科博士後期課程）

『朱子語類』巻一六（58～131条）、訳注担当者

58～69条	福谷彬
70～79条	古勝亮
80～87条	宇佐美文理
88～95条	中純夫
96～105条	焦堃
106～107条	小笠智章
108～109条	古勝亮
110～121条	宇佐美文理
122～131条	中純夫